
AnswERer

Leonids

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Answerer

【コード】

N3899G

【作者名】

Leonids

【あらすじ】

変態主人公、新谷樹。毎日女の子を追いかけてばかりな彼。その実態は金さえ貰えば何でもやるアンサー！？尚、本編はHP『獅子座流星文庫』の転載です。なので更新が不定期になってるかも。

AR”プロローグ”其の1-1

意識が覚醒する。

今日も何も変わらず朝がやってきた。

朝の日差しはどんな人間にも等しく降り注ぐ。

裕福な人間にも、困窮な人間にも、善良な人間にも、悪どい人間にも平等に朝はやってくる。

もちろん俺のようなくでもない人間にもだ。

だから俺は朝が好きだ。

朝の光は俺も他の人間と同じヒトなのだと思わせてくれる。

「うっし」

俺はパシントと頬を叩くとベッドから降りた。

俺には朝になると起こしに来てくれるような妹や幼なじみはいない。なので『もうっ、早く起きてよ！ 学校に遅れちゃうよ！』的なイベントは発生しない。

ちくせう。非常に残念である。

どうして両親は妹をつくってくれなかったのか。もし俺に妹がいたら、それはもう猫のように可愛がっただろうに……。

「ガツデム」

俺はどこにいるか、生きてさえいるのかも知れない両親に文句を吐き捨てた。

一階に下りて食物を漁る。

一日は朝食をとるところから始めなくてはならない。朝食を食べるかどうかで一日の元気具合が変わってくる。だから、朝食を食べていない人はこれからはちゃんと食べるようにして欲しい。バナナ一本でもいいから食べておけば違うものだ。

と言う俺も買い置きのパンもなく、冷蔵庫の中には雪だるましか入っていないかった。去年、家の前で一人で寂しく作った雪だるまだ。

雪だるまの鼻になっていたニンジンをとってかじる。

腐っていた。

捨てるのはもつたない気がするので、ふたたび雪だるまの鼻にしておく。

仕方ないので早めに家を出て、学校に行く途中にあるコンビニで食料を調達しよう。

制服に着替えて玄関から出る。『カチャジャキガコンツ』とドアがオートロックで何重にも鍵が閉まる音がした。誰かがこの家に侵入しようものなら各場所に備えつけてあるレーザー線で撃ち抜かれることだろう、はっはっは。

とことこと歩いて学校を目指す。まだ朝も早いせいか、周りに生徒の姿は見当たらない。それどころかサラリーマンや胸ドキュンなお姉様OLの姿もない。まるで世界に自分一人しかいないみたいだ。コンビニで朝食を購入する。ついでにエロ雑誌も購入しておく。いやぁ健全な一六歳には必須でしょ。

コンビニから出るとちらほらと道を歩く人たちがいた。時計を見るともう登校や出勤の時間になっている。どうもエロ雑誌を選ぶのに時間をかけ過ぎたらしい。道理で店員が俺を不審そうな眼で見るわけだ。あれほどエロ雑誌コーナーで真剣に悩んでいる学生も珍しかったのだらう。

学校に向かって歩いていると前方に見知った後姿を発見。

私立緑中央学園の薄い赤を基調にした女子の制服、後頭部につけた赤いリボン。

我が経研部こと経済研究部の後輩、桜咲菊だ。桜と菊が一つの名前に混ざってるとはなんてヤツだ、と出会った当時は思ったものがある。

菊はいつもの短いスカートの裾をひらひらと翻しながら学校への坂道歩いて行く。

ああ、なんて無防備な。あれでは誰かに襲われても文句が言えないじゃないか。ここは先輩として後輩に注意しなければならぬ。

ではスニーキングを開始する、大佐。

俺は忍び足でそろそろと彼女に近づいて行った。今の俺の足音はどんな些細な音を集音するマイクでも拾うことはできない。

これこそ樹マジック！ 世界の真理さえ改竄するスーパースペースタクルシヨール！

俺は菊の美尻に手を伸ばした。

しかし、その果実を掴もうとした瞬間。

ゴスッ！

頭に何かが刺さって視界が揺らいだ。

俺はばたりと地面に倒れ伏す。

くっ……一体、何が……。

「だいじょーぶですか、樹先輩」

上から声が降ってきた。見ると菊が心配そうにこちらを見下ろしていた。

「き、貴様……何をした……。簡潔に述べてみる……」

「はい。身の危険を感じたので所持していた物で対象を無力化した次第であります」

菊はえっへんとなし胸を張って学生鞆を見せた。

「その武器は面積の少ない部分を使うと非常に殺傷力のある鈍器に変貌する。以後、その武器の使用権を没収する」

俺は地面に這いつくばって菊を見上げたまま言った。

「でもこれぐらいしないと樹先輩は止められないじゃないですか」

「それがそもそもその間違いだよ、キミィ。私を止めてはならん。そもそも人間は立ち止まるべき生物ではない。常に後より出でる子たちのために成長し続けなければならぬのだ」

「はいはいゴタクはいいです。そんな事よりいつまで見れば気がすむんですか？」

菊はスカートの中を隠そうともせず俺を見下ろしている。

「薄い緑とはこれもなかなか……」

「もう、起きて下さいよ。他の人が見てますよ」

菊は俺の手を引っ張って立たせようとする。だが俺は強固の意志

を持って抵抗した。

「ま、待ってくれ。せめてあと五分……！俺が眼を閉じても思い浮かべられるくらいになるまで……！」

「ブー！ タイムオーバーです。またの機会にご利用ください」

無理やり上半身を起こされ、俺は渋々と立ち上がった。

「改めまして。おはようございます、樹先輩」

「うむ、おはよう、梅」「菊です」

俺がボケたのと菊がツツコミをいれたのは同時だった。

「あー、そうだったな、松」「松でもないです」

さらに俺がボケたのと同タイミングでツツコミを入れる菊。

「……………」

「てへっ」

俺が睨むと菊はぶりっ子のように舌をちよろつと出してコツンと拳で自分の頭をうつ。

「菊りんっていつもこんな早い時間に登校してんの？」

「菊りんって呼ばないで下さい。」

早いですか？ フツーだと思いますよ」

俺と菊は何事もなかったかのように歩き出した。

「そうかな。俺なんかいつも予鈴ギリギリに教室に入ってるから、こんな時間に登校するのが新鮮に感じるけど」

ペラッ。

「先輩みたいにギリギリに登校する人にすればそりゃ早いでしょうね。でもこの時間帯が一番登校してる人が多いですよ。知り合いにもよく会いますもん」

ペラッ。

「そういえば今日クラブあんのかね」

「それは部長に訊かないとわからないですよ。でもあってもなくても同じような部活じゃないですか」

ペラッ。

「確かにあれほど自由奔放に部活動している部活も他にないだろう

な

「部屋にゲーム機がありますしね。誰が持ち込んだんですか？」
ペラッ。

「あれは廉人が何かの賞品で手に入れたものだったと思う。テレビは使ってなかったやつを俺が家から運んだんだ」

「そうだったんですか」

「だったんだ」

ペラッ。

「あのお……ところで樹先輩？」

「なんだい、菊っち」

「堂々と隣でえっちな本を読むのやめてくれませんか」

俺はエロ雑誌から視線をあげた。

「なんだ……菊っちも読みたいの？ ほら、今ちようどいいところだよ。ビール瓶が入るなんて人の体って凄いよね。もうお兄さんドキドキだよ」

俺は開けていたページを菊に見せた。

「うわー。これはキツそうですね」

「今度試してみる？ かなりハードル高いと思うけど」

「いやあ菊はまだ処女でいたいんで拒否させてもらいます。って、そういう話じゃないんです。そういう本は人のいない所で一人で読むものだと思うんですよって話です」

もちろん俺一人ならこんな公共の道路でエロ本を読みながら歩くことなどしない（するけど）。それではただのクレイジーくんだ（クレイジーだけ）。だが菊と二人で歩くことで間接的な羞恥プレイが成立してしまうのだ。うむ、実に素晴らしい樹マジックだ。

だが菊は俺のそういう責めに慣れてしまったのか受け答えも実にさっぱりしたものだ。少しも嫌そうな顔をしない。

「もつとこう『樹先輩のえっちい！ ばか！ なんてもの見せるんですか！』みたいな反応してくれよ。出会った当時はあんなに顔を真っ赤にしてたじゃないか」

「樹先輩に鍛えられましたからね」

と、やはり胸を張る。

「そうか。俺が菊を汚してしまったんだな」

俺は目頭を押さえておいおいと悲しんだ。

「そうですよ。樹先輩は取り返しのつかないことをしたんです。責任とってください」

菊は頬を染め少し唇を尖らせる。

うっわ。やっぱかわええ、こいつ。

菊はかなり可愛い部類に入る。本来ならば恋人の一人や二人は軽々と作ってしまうだろう。だが嘘や曲解が入り混じった噂を持つ経研部の部員であるということが男どもが手を出せずにいる原因だろう。まあ、その噂はあらかた俺がでっちあげたデマなのだが。

しかしそれでも菊に言い寄る男はいるようだ。いつ彼女が俺から奪われてしまうかと思うと焦燥にかられる。なのでいつその場でさっさと自分のものにしてしまおうと思う。

俺は菊の華奢な肩をがしっと掴んだ。驚いたように俺を見上げる菊。

俺はすうと深呼吸してはつきりと言った。

「いやです」「結婚しよう」

俺が言う前に菊は却下した。

「うおおおおおん！ フラれたああ！ 一世一度のプロポーズなのにいいいい！」

俺は運悪く近場にあつた神楽坂さんの家の植木鉢の花をぶちぶちと引き抜いた。

「樹先輩、樹先輩。落ち着いて、落ち着いて」

菊は俺の背中を撫でていた。

平静を取り戻した俺はフツと髪を掻き揚げて振り返る。

「さ・て・は俺の愛を試しているな、菊っち」

「残念でした。試してません。」

だって樹先輩、色んな女の子に声をかけてるじゃないですか。先輩

の告白ほど信じられないものはないですよ」

呆れた表情を見せる菊っち。

「告白じゃなくてプロポーズだったんですけど……。でもまあ、あれは菊りんの俺への愛を試してるんだよ。あれごときで鞍替えする菊りんじゃないよねッ」

俺は少年のような笑顔でビツと親指をたてた。

「試さないでください。嘘つかないでください。菊りんって呼ばないで下さい。」

「だいたい樹先輩は顔がいいんですから、もうちょっと性格を改めればすぐ恋人が見つかると思いますよ」

「顔で決めるような愛なんかいらさないよ！ この新谷樹というエロの権化として生まれたボクが存在自体を愛してくれる人と愛を育みたいんだよ！ 菊りん！」

「とてつもなく困難なことを言いますね、樹先輩」

「いや、俺は分かってるぞ、菊！ 最後には俺の胸の中へきてくれるんだよね！」

「朝からテンション高いですよね、樹先輩。あんまりバカばかりやってると遅刻しますよ」

菊は体ぜんたいで愛を表現している俺を放つてすたすたと歩いていく。

「あははは、待ってくれよ、菊りん！」

俺は砂浜でイチャつくカップルのように満面の笑顔で菊を追いかけた。

「菊りんって呼ばないで下さいっ！」

AR”プロローグ”其の1-2

ガラツ。

「おっはよー！」

教室についた。教室内にはもう既に何人も生徒が来ていて、友達と談笑している。

こう言っちゃなんだが……。

俺は友達が少ない！

おっと失礼。つつい心の声が大きくなってしまった。

自分でも顔はいい方だと思う。いわゆるイケメンというやつだ。性格も明るくて誰とでも気が合うはずだ。だというのに俺に友達が少ないのは、とても不思議な現象だといえるだろう。モルダー捜査官でもこの謎は解けまい。ははは、ファイルを編集しなおすんだな、モルダー！。

はっはっはと笑って俺ははあとため息をついた。

「んお？ こんなところで猿みたいに反省ポーズしてどうしたんだ。つか、えらく早いな、樹。今日は寝坊しなかったのか？」

と、そこで数少ない俺の友達の秋原廉人が声をかけてくる。

廉人は身長が俺と同じくらいの男だ。俺と同じ経済研究部に所属している。今風然としたヤサ男で、よく女の子と街で遊んでいるのを見かける。そう、信じられない話だがこの男はやたらとモテる。

「俺はいつも早く起きてる。ただ知的階級な俺様は朝のブレイクドコーヒーを楽しんでると遅刻ぎりぎりになってしまふのだ。これだから日本人って奴は働き蜂だって言われるんだ。もっと時間に余裕を持って楽しまなきゃ人生損だよ、チミイ」

「壊れたコーヒー？ 言ってるよ、自称知的階級」

廉人は俺の言葉を完全に受け流しているようだった。これだから無駄にスルースキルの高い奴は困る。

「樹、昨日のニューズ見たか？」

「ニュース？ いや、見てない。昨日は忙しかったからな」

俺は自分の机に腰かけた。廉人は俺の前の席の椅子に座る。背もたれに両腕を乗せて、跨るようにして座っていた。

「昨日、賊がMSNに侵入した」

「MSNっていったら日本が誇る大企業だな」

俺は記憶を辿るようにアゴに手をあてて呟く。そんな俺の様子と打って変わって、廉人は真剣な眼差しで俺を見て言った。

「アンサラーだ」

「またその話か」

俺はうんざりとした表情を見せる。

「だって、そうとしか考えられないだろ？ MSNに侵入なんてちよつとやそつとでできる芸当じゃないぜ。アンサラーは実在するんだよ」

「アンサラー……ねえ……。にわかに信じられないけどな」

「アンタ、経研部のくせにまだアンサラー否定してるわけ？」

そこに新たな声加わった。声がした方を振り向くと、そこには制服を身にまとった女子生徒が立っていた。

「あ、水崎さん。おはよう」と廉人が笑顔でその女子生徒に挨拶する。

「よお、ツンデレ」と俺も挨拶した。

「誰がツンデレよ！ 一つ私がアンタにデレたって言うのよ！」
バンツと机を叩く水崎。

「隠さなくても俺はちゃんと理解してるからな、水崎！ 俺もお前のことを愛してる！」

顔を真っ赤にしたツンデレラこと水崎は手をボキボキと鳴らした。
「……ちよつとヴァルハラ観光旅行にでも行ってくる？」

「計画性の無さそうな旅行は遠慮しておこう。いつ帰れるか分からないからな」

両手をあげてハハハと爽やかに笑ってみせる。

「旅先で永住したら？」

水崎はとびつきりの笑顔を見せていた。しかし、額にぴきぴきと青筋がたっているのを俺は見逃さなかった。

「相変わらず二人とも仲がいいな」と廉人が火に油を注ぐような無責任な発言をする。

「誰がつ！ どう見たら仲良く見えるっていうのよ！」

水崎は廉人の胸ぐらを掴んでがくがくと揺さぶる。

「落ち着けよ、水崎。もう俺たちの関係を皆に話してもいい頃じゃないか」

なので俺はさらに油を注いでみた。

「アンタとの接点なんてクラスメイト以外にこれっぽっちもないわよ！ 誤解されるような言い方すんな！」

「ばこんっ。」

頭をスリッパで叩かれた。すぐにリアクションを返してくれる水崎はなんてからかいがいがある奴なんだろう。

これほどいじりがいのある奴も珍しい。

「それで……昨日の事件の話をしていたんでしょう？」

「なんだ。水崎も知ってるのか」

「知ってるも何もニュースで流れてたじゃないの」

「たぶんその時間はアニメ見てた。ちなみに『マジカル きゅ〜と！きづなちゃん』な」

俺がそう答えると、水崎は親指でこめかみを押さえた。

「あんた……高二にもなってアニメ見るのやめなさいよ」

「俺だけじゃない。廉人も見てる」

「見てねえよ！ 適当なこと言うなよ！」

廉人は机をバンツと叩いて否定した。

「そんなのどっちだっていいわよ。」

とにかく、MSNに何者かが侵入して警察が出動したって話よ」

「犯人は捕まったのか？」

俺は二人に尋ねる。

「捕まってるわけないだろう。相手はアンサーだぞ？」

さつきから二人が何度か口にはしているアンサラという存在。それは非公開で存在しているといわれる言わば“何でも屋”のことだ。依頼に必ず応えるということから“アンサラ”と呼ばれるようになったらしい。

だがしかし、アンサラの存在は噂でしかない。そもそも政府はそんな存在を認めていないし、アンサラが存在する証拠なんてゆうのももちろんない。ようするにUFOとかUMAと同じなのだ。存在するかしないか分かっていない。

先ほどアンサラのことを“何でも屋”と言ったが、廉人に聞く限り本当にそれだ。殺し、盗み、情報集めと金さえ払えばなんでもやるとのこと。

よくある都市伝説の一つだ。

国を国として経営できなくなった借金大国の日本は大企業を頼った。不甲斐ないことに大企業のバックアップによって国政を運営しているのだ。そのため大企業が政治に絡み始めたのは記憶に新しい。

それからしばらくして、いつの間にか日本では企業同士が互いに壮絶な争いを繰り返す時代になったのだ。あの企業の重役さえいなければこちらの運営がうまくいくのに。そんな思いは誰もが抱いているだろう。そんなことは俺でも分かる。そしてそれを実行してくれるのがアンサラという存在、ということらしい。

それも噂が大きくなりすぎたのかそのアンサラとやらは国境さえも超えて活躍しているのだとか。だから政府や大企業はひたすらアンサラの存在を否定し、隠し通しているというのである。

「アンサラが実在するとしたら超人だぜ。そんな奴らいるわけないだろ」

俺は呆れ気味に言ってやる。

「アンサラはいるって！」と廉人が断言する。

「アンサラが実在するかどうかはともかくとしても、企業や政府間で暗躍してる人間がいるのは確かよ。」

有名な事件をあげると竜田鉄鋼の社長が本社ビルの屋上で死亡していた事件や九条原コーポレーションの重役の爆死事件、アメリカSFG取締役が狙撃されて殺されたことだつてあるわよ。

これ全部犯人が見つかってないどころか目撃者さえいないんだから「あの事件で株価がえらく下がったよな、どの企業も。つて経研部でもないのに詳しいな。もう入部しちまえよ」

「たまには樹も良いこと言うじゃないか。水崎さんも経研部に入つたら？」

俺の言葉に廉人も水崎に入部を勧めた。

「い・や・よ。同じクラスだつてだけでも、うんざりしてるのになどうして部活まであんたたちと顔を合わせなきゃならないのよ。」

それにあたしが興味あるのは経済の流れなんかじゃなくて、アンサーと呼ばれる存在そのものだもの」

「そうか。せいぜいアンサーに暗殺されないように気をつけろよ。おまえは可愛いからな」

「思つてもないことを……。」

まあ、いいわ。そのうちアンタにアンサーの存在を認めさせるんだから」

そう宣言すると水崎はすたすと自分の席に戻つて行った。

「本気で言っているのにどうしてみんな俺の言葉を信じないんだ？」

「自分の胸に訊いてみるよ」

廉人はやれやれと首を振っていた。

AR”プロローグ”其の2-1

放課後になると俺は部室に向かった。

部室に行ったところで特にやることもないのだが、とりあえず顔は出しておくのだ。

家に帰っても暇だしね！

「ちーっす」

俺は部室の扉を開けた。

部室には一人の少女がいた。その少女はパイプ椅子に座ってノートパソコンを覗き込んでいる。

経済研究部の部長である川澄みちる先輩だ。軽くウェーブがかった長髪が大人っぽい先輩をさらに大人にみせている。

みちる先輩は俺に気がつくともパソコンから顔をあげて柔らかい笑みを見せた。

「こんにちは。新谷くん」

「あなたの恋人、新谷樹。ただいま参上いたしました」

「あらまあ。私ったらいつの間にか素敵な恋人さんを捕まえていたんですね」

少し驚いたように言うみちる先輩。

「ええ、そうですよ。俺はあなたのものになるために生まれ、あなたは俺のものになるために生まれたのです。その二人が出会えば恋に落ちるのは必然っ！」

びしっと親指を立ててみせる。

「でも私、浮気や不倫は大嫌いなんです。もし私が現場を見たらきつと嫉妬にかられて新谷くんを包丁で刺してしまうわ」

みちる先輩はあくまで笑顔だが、彼女が本気で言っているのだと俺は理解していた。

「ああ、なんて残酷な運命だ。みちる先輩。俺たちはどうやら愛し合っつてはいけないみたいだ。別れましょう」

「あらあらまあまあ。残念ですね。せつかく可愛い恋人ができたと思っただんですが……。フられてしまいました」

本当に残念に思っているのか怪しい笑顔だが俺はあえてそこには触れないでおく。

「ところで先輩、何をしていたんですか？」

「株価を見ていたんです」

「ああ、どうなってますか、株価。儲かってます？」

うちの経済研究部は経済の研究として株価の購入をしているのだがそれが部活動ともいえよう。なので部費のほとんどが株の購入に使われている。初期投資は十万程度だったのだが、今ではとんでもない額になっていた。株というのはやりようによっては素晴らしい金儲けになるのだと分かる。しかし、リスクもちろんある。みちる先輩いわく株はどうやって儲けるのかではなく、どうやってそのリスクを最低限にするからしい。そうしていれば割合お金は増えていくのだとか。

と、言っても言うは安く行うは難しだ。そう簡単にいくものではないだろう。

そんなみちる先輩がほとんど株の購入と売却をしているのだが、先輩一人で部費を十倍どころか百倍にしてしまうのが彼女の凄いとこである。

「駄目ですねえ。昨日の事件のせいかなMSNの株価が急に下がってしまいました」

「ありやいや、もしかして損しちゃいました？」

「多少は……ですね。ニュースで流れる前にネット上で情報を仕入れていたんです。それを見て株価が下がる前に売ってしまったので損害は最小限に抑えられたはずですよ」

なんとも頼もしい先輩だ。

「あ、そうだ、新谷くん。今日、暇かしら？」

「特に用事はないですけど。デートのお誘いですか？俺はもちろんOKですよ。どこに行きます？この時間からだと映画を見て晩

御飯を一緒に食べてってコースですかね」

「ちよつと調べものをしてもらいたいんです。アンサラーはご存知ですよ？」

俺の話にはまったく触れることなく会話を続けるみちる先輩。

「アンサラーを調べるんですか？」

「世の中ではかなりの話題になってるらしいじゃないですか。経済研究部としては経済に影響を及ぼすものが、どのようなものなのか調べる義務があります」

「まさか先輩もアンサラーなんてものを信じているんですか？」

「結論から言うと私は半々ですね。ですが、もしいたとしたら経済にとつては脅威となるのは間違いありません。」

なにせアンサラーと呼ばれる人たちは今回のMSNの事件のように一夜で株の値を激動させる出来事を起こすのですから……。しかも、故意に……です。

まあ、それは建前で私の心情としてはアンサラーはとても興味深い存在だと思っています。実在するとしたら驚くべき事実ですし、実在しなくてもなぜそう騒がれたのか真相を追究しなくてはなりませんし。それに夢があるじゃないですか。もしアンサラーという人たちがいるのなら一度会ってみたいものです」

「どちらにしても話題にはなる、ということですね」

「そういうことです。それで調べていただけませんか？」

「あまり気は乗りませんがねー。だけど、大好きなみちる先輩に言われたらやるしかないでしょう」

「あらまあ。有難うございます」と微笑む先輩。

「それじゃあ大國図書館にでも行って調べてきますかね。何か面白いものがあればファイリングしておきますね」

「流石、新谷くん。頼りにしてますよ」

にこりと笑顔をみせる先輩。それを俺は手で応答して部室を後にした。

AR”プロローグ”其の2-2

大國図書館とは国が運営する図書館である。巨大なデータベースはインターネットに接続されており、リアルタイムで情報を収集し増幅していく、あらかたの情報はここに来れば得ることができのだ。

その大國図書館に俺は訪れていた。言うまでもなくみちる先輩に頼まれたアンサラーについて調べるためだ。しかし俺はあまり乗り気ではなかった。それに存在するかどうかも確かではないものの情報なんてどれだけ集められることやら。

俺は検索機器の前に座り収集を開始した。

すぐに膨大な量の情報が検索に引つかかった。いや情報と呼ぶにはあまりにもお粗末なものだ。アンサラーは実は宇宙人であると掲示板に書かれているかと思えば、雑談チャットではアンサラーは超能力者だ、と話し合っている。要するに噂の域を出ないのである。だが、概して言われているアンサラーというものがどういった存在かは分かった。

アンサラー。都市伝説。大金の報酬を受け取るかわりにありとあらゆる願いに応える何でも屋。

それが基本的なアンサラー像のようであった。

俺はその後、アンサラーが関わっているといわれる事件の数々を調べファイリングしておく。

これで見ちる先輩に面目はたつだろう。

「ん~~~~」

俺は伸びをした。何時間も椅子に座っていたせいか体のふしぶしが固くなっている。ふと窓から外を見るともう真っ暗になっていた。バーチャルカードPCで時間を確認すると、もう八時を超えている。

うおおおおお！ なんてことだ！ アニメを見逃してしまった…

…！

俺はこれ以上被害が拡大しないうちに帰宅することにする。

図書館から外に出ると口から白い息が出た。冬が近づいてきているせいか、夜になると見事に寒くなる。

そんな寒い中、体を縮こませて帰路を歩いている時だった。

街頭の下に一人の女性が立っているのが目に入った。

腕を組んで電信柱に背を預けている。

綺麗な女性だ。この国の人ではないのか。ここからでも分かるほどサラサラの金髪が肩まで流れている。

不意にその女性が口を開いた。

「そのあんだ」

俺は周りを見回してみた。辺りに人は俺しかいない。つまりこの美しい女性は俺に声をかけているのだと、俺のスーパーコンピューターが答えを弾き出す。

これは……！ まさか逆ナンパ！？

男が一度は憧れるシチュじゃないですか。神様ありがとうございます。悔い改めます。

「あんたが新谷樹ね」

天に向かつて手を組んでいた俺はつい訝しげな顔をしてしまう。

あれ？ なんでこの人、俺の名前

と思つたその刹那！

その女性は風の如き速さで俺に肉薄してきた。その手に持っているのは

コンバットナイフ！？

咄嗟に学生鞆で首を隠す。学生鞆にナイフが刺さり、貫通して自分の目の前で刃先が止まる。

おいおいおいおいおい！ 冗談じゃない！ こいつマジで俺を殺す気かよ！

俺は鞆をひねることで刺さったナイフを奪い取る。だがその女の攻撃は終わっていないかった。鞆をどけて視界が開けると女はすでに回転蹴りのモーシヨンに入っていたのだ。

こいつ……慣れてやがる！ ナイフでの攻撃は大技に繋げるためのいわば捨て攻撃……！ 最初から二段構えの攻撃だったのか！ つまり、この蹴りが本命……！
ぎゅるんっ！

回転をうまく利用した女の鋭い蹴りが俺の顔面へと迫る。それはただの回し蹴りではない。人の脳に直接影響を与え、息の根を止める蹴り方だ。もし首筋に入っても血管を圧迫させ脳震盪を起こし結果的には死に至らしめるだろう。

ズガンッ！

左からきたその蹴りを俺はなんとか肘で止めた。鈍い感覚が腕を通して肩まで響く。

それを俺が防くと女は後ろに跳んで間合いを開けた。

この衝撃……つま先に金属を仕込んでやがったか……！ これじやあ左腕が痺れて使いものにならない。腕でガードしてたら骨もつていかれてたか……。
どうする……？

俺のそんな思考をよそに女は急に構えを解いた。

「なるほど。それなりの力量は持っているみたいね」

「貴女みたいな綺麗なおね〜さんがつま先に鉄板なんて仕込んでる……。それ最新のファッション？」

俺がそう言ってるやると女はつま先で地面を蹴る。するとゴツゴツと金属がぶつかる音がした。

「もう気づいてるでしょ？ 私はアンサラーよ。といっても国家所屬だからガーディアンと言った方が理解しやすいかしら？」

「ア、アンサラーだって……！？ 本当に存在していたのか！？」
俺は大げさに驚いてみせる。

「……………白々しい」

「それでアンサラー……じゃなくてガーディアンのお姉さんが俺に何の用？」

「依頼を持ってきたのよ。国家直々の依頼をね」

「おいおい、学生の俺にか？」

「いいえ。アンサーである」

ひゅおおおお……。

冷たい風が俺と女の間を吹き抜ける。

「貴方に」

Answer - 1 " ガーディアン " 其の 1 - 1

俺は自宅へ戻ってきていた。

冷たいシャワーを浴びて頭を冷やす。冷静になって考える必要があった。

彼女 ガーディアンが話したことはそれだけの時間を必要とする内容だったのだ。

俺はつい先ほど、彼女と話したことを思い出す。

『 いいえ、アンサーである、貴方に 』

なんとなく分かってたけどバレてる上での急襲だったか……。

『 今、依頼って言いました？ 』

『 ええ 』

俺は彼女の両の手をがしりと掴んで、瞳を見つめた。

『 受けます。貴女とならどんな困難な任務も達成してみせます 』

『 暑苦しいわね。離れてくれない 』

情熱的な熱視線の俺とうって変わって彼女は冷ややかに俺を睨んでいた。

どうやら恥ずかしがり屋さんらしい。

俺はそう勝手に納得すると仕方なく手を離れた。

彼女は微妙に俺から距離を置きながらうんざりとした様子で金色の髪を掻き揚げる。

『 依頼の話をしてもいいかしら 』

『 どうぞ、マドモアゼル 』

紳士的スマイルで話を促す。

『 ……………。まあいいわ。これ見て頂戴 』

彼女はひゅっとこちらへ何かを放った。

手で受け止めその何かを見てみると、それは手の平サイズのチップだった。

データチップだ。昔で言うところのCDやDVDの役割をする機器である。この中には従来のそれよりも遙かに膨大なデータ量を含蓄することができるのだ。今では一般化されていて低価格で販売もされている代物だ。しかしCDやDVDがそうであったのと同様にこれ単一では何の役にも立ちはしない。これを読み込む機器が必要なのだ。

詰まる所のPCである。PCとはパーソナルカードのことで、これもまた昔で言うならば携帯電話というのが適当だろうか。だがその機能性と実用性は携帯電話の比ではない。電話、メールなんてものは当然のこと、ミュージックプレイヤーやゲームと様々な機能が充実した機器なのである。

今の現代、パーソナルカードを持っていない人間などほぼ皆無だろう。なぜならばこのパーソナルカードは一種の身分証明書のようなものにもなるからだ。学生証明書からレンタルビデオ店の会員証まで多くの証明書を登録することができる。

そんな大事なものを持ち歩くことに抵抗を感じる人もいるだろう。そのことを考えてか、パーソナルカードは本人の指紋や声紋などでのしか起動しない設定になってあるのだ。例え盗まれたところで本人がいなければただの薄っぺらい電子機器でしかない。

まあ、一部の地域の人間は持ってないだろうが……。

それはまた……別のお話。

俺は昔あった機関車アニメ(?)のナレーション風にまとめて、データチップをPCに差し込む。

その中にはいくつかの画像と資料が入っていた。

その資料の表題には『ヒューマンインター事件』とある。画像を開けてみて俺の心臓がどくんと大きく鼓動した。

なんというか……その画像には男の死体が写っていたのだ。しかもただの死体ではない。

俺は一目見ただけで理解した。

これは“異常な死体”だ。

かろうじて人型であるが、その節々はあまりにも欠損している。しかもその欠損具合は刃物や銃器といった道具を使っていないようだった。なぜ俺がそう思ったのかというと、とれた腕から筋肉が糸のように伸びきってはみ出ししているからである。

切断したのではない。

まるで引き千切られたようだ。

考えられないことだった。人間の筋力ではヒトの腕を引き千切るなんてことは不可能だ。

どんな方法であったにせよ、これはあまりにも人間外の殺害方法であることに違いはない。

他の画像もどうせこんな死体が写っているんだろう。

俺はその一枚だけで他の画像を見る気をなくすと、PCから視線をあげて女の顔を見た。

そしてニヒルな笑みを浮かべて言うてやる。

『……吐いていい？』

『……呆れた。……死体を見るのは初めてです、なんて言わないわよね？』

こんなひどいの見たら誰でも吐きたくなると思うよ、おねーさん！

『これ……なに？』

『分かるでしょ。それを創り上げたのは人間であって“人間”じゃない』

『少なくともこんなこと俺にはできないよね。技術的な意味でも、人間的な意味でも』

『そこに写ってる死体は企業の重役や政治家。職業はバラバラよ。だけど一つの共通点があるわ』

『へえ、興味深いな。でもそれよりも興味深いのはキミのことなんだけどな』

キラッと白い歯を光らせてみせる。

『それは国家政府の重要な役人でもあったってことよ』
はい、スルー頂きました！

缶があったら『ちえっ』とか言いながら可愛く蹴飛ばしたい気分だ。

『政府としてはこんなことをした馬鹿を放っておけないわ。』

そこで貴方への依頼』

彼女が言いたいことを読み取って先に口にする。

『犯人を捕まえろって？』

『そういうこと』

『だが断る』

俺はどこかの漫画家のようにきっぱりと断言してやった。

『この俺が最も好きなことの一つは自分で強いと思ってる奴に「N』

』と』

『そういうわけにはいかないわ』

ああん！ まだ台詞の途中なのに！ ガーディアンったら恐ろし

い子！

Answer - 1 " ガーディアン " 其の 1 - 2

『あのー、申し訳ないんですけど俺は小さい依頼専門なんですよ。国家政府なんてところから来るような重要な依頼は他のアンサラーを当たって欲しいんだけど……』

『そうね。私もそうしたいわ。あなたがどんな人間なのか、今までこなしてきた仕事の数々を調べさせてもらったもの』

大変遺憾なことではあるが、どうやらアンサラーの辞書にプライバシーという単語はのっていないようである。

そこで俺はハツとした。

こうなつてくると俺の部屋にあるエロ雑誌の山も気づかれていないかもしれないじゃないか！

『……なに頬を染めてるのよ。気持ち悪いわね……』

俺がくねくねと体をよじらせているのを見てさらに半歩退くお姉さん。

『……ち、違うんです……！ 健全な一六歳には仕方が無いことなんです！ みんな男の子は持つてるもんなんです！』

俺は拳を握って必死に訴えた。

『は、はあ？ 一体、何の話よ……』

眉を曲げて訝しげに俺を見ているおねーさん。

『新谷樹。高校二年生。三年前にこの街に引越してきてるわね。アンサラーとして政府に登録されたのはその時から。情報の工作、奪取が一七八件、窃盗が五六件、殺しが0件。任務中に死人を出したことがないどころか、負傷者さえほとんど出してない。』

とんだアンサラーね。探偵ごっこの方が似合ってるわ』

彼女は肩をすくめてみせた。

探偵ごっこって……。まあ確かに本人もそのつもりなんだけどね。

別に好きでアンサラーなんてやってるわけじゃないし。悲しいかなこの世知辛い世の中は愛だけでは生きていけない。両親のいない俺

はどうしても先立つもの　要するに金のために働かなければなら
ないのだ。

『殺さずが信条なもんで。別に某剣客漫画を読んでそうしようとか
思ったわけじゃないよ?』

『はあ……マンガって……。どうしてあの人があんたを指名したの
か本当に理解できないわ。あんたみたいな安っぽいアンサラーと組
むなんて不安で仕方ないけど、命令は絶対。辛いところね』

『あの人?』

『依頼人よ。私はあんたに調べさせるよう頼まれているのよ』

ほう。面白いことをおっしゃる。こんな厄介事に俺を関わらせよ
うとしている人間がいるとな?

是非、ぶん殴ってさしあげたい。

『誰に? 嫌がらせの電話とかしないから教えてよ』

『教えるな、と言われているわ』

『S・ソルーマンだろ!』

俺はあてずっぽうに依頼主だと思われる人物の名前を挙げてみた。
隠されると答えを突き止めなくなるのがアンサラーの悲しい性で
ある。いや、にんげんのサガか?

『あのねえ……教えるなって言われているのに言うわけないでしょ』
彼女は微動だにしない表情でやれやれと首を振る。そりゃそうだ
ろう。動揺して真実が顔に出ちゃうようじゃアンサラーなんてやつ
ていけない。俺もポーカーフェイスには自信があったりする。

だがしかし! この新谷樹の前では嘘なんて無意味!

『違うか。じゃあ左柳孝之助だろ! 国家政府の役人だし』

『だから言わないって』

再び名前を挙げて彼女の表情は微動だにしない。

『大穴狙いでスマツペの中井くん』

『どうして日本のトップアイドルがそんな依頼をあんたに出すのよ
! ふざけてるの!?!』

良かった。ツッコミはちゃんとできるらしい。

彼女は鼻息も荒く肩をいからせていた。

あまりレディをからかうのもなんなので予想できる本命の名前を
言ってみることにする。

『あとは……和雅・T・フランベルクとか』

『はあ。いつまでやる気よ、あんた……』

彼女はうんざりのため息をついた。

よくため息を吐く方だ。何が原因かは知らないが心労が絶えない
ようである。是非癒してさしあげたい。

そして、俺の鼻は敏感に嗅ぎ取っていた。

『あー、やっぱり和雅さんなんだ。和雅さん元気？ ワイン飲んで
る？』

するとおねーさんは瞳の奥に色を灯らせて俺を見た。

彼女がやっと初めて俺という存在を“見た”のだ。

『勝手に話を進めないでよ。依頼人がその人だとは言っていないでし
よ』

顔には出ていないが、内心では俺が当てずっぽうで話を続けたの
か、それとも本当に分かったのか目まぐるしく思考していることだ
ろう。なかなかポーカーフェイスがうまい人だ。そして美しい。こ
こ重要。

『あー、気にしない、気にしない。俺って真実に敏感でさ。基本的
に嘘とか隠し事とか通用しないんだよ。』

そんなことより、こんなむごい事件、ニュースはもちろんナビゲー
ターからも聞いたことないんだけど？』

依頼人の件でこれ以上つつこまれるのが嫌だったのか、彼女は俺の
話題転換に気にせずのってくる。

『でしょうね。情報規制が敷かれているもの。国民はこんな事件が
起こっていることなんて知らないわ。表向きは事故死や病死してこ
とになってるし。ま、さすがに最近じゃ不審に思っている人もいる
でしょうけどね。』

このことは政府の人間でもごくごく一部しか知らないわよ』

そんな重要な資料を俺に渡していいのかな。俺に対する信頼の表れか、それとも絶対に俺を関わらせることができると確信しているのか……。

普通に考えたら前者だよなー、うん。

『確かにこんなこと二ユースでやったらみんな外に出られなくなっちゃうもんな。にしても、こんな殺し方を……人がねえ……』

その殺し方には何も感じられなかった。憎しみも怒りも望みも憂いも戸惑いさえも感じない。

これが何を意味するのか

『それが色々と納得できないのよ、この事件。犯人の手がかりも目的も凶器もね。とにかく今までにないような異常な事件なの。その中で何が一番異常かという死体についた唾液ね』

唾液……？

俺はバラバラになった肉片に再び視線を落とそうとしたけどやめた。

そしてこの事件の名を思い出す。

“ヒューマンインター事件”。

『おいおい、まさか……食べちゃった？』

『その通りよ。犯人は被害者の肉体を食べているわ』

『わぁおクレイジー』

『それだけじゃないわ。事件数もクレイジーよ。今月に入ってから既に七件。今までに三四件もの同じ事件が発生している。三日に一件のペースよ。しかもこの辺りの地域一帯だけだわ』

『つまり、犯人はこの辺りに土地勘がある人間。それだけが手がかりか。俺に白羽の矢が立ったのも俺がこの街に住んでいるから……？』

俺はふうむと唸ってあごに手をやる。

『それもあるわね。相手に土地勘があるのならこちらにも土地勘のある協力者が欲しいもの。もう一つの理由があるとすれば、さっきも言ったけどある人からたつての希望があったからよ。』

「……もう一度訊くわ。この犯人を捕まえる依頼、受けてくれる？」

俺は沈黙で返す。正直言って深くは関わりたくない。

しかしなぜだかこの事件に俺は興味を惹かれ始めていた。

Answer - 1 "ガーディアン" 其の1 - 3

『……まあいいわ。答えが出たらここに連絡して』と彼女はPCを取り出す。

俺のPCを彼女のPCに向けると、ピッピとモニターでアイコンが点滅する。PCが彼女の連絡先を受けとったのだ。

『エリ・F・橘……。ありや橘だった？ 日本苗字ってことはハーフ？』

俺は受け取った連絡先を早速開いていた。

『たぶんね。分かっているとは思うけどこのことは他言無用よ』

『分かっているって、橘さん』

『日本苗字で呼ばないでよ！ それ恥ずかしいんだからっ！』

橘さんがなぜかいきなり怒りだした。

まるで全国の橘姓が恥ずかしいみたいな言いようだ。とりあえず全国の橘さんに謝って欲しい。

俺は訝しげな顔で問うた。

『どうして……？ 良い名前じゃないか、橘さん。例え本人に日系の血が入っているように見えないから違和感バリバリだとしても気にするなよ、橘さん。橘さんは橘さんじゃないか』

『理由しつかり分かっているじゃないのよ！ 呼ばないでよ！ っていうかアンタ、わざと言っているでしょ！』

橘さんは右手を拳に変えてプルプルと震えていた。

『怒るなよ橘さん。橘さんの名前は橘さんの橘さんによる橘さんのための名前じゃないか、橘さん』

『キーーーーーッ！』

橘さんは奇声を発すると金髪を振り乱しながら地団駄を踏み出した。

おお、なかなかからかい甲斐のある人だ。リンカーンもきつと微笑んでるよ。

『もう私は行くから!』

すたすたと歩き始めたので俺はすぐに引き止めた。

『あ、待った。最後に一つ質問』

『なによ!? 次言ったら殺すわよ!?!』

肩をいからせたまま振り返るたちは エリさん。……まだ死にたくないんです。

『彼氏いるんですか?』

『は、はあ?』

今日一番の不審そうな顔をする彼女。

『大事なことなんです。俺のやる気に関わるんです』

そして今日一番の真剣顔をする俺。

『こんな稼業やってたら男も逃げていくわよ』

きましたよ、これ! こんな美人がフリーですよ!?

俺はすぐさま頭をさげ、右手をすつと差し出した。

『俺と……!』

付き合ってください!』

『死んでもイヤ』

きっぱり!

そしてすたすたと帰っていくエリさん。

んーむ、水崎と良い勝負しそうなツン具合だなあ……。これはデレ期が楽しみだ。

俺はデレ期に入ったエリさんを妄想しながら帰路へとついたのであった。

その際、道行く人が俺を避けて通ったり、ひそひそと話したりしていたが、それはまた……。別のお話。

俺は風呂場から上がると、黒いスーツを着込んだ。それは俺がアンサラーとして動く時のスタイルなのである。

別に格好つけているわけじゃない。これはシリアスモードへと自分を移行させる暗示なのだ。

念のためにもう一度言うが、決して格好つけてるわけではない。俺はアゴに手を沿え鏡に向かって『フ』とクールに笑ってみせた。よし、カツコイイ。

時計は深夜二時を指していた。世の中が寝静まったこの時こそが、アンサラーの活動時間帯だ。人目を避けるのは基本中の基本なのだ。黒いスーツじゃ逆に目立つとか思っちゃダメ。絶対。

三日に一人ペース。エリが言っていた言葉を思い出す。まだ依頼を受けると決めただけではないが、あまりにも異質する事件に俺は興味を惹かれていた。

それに　と俺は一昨日、俺宛で届いていたキスマーク　もと
い手紙を見る。

送り主不明の謎の手紙だ。^{キスマーク}

そこに書かれていた内容、そしてガーディアンからの接触。あまりにタイミングが良すぎるではないか。

興味を惹かれると同時にこの事件はとてつもなく嫌な感じがしていた。

ズキツ、と頭が痛み一人の男の姿が脳裏に思い浮かぶ。

「ええい、出てくるな。おっさんに興味はない」

俺は自分に言い聞かせるように言うと、思い浮かんだ顔を腹の底へと押しやった。

とりあえずツバキたんに会いに行くか……。

おっさんの代わりに俺の愛しいナビゲーターの幼い顔を思い出してにへらと笑みを浮かべる。

昨日、某企業からパクってきたデータチップを胸元のポケットに入れて、俺は鼻歌混じりに夜の街へとくりだした。

Answer - 1 " ガーディアン " 其の 2 - 1

アンサラーが情報を求めて行く場所といえは決まっている。何を隠そうナビゲーターのところである。

そうナビゲーターだ。アンサラーには依頼者とアンサラーを繋げるナビゲーターと呼ばれる存在がいる。基本的にアンサラーはナビゲーターを通して依頼を選び仕事をするのだ。その他にもナビゲーターは依頼された仕事の情報を収集してくれたり、アンサラーにとってなくてはならない存在なのである。あんまり表立って動くことがないので、一般的な噂には出てこないが、ナビゲーターはアンサラーにとって大変重要な役割を担っている。

噂なんてそんなもんである。

例えば噂だけならばアンサラーという存在はお金をもらえば誰の言うことでも聞く一匹狼なイメージが強いが、実際はまったく別。

アンサラーは国家政府の登録制なのだ。国家政府に認められなければアンサラー業は行えない。もちろん認証無しに仕事してるような野良も存在するが。

ぶっちゃけ政府の犬なんだワン。

そして俺は列記としたアンサラーだ。なのでもちろん俺にもナビゲーターがいる。

ひゅおおおお……。

冷たい風が閑散とした街並みを吹き抜ける。

ヒビ割れた壁、割れた窓。

電気が通ってないせいか、辺りは真っ暗で陰気な雰囲気よりも層強くしている。

そう、ここは普通一般人が訪れるような……ましてや住んでいるような場所ではない。

貧民街。人々に、ここはそう呼ばれていた。日本が破産したことによって、更なる広がりを見せた生活落差。それは最終的にこのよう

な場所を作り出すに至った。

ここに住む人は十分な教育も生活も保障されていない。そのため街が発展するわけがない。

なので一般人はこんなところに寄り付かないわけだ。そして寄り付かないも一つ一つの理由。それは暴力、窃盗、殺人がここでは日常茶飯事だからだ。無法地帯もいいところなのである。

「ゴホツゴホツ……」

近くの壁に寄りかかって座っている男が苦しそうに咳き込む。

ここに住んでいる人間は今日食べる物を買う金もない。ましてや病院に行くお金なんてあるはずがない。

と、そこで俺のスーツの裾がぐいぐいと引っ張られた。振り返るとそこに少女が立っていた。

ボロボロのセーターを着た少女が俺を見上げている。

「たべもの……」

「……………」

「たべものくれたら……なにしてもいいよ」

日本はどこで道を間違えたのだろう。

俺は少女の目線まで屈んで、手を握った。

少女は何か掴まされたことに気づいて手に眼をやる。

「ごめんな。おにーさん、これしか持ってない」

少女は手の平のものをみると、服の中に隠してどこかへと走り去った。

救われない。こんなことしたって彼女はいつしか餓えに苦しむだけだ。ちよつとした期間を凌いただけ。

俺はため息を吐いて、再び歩きだす。

目的地にはすぐに辿り着いた。

そこは半分崩壊している寂れたビルだった。その一室に彼女はいる。

ノックをして勝手に部屋にあがる。

しかし部屋に入っても誰もいなかった。

どこかに出かけちゃったのかな？

仕方ないから洋服ダンスでも調べて時間を潰そうと思ったその時だった。

「む、樹ではないか。仕事を探しにきたのか？」

幼い女の子の声でした。

振り返るとコーヒーカーップを持った年端もいかぬ女の子が立っていた。

くりんくりんの大きな瞳にきゅっと小さな唇。焦げ茶の髪を後ろで結ってポニーテールにしている。彼女がナビゲーターのツバキだ。本名かどうかは分からないがここではそう呼ばれている。

どうやらキッチンでコーヒートを淹れていたらしい。

危なかった。タンスを調べているのを見られでもしたら俺は職をなくすところだった。

「仕事に熱心になってくれるのはいいがな。今はお前が気に入らぬ仕事はないぞ」

妙に大人らしい喋り方なのは彼女が幼いからといって舐められないかららしい。だが、その声はとても可愛らしいため威厳が半減しているのは内緒だ。

ツバキはコーヒートを台に置くとパソコンの前の椅子に登った。

うん。『登った』っていう表現であってると思うよ。

椅子に登り終え、ふうと一息つくるとツバキはとんととキーボードを叩きパソコンを再起動させた。

電気の通っていないこの街でどうやって電気を供給しているのかは知らないが、彼女が住んでいるこの部屋には水も、電気もネットさえも接続されている。

Answer - 1 " ガーディアン " 其の2 - 2

「実は仕事を探しにきたんじゃないんだ。

もうそろそろ嫁入りの用意ができたかと思ってツバキを迎えにきたんだ」

いつもの軽口で返すと、ツバキは俺をじとりと睨んだ。

「……………お前“ろりこん”だったのか？ ならば私もお前への対応を変えねばならんな」

言って懐から取り出したのはその小さな手に不釣り合いな拳銃。その銃口はもちろん俺に向いている。

「こらこら。そんなもんお前が撃つたら肩が外れちゃうじゃないか」俺はひょいっと彼女の手から拳銃を取り上げた。

「むっ！ か、返さんかー！」

椅子から飛び降りて必死に俺の手から銃を取り替えそうと俺の脚に抱きつくツバキたん。だがその身長差から彼女の手は俺の胸までしか届かない。

「返さんか〜！」

涙眼になつてぴょんぴょん跳ねるツバキたん。

ちよつぴりドスな気分になつてしまう。

「ほおれ、ほれ。とつてこらーん」

と、不意にツバキがぐつとしゃがみ込んだ。

「返せと……………！」

そして、俺の息子目がけて膝蹴りを繰りだして……………くる！？

「言っておるだろ〜〜！」

ズギューンッ！

「はっあんっ！」

俺は股間を押さえると無様に膝をついてびくびくと体を震わせる。さすが貧民街で生きる少女だ。涙が出るほどたくましい。

「生きるー俺のむすこー！ 子孫繁栄！ 子孫繁栄！」

俺は痛みにバシバシと床を叩きながら息子を応援した。

「まったく。何をしにきたのだお前は。また私をからかいにきたのか？」

床に落ちた拳銃を拾って、大事そうに懐にしまっつバキ。

「こ、この……デ、データチップの中身を解析して欲しい……」

俺は床に伏せこんだまま、震える手でスーツの内ポケットから三センチ四方のチップを取り出す。

「それならそうと早く言え、まったくぶつぶつ」

ツバキは椅子に登りなおすとデータチップをパソコンに差込み、キーボードをかたかたと打ち始めた。

「ロック解除できそうですか、ツバキ先生」

俺は壁を支えにして腰をとんとんしながら彼女の様子を伺う。

「さて、どうであろうな。最近は何目まぐるしくシステムも変わるかな」

ツバキが操作をすることにパソコンの画面がどんどんと表情を変える。

どんなに可愛くても、どんなに幼くてもツバキのナビゲーターの実力は本物なのだ。

「ふむ。これならばさして時間はかからんだろう」

「さすがツバキたん。頼りになる」

「誰がツバキ『たん』だ。そのような呼ばれ方は好かん。」

まったく、あつちへふらふらこつちへふらふら。男ならもっとしゃっきりしたらどうなのだ」

「何を言うんだ！俺は最初からツバキたん一筋！」

アナダガー！スキダカダー！」

俺は昔あったらしいテレビコマーシャルの真似してみた。

それを聞いてふうとツバキはため息をついた。

「私が言ったところで改めるようなお前でもなかったな」

最近、呆れられることが多いような気がする。

まずい。もしかして俺飽きられてる？

『好き』の反対は『嫌い』ではなく『無関心』だと言った人がいるみたいだが、まさに今俺その状況？ スルー？

俺はこの現状を脱するためシリアス顔+ニヒル声で話を進めることにする。

「あと少し調べて欲しいことがあるんだが」

「なにを急に変な声を出しているんだ。その変な顔もやめい。なんかむかつく」

「ちくしょー！」

俺はバンバンと壁を叩いて悔しがった。

「相変わらず訳の分からん奴だな、お前は。」

まあいい。いつも一人で動くお前が私に助けを求めるのは珍しいことだからな。興味があるから話せ」

視線をモニターに戻してツバキが話の続きを促す。

興味が……ある？ 俺に興味がある？ 『無関心』の反対って『興味』でもあるよな？ ってことはえーっと『嫌い』の反対は『好き』でもあるから……。

『興味』||『好き』！？

ツバキさんは俺のことが好き！？

「俺も大好きだ、ツバキたん！」

だきっ！

「きゃ！？」

いきなり俺に後ろから抱きつかれてツバキさんは眼を白黒させて驚いた。

「うざい！ 離れんか！」

だがすぐに振りほどかれる。きっとこれも一種の愛情表現なのだろう。なんとってツバキさんは俺のことが好きなんだからな、うんうん。嗚呼、女の子って難しいんだなあ。

Answer - 1 "ガーディアン" 其の2 - 3

「ヒューマンインター事件って知ってる？」

俺はにこにこしながら話を進めた。

「ヒューマンインター事件……？ いや聞いたことはないが。過去に起こった事件か？」

「現在進行形で起こってる事件だよ。」

うーん、ツバキが知らないんじゃないかと本当に極秘だったのかな」

そう呟きながら何気なく本棚の上に置いてあったカラフルなルービックキューブを手にとる。

「極秘……じゃと？ もしかしなくても私は知ってはならんことを知ったか？」

ツバキがゆっくりとコーヒーを口に含む。

「実はな。今日ガーディアンが接触してきたんだ。その時に事件の詳細が入ったデータチップ貰ってるけど、いる？」

その言葉に驚いたのか、ツバキはコーヒーを喉に詰まらせ、けほけほと可愛らしくせきをした。

「ガ、ガーディアンが！？ おまえにか！？ なぜお前ごときに国家所属のアンサラが接触するんだ！？ もっとまともなアンサラーなどいくらでもいよるではないか！」

椅子ごと振り返って驚いているツバキ。

お前ごときとはひどい表現だ。どうやらツバキたんも俺のことを探偵ごっこぐらいにしか思ってないようである。

これでも昔はブイブイ言わせてたっていうのに！ 失礼しちゃうわ、ぶんぶん！

「俺に訊かないでくれよ。橘さん あー、そのガーディアン、橘さんって人なんだけど、彼女が言うにはこの街で殺した奴を食う猟奇的な殺人が起こっているらしいんだ」

「成る程な。ヒューマンインター事件と呼ぶにふさわしいな」

「んでその犯人とやらを探して捕まえる手伝いをしろって依頼だったんだ。けど、受ける前にどういふ事件か詳しく知りたくなってねー」

ふとツバキを見ると彼女はぽかーんとした顔で俺を見ていた。

え、なに？　なんか俺おかしいこと言ってたっけ？

「……………樹、まさかとは思うが、その依頼受けるつもりか？　今まで大きな事件に関わることを拒否してきたというのに…………。と言うよりも協力者がお前で大丈夫なのか…………？」

悪かったな、頼りにならないアンサーで。

「ま、今回は特別特別。この事件、何か嫌な感じがしてならないんだ。それに今月に入って既に七件も起こっているらしいし。早くどうにかした方がいいっしょ？」

「七件もか！？　信じられんな」と顎に手をやる。

「その上、何も犯人の手がかりはないらしい。目撃者もないみたい」

ルービツクキューブをガチャガチャとやりながら俺は話を続ける。「ガーディアンが助けを請うのも頷ける。それだけ大きな事件でありながら私に一切の情報が伝わってきていない事を考えても、よほど嚴重に情報が管理されているようだな。」

お前にチップを与えたのはお前を信頼したからか、それともお前に依頼を受けさせる自信があるからか…………」

俺と同じこと考えてるなツバキたん。

「まあ、後者だろうな」

あれ！？　なんで俺と違う結論に辿りついてんの、この子！？

思わずコケそうになったが、俺は気をとりなおしてビシリと彼女を指差した。

「嚴重な情報。そこなんだよ。この事件についてどんなことでもいい。情報が欲しいんだ」

ツバキは少し考える素振りを見せて顔をあげた。

「そうだな。お前が欲している情報かどうかは知らんが面白い情報

があるぞ、二つ」

ぴつと人差し指と中指を立てるツバキ。

「ヒューマンインター事件のか？」

再びルービックキューブをガチャガチャとやり始める俺。

「いや、その件に関わりがあるかどうか定かではない。だが気になる情報ではある」

「教えてくれ。どんな情報だ？」

「この街で最近起こっているという行方不明事件の話だ」

俺は訝しげに眉を曲げてみせた。

「行方不明？ 異常殺人じゃなくてか？」

「ああ。私が聞いているのは行方不明事件だ。

これが奇怪な話でな。何でも『消える理由もないような人間が忽然と姿を消している』らしい。しかも行方不明になった人間たちの間になんら関連性はない。目撃者もおらず、手がかりもないときている。事件性も見えないため警察も聞き込み、搜索程度の動きしかできず、ピリピリしているようだ」

……。また面倒な事件が出てきたな。この街で何が起こっているんだ……。

「その事件関連の依頼が幾つか私の元にも届いている。解決しろとは言わんが、注目はしておいてくれ。またスラムの人間の仕業にされるのも癪だ」

貧民街にいる人間は政府に対していい感情を抱いていない。それもそうだろう。いつかは貧民街をなくし、みな平等な世界を作ると宣言しながら実行には移さない国家政府。そんな口だけの政府に嫌気がさした貧民街の人間は少しばかり過激な事件を起こすことがあった。

そのせいか犯人の手がかかりのない事件が起こると貧民街の住人がしたことだ、と短絡的に考えられることがあるのだ。

貧民街に住んでいる一人としてツバキにはそれが許せないのだろう。

「もう一つの情報は？」

「N o b o d y K n o w s」が日本に来ているそうだが？

その名を聞いて俺は思わず固まってしまった。

俺の顔を見てツバキはニヤリと笑みになる。

「ふふ、驚いて声も出んようだな」

「それ……マジ情報？」

「マジ情報」と俺の真似をするツバキ。

N o b o d y K n o w s。世界最強最悪のキガイ殺人集団だ。裏社会では最も有名な集団で彼らの存在を知らない人間はいない。幾人かのNK (N o b o d y K n o w s) メンバーは面が割れているようだが、NKが何の目的で行動しているのか、何人で構成されているのかは未だに謎である。

だがしかしNKという組織は確かに存在し、アンサラやガーディアン、国家、企業にとって常に恐怖の対象として語られる。敵になれば深い痛手を負うのは間違いないからだ。

というのもNKのメンバーはみな何らかのスペシャリストたちで構成されているらしく。完璧な役割分担が成されているらしい。

例えば狙撃をさせれば百発百中の者、爆弾に関して貪欲に知識を取り入れた者、ハッキング技術に関して右に出る人間はいないという者。その様々な分野の最高峰が集まった組織。それがNKなのだ。その組織をまとめている“キング”と呼ばれる人間がいるらしいが、その存在もまた謎に包まれている。

昔、NKとアンサラが直接あいまみえた事件があった。

NKが国家政府のある政治家を誘拐したのだ。もちろん目的は不明。

しかし国家政府も馬鹿ではない。NKが潜んでいる拠点を見つけ出し、国家が選んだトップクラスのアンサラ三人を拠点へと向かわせた。

だがしかしだ。

その結果は散々たるものだった。連絡が取れなくなった三人の

ンサラー。政府はすぐさま第二陣を送り出した。そこで彼らが見たのはNKを襲撃したアンサラー三人の物言わぬ死体だった、というわけである。しかもその死体が折り重なった惨状を作り出したのはたった一人の人間によるものだった。

“スパイダー”。

そう呼ばれる少女だ。その実力はNKの中では最下位に当たる……らしい。そんな少女に三人のアンサラーがボッコボコにされた。この事実は政府と裏社会に衝撃を走らせた。そしてこれが『NKに触れてはならない』と政府がNKの野放しを黙認した事件でもあった。

要するにNKに所属してる奴らは規格外の化け物。この世で一番関わりたくない組織なのである。もし何かの拍子に眼をつけられたりすれば

俺はぶるつと身体を身震いさせた。

考えるだに恐ろしい。

Answer - 1 " ガーディアン " 其の2 - 4

「解析できたぞ」

俺はキューブを棚に置きなおしてツバキの後ろからモニターを覗きこんだ。

「……んー、なんだこのリスト？」

「さてな。二種類あるようだが……。少し待て。照合してみよう」
何やらツバキが操作する。するとポンツと機械音を鳴らしてそのリストが何か弾き出された。

「………………。樹…………これをどこで入手したのだ」

「え、なにになに？ 何か面白いことでも分かった？ ちなみにこのチップは」

俺が嬉々として答えようとすると、彼女はそれを遮るように手をひらひらと振った。

「あー、やはり答えなくていい。だいたい想像はつく。昨日、ニュースにもなっていたしな」

「MSNに侵入する依頼なんて、お兄さんはもらってないぞう」
「興味のない依頼は受けない、だったか？ 裏を返せば興味のあるものには依頼でなくても首を突っ込むということだろうが」

あながち間違ったことも言っていないので答えは沈黙で返す。

何も答えない俺を見てため息を吐くとツバキは話を元に戻した。

「こいつは先ほど言った事件で行方不明になった人物のリストのようだ。警察が所持しているものと照合された。」

もう一つのリストは表題に“コード：A”と打たれておる。こちらも人名リストだが……。何の寄せ集めかは分からんな……」

「行方不明？ 異常殺人のじゃなくて？」

予想が外れて思わず訝しげな顔になってしまう。

どういうことだ……。てつきり『ヒューマンインター事件』に関わるなんらかの情報が入ってるのかと思っただけだな……。

俺は先日、届いていた謎の手紙の内容を思い出す。

『MSNを調べなさい』

そしてキスマーク。

たったそれだけの手紙。送り主はおるか、どこから送られてきたのかも分からない。

これがヒューマンインター事件に関わるリストならMSNが犯人で終了っぽかったのになあ。まあ、でも行方不明事件はMSNが犯人もしくは関わりがあると思っただけ……かな？

ってことはヒューマンインター事件と行方不明事件の関係性はなく、別々の事件……？

だけどMSNにあった行方不明事件のリスト、そしてガーディアンが依頼してきたヒューマンインター事件。

両方、この街で起きている事件だ。

何らかの関係性があると考える方が自然……。

深く思考の海にずぶずぶと足を踏み入れてしまう。分からない。まだ情報が足りない。

“コード：A”ってのも意味不明だし。

とりあえずMSNの動向には気をつけておかないといけないか……。ツバキが“コード：A”のリストをスクロールして名前を確認している。

まさにその時だった。

「！？」

俺は思わず身を乗り出しツバキのちっちえ手を掴んでスクロールを止めた。

「な、なんだ急に！？」

“コード：A”の人名リスト。

そこにはごくごく身近な……俺のよく知る人物の名前が入っていた。

「？ どうした、いつ」

俺が真剣になったことに気付いてか、ツバキが言葉を止めた。

俺は画面から身を離すと、さらに思考する。

どうしてだ。どうして彼女の名前がここに？

そこで俺はツバキたんがぼーっと俺を見上げていることに気づいた。心なしか頬が紅潮している。

あ、お礼言うの忘れた。

「あんがと。ツバキたん。ちゅっ」

俺はツバキの頭を抱き寄せておでこにキスをする。

「っ！？ な、ななな、なにをするのだ！？」

ツバキは顔を真っ赤にすると俺のハグから逃れるようにバタバタと暴れだした。

「離せ〜！！」

嫌がれるのは俺の信条に反するので仕方なくハグから開放すると、彼女は額を服の裾でこしこし拭く。

「ほんとこいつは……。とぼけておるかと思えば男らしい顔をしておつてからに……。……卑怯だ」

唇を尖らせ何か小声でぶつぶつと言っている。

そんなに俺のハグが気に入らなかつたのだろうか……。ショックだ……。

「あ、あまり首を突っ込みすぎて勝手に倒れるなよ！ お前のような探偵に毛が生えたようなアンサーでもいなくなられては困るのだからな！」

「はい」

俺の間延びした返事を聞くと、やれやれとため息をついてモニタへと視線を戻す。

なんだかんだと言って心配してくれているようだ。身寄りのない俺にとって嬉しいことである。

「それじゃあ、また来るね、ツバキたん」

「ふん。二度とくるな」

むすつとして背中を向けているツバキに思わず笑みを零してしまう。そのまま俺は部屋を後にしようとした。

だが俺はあることを思い出し振り返る。

「あ、ツバキたん。マジックペンある？」

「マジックだと？ あるが。何に使う気だ？」

「いや、あのルービックキューブなかなか色が揃わないから全部黒に塗ろうかと思って」

「さっさと帰れ！」

俺はケツを蹴られて追い出されるのであった。

Answer - 1 " ガーディアン " 其の3

「以上が彼と会った感想ですが……」

「フ。彼は相変わらずだな」

私がアンサラー新谷樹について報告し終わるとフランベルク長官は楽しそうに笑った。

「決定事項に口を出すのは無意味と承知ですが、彼にこの任務が務まるかどうか甚だ疑問です」

その言葉を聞いて、長官は急に真剣な表情になった。

机に両肘をつけて顔の前で手を組む。

「私は……彼こそ世界最高のアンサラーだと思っている」

その眼差しは嘘をついているものではない。

つまり、長官は本当に思っているのだ。

あの男が あの変態が“世界最高のアンサラー”だと。

私は笑いだしてしまいたい気持ちをぐっところえた。

「まさか……。そこらにいる並のアンサラーと同レベルですよ。いえ、それ以下ですよあいつは。これは手合わせした者の意見としてお聞きください」

フランベルク長官が誰かを褒めるのは非常に珍しいことだ。ましてや『世界最高』なんて言葉を使ったことなど今まで一度たりとなかった。

私の中での男に対する嫉妬心みたいなものが疼く。

「彼は隠すのが得意な人間だからな。あのワインをどこにやったのやら……」

普段の調子に戻って『うーむ』と何か考え込む長官。

「長官！」

バンツと私は思わず机を叩いてしまう。

「あ、いや、関係ない話だったな」

ごほんごほん咳をして長官はお茶を濁した。

「君も先ほど言ったとおり、今回の件を君と樹に任せることは決定事項だ。文句を言う前に彼の良いところを探す努力をしたまえ」

「無理です」

私はきつぱりと即答した。

努力をしなくても分かる。

無理だ。絶対に無理だ。あんな男に今回の件の真相を突き止められる筈が無い。

まずアンサラーとしてのオーラが欠けている。品格も欠けている。性格も欠落している。知性もない。緊張感もない。やる気もない。ないないばかりできない！ あー！ イラついてきた！

「君みたいなじゃじゃ馬 あ、いや行動力のある人間と組めるのは彼ぐらいなものだろう。」

うむ、そうだ。この際、君のパートナーにでも

「無理です！」

再び私はきつぱりと、即答した。

「………………。…………。すぐに分かる。私が彼こそ世界最高のアンサラーだと言った意味がな」

長官は話はこれまでとばかりに椅子を回転させて私に背を向けた。

「ひつく。なーにが世界最高のアンサラーよ！ あんあのただの変態じゃない！」

ガンッ！

私は八つ当たり気味にグラスを机に置いた。中に入っていたワインがちよつと零れ、ヒューマンイーター事件の資料に斑点をつくる。部屋に戻った私はソッコウでワインを引っ張り出すと、それをぐいぐいと煽り始めたのだった。

「静かにして頂戴。近所迷惑よ」

相部屋の住人、春先シズルが鏡の前で顔面にパックをぺたぺた張

りながら言っつ。

「迷惑！？ あうんな奴と一時でも組まはれる私の方が迷惑してるわひよ！」

バン！

再び空になったグラスを机に叩きつけると、机の上に置いてあったヒューマンイーター事件の資料がバサバサと落ちる。

「私はね！？ 怒ってれの！」

「見れば分かるわよ」

はあ、とため息をつく彼女。

そんな彼女に私はグラスを突きつけた。

「ん」

ちらりとグラスを見ただけで、興味無さそうにパツク張りに戻るシズル。

「なに？」

「シズルも飲うで！」

「お断りだわ。」

私、明日早いもの。実働するだけの貴女と違って私は常に情報に目を通していなきゃならないんだから。付き合っていてられないわよ」

シズルはアンサラーでいうところのナビゲーターの役割をする人物“サーチャー”だ。彼女らが集めてくる情報によって、国家政府は動き、ガーディアンに指示を出す。

そのためか、あれこれと毎日忙しいらしい。

それは分かっているつもりだ。

だが、それでは今日の私の怒りはおさまらない。

そつだ！ おさまるはずがないのだ！

「一人で吞めっつていうの！？ 信じらへない！ 信じらはへうわ！ 私にはよるつきながら立ち上がりオーバーに手を広げてみせる。

アルコールが回っていたせいか、ふらふらと体が傾いで壁に頭をぶつけてしまった。

「いらいっ！ こおんの！」

頭をぶつけた怒りを、その壁に向けて発射する。

ドゴボオ！

私のくりだした後ろ回し蹴りは大きく壁に穴を開けた。

「ひっく。はっは！ ざまあみりよ！ あんたなんかより私の方がずーっ！ としゅごいアンハラーなんだかりゃ！」

壁に向かって高笑いしてやる。

とても気分がいい。

「貴女、えらく今日は出来上がっているわね。その穴の修理代は貴女の給料から天引きしてもらおうから」

「えへへ、天下無双は言いしゅぎよ、シズリユ」

私は破顔してシズルに抱きついた。

「誰もそんなこと言っていないわよ。酒臭いわね。離れなさい」

無表情のままツツコミをいれるシズル。

彼女はいつもクールだ。笑った顔を見たことがないくらい彼女はクールだ。

「何でもいいから吞れ！」

私は彼女の頬にグラスをぐりぐりと押し付ける。

「はあ。仕方ないわね」

すると観念したのかシズルはパックを外して鏡台から立った。

「お、美人がきたじよ、びーじーん！」

「知ってるわ」

「もっね〜！ 今日はずつ倒れりゅまれ吞つわお！」

「はいはい」

こうして彼女たちの夜は明けていくのだった。

Answer - 1 "ガーディアン" 其の4 - 1

テスト期間。

なんて嫌な言葉なんだろうか。

「違います。何度言ったら覚えられるんですか、新谷くんは」

みちる先輩がにこにこ笑顔で額にぴきぴきと青筋をたてながら言った。

俺の頬を一筋の汗が流れ落ちる。

「うつ……。ほ、ほら、俺って興味の無いことはなかなか頭に入らないタイプで……」

「へえー、そうなんですか。では新谷くんは一体何に興味をお持ちなんでしょう?」

「エロス全般」

ぼきっ!

みちる先輩は笑顔のまま持っていた電子ペンを片手でぶち折った。バチバチと少し先輩の右手が放電する。

「ひいっ!?!」

信じられない力だ。

俺は体がガクガクと震えてしまうのを止められなかった。

テスト勉強会っていつたらもつとこー……和やかな雰囲気であるものじゃないんだろうか……。

「先輩、ここが分かりません」

「あら……どの問題……?」

ノートに書かれた『先輩に愛を伝える方法』という文字を指す俺。

「まあ……新谷くんだったら……」

赤く頬を染める先輩。

「先輩っ!」

「新谷くんっ!」

そして激しく抱き合う二人。

「ああつ！先輩、それはまだ早いです！ああ、そんなところを……！だめです、そこは！ああつ！あああああああ！」
妄想にふけつてくねくねと身をよじる俺を遠巻きに見て、ため息を吐く部員のみなさん+ツンデレ。

「仕方ないですよ、先輩。新谷は正・真・正・銘・の馬鹿！！ですから」

と、水崎が電子ノートに電子ペンを走らせながら言う。

「ええい、黙れ部外者。そもそもなぜ貴様がウチの部室にいるんだ、オオ？アアン？エエ？」

俺は席を立つと両手をポケットに入れて、ヤクザ歩きで水崎のところまで行き、不良のように斜め下からガンをくれてやる。

しかし水崎はライオンも泣いて逃げ出しそうな俺の怒り顔に臆することはなかった。

「みちる先輩が勉強会開いてくれるって菊に聞いたから来たのよ。あんたが来るって分かってたら来てなかったわよ」

やれやれと首を振って答えるツンデレラこと水崎。

顔を赤くしてどもりながら言っていたら『惚れてまうやるー！』

なツンデレ台詞だが、残念なことに水崎は真顔で言っていた。

「桜咲菊隊員！」

俺は廉人に勉強を教えてもらっていた菊にバツと振り返る。

「はい！ なんてありますか、新谷樹隊長！」

するとノリの良い菊はびしっと敬礼しながら立ち上がった。

これも俺の調教の賜物である。

「なぜ貴官はこのようなクズを我が隊に呼んだ！ このようなクズが我が隊に加われれば、我が隊の名が落ちるではないか！」

「ハッ！ 申し訳ありません、隊長！」

「罰として今からグラウンドでストリップー 回してこい！」

「……………は？」

菊の顔が一瞬で固まる。

「お前な。グラウンドー 周走ってこい、みたいなノリでセクハラ

するなよ」

廉人がご丁寧につっこみを入れていたが無視しておこう。

「当たり前だろう、菊！　このようなクズを我が隊に呼ぶという重大なミスを犯したのだ！　こんなクズがまだこの世に蔓延っているというだけで虫唾が走るというのに、このようなクズ」

「クズクズうつさいのよ！」

どむぐ！

「がはっ……！」

ついにキレた水崎の強烈なボディブローを受けて俺は床に膝をついた。

くっ、この俺が避けれない速度で拳を放つとは……ツンデレは化け物か……！！？

朦朧とする意識で顔をあげるとそこには微笑んだみちる先輩が立っていた。

きつとイジめられている俺を見るに見かねて助けにきてくれたに違いない。

「め、女神よ……！　迷える子羊をお救いください……！」

しかしそこで俺は頭上にあるそれ、先輩が手に持っているものに気付いた。

え？　ダンベル（一キロ）？　何で部屋にダンベル（一キロ）が？

「先輩それどうするっ」

「うふふ、セクハラはいけませんよ、新谷くん」

「だめえ！　離さないてくださいよ！？　絶対に離さないてくださいい！　絶対にですよ！？　絶対ですからね！？」

「自分でフラグ立ててるぞ樹」とまた呆れながらツっこみを入れている廉人。

冷静に傍観しやがって！　なんて友人だ！　こんな状況で某お笑い芸人の伝統ノリなんかするわけが

「発射！」といきなり菊が敬礼した。

「菊てめっ！ うらぎ
するとにこやかな笑顔でパツとダンベル（一キロ）を手放す先
輩。」

スローモーションで近づいてくる鉄の塊。
ガッンッ！

俺は声も出さずに昏倒した。

Answer - 1 " ガーディアン " 其の4 - 2

「ホント懲りねえな、樹は。てか先輩。さすがにそれは樹でも死にますって」

廉人が『あーあ』と床で倒れている樹を見て頭を搔く。

樹の体はびくびくと痙攣を起こしていた。

「うっわ、気持ちわるー。びくびく動いてるわよ、こいつ」

水崎がげしげしと樹の頭を足で小突く。

「大丈夫ですよ、秋原先輩。なんたって樹先輩ですから！」

菊は樹のマネをして爽やかな顔でビツと親指をたてた。

「あらあら桜咲さんったら、もうっ」

くすくす笑いながら人差し指で菊の頭を小突く先輩。すると菊は

「てへっ」

とピンクの舌を出して自ら頭を拳でコチンとやる。

そして『あっはっはっは！』となんだかアメリカのホームドラマで

よくある大団円っぽく笑う四人。

すく。

「ぎゃあああああああっ！」

いきなり俺が無言で立ち上がったことに水崎が驚いて椅子から引

つくり返りそうになる。

俺はそのまま無言で席につくと、もくもくと問題を解き始めた。

「君たちはいつまでもそうやって笑っているといい。ボクは君たち

みたいに馬鹿じゃないんだ。ああ！ フェルマーの最終定理は簡単

だなー！！」

俺はわざとらしく声を大きくして言った。

「樹が壊れた……。てゆーかフェルマーの最終定理なんて試験範囲

じゃないだろ」

廉人の言葉に菊はにこにここと笑う。

「やだなあ、秋原先輩。樹先輩はいつも壊れてるじゃないですか」

「あらあら、新谷くん。頭から血が出ていますよ？」
ハンカチをポケットから取り出して俺の側頭部をとんとんと優しくぬぐう先輩。

唯一、心配してくれているのはみちる先輩だけであった。まあそもそも流血したのはみちる先輩のせいだが。

「フェルマーの最終定理が理解できるならその問題全部解けるわよね？」と嫌らしい笑みを浮かべて言うてくる水崎。

「当たり前じゃないか水崎くん。ボクにかかればこんなもの足し算・引き算レベルだよ」

俺はすらすらと電子ペンを走らせて、電子ノートをみちる先輩につきつけた。

そして自信満々の顔でキラリと歯を光らせる。

先輩はその電子ノートにひととおり眼を通して、小首を傾げにっこりと微笑む。

「全部間違ってます」

「ぶぶーーっ！っ！」

ツボに入ったのか、水崎は噴出すと腹を抱えて机に突っ伏し、バンバンと机を叩きだす。

「ひいーっひっひ！ もうだめ！ あっはっはっはっは！ お腹……」

……！ お腹痛いひーっひっひー！」

バカ笑いする水崎。

こいつに笑われるとまるで馬鹿にされてるみたいで激しくムカツいちゃうな！

「むきいー！ 勉強なんてやってられるかー！ 世の中勉強なんてできなくても生きてけるんだよ、バーカ！ 世の中を生きていくのに関数なんて使ったりしないだろーが、バーカ！」

「ぶくくく……い、樹先輩ついに極論に出ましたね、くくくく……」
同じく大笑いしていた菊が眼の涙を指ですくいながら言う。

「新谷ぶくくお願い……！ もう喋らないで……！ 笑い死ぬ……！
くくく……！」

どうやら水崎が笑いのツボから抜け出せない状態に入ったらしい。こういう時の人間は何をやっても笑ってしまふものだ。

なので俺はとっておきの物まねを披露することにした。水崎の前で怒り顔をして歌舞伎役者のようにポーズをとる。

「羅漢像」

「あーっはっはっはっは！ ひいーっいつい！ くるしいー！ 息が……！ あっはっはっは！ やめ！ やめて新谷……！ ひいーっひっひっひ！」

水崎はついに椅子から転げ落ちて大笑い始める。

フン。良いざまだ。そうやって死ぬまで床でのたうち回ってるが
いい。

「菊」

俺は相方に目で合図を送った。すると何かを悟ったように菊が真剣な顔でこくりと頷く。

「風神」と俺。

「雷神」と菊。

「ぎやははははははは！ 菊まで……！ やめて……！ もう無理だって……！ あーっはっはっはっは！」

俺と菊のダブル物まねを受けてさらにごろごろと転げまわる水崎。椅子とか壁とかに頭をぶつけまくってるけど大丈夫か、コイツ。

「そっいえばどっかのバカに比べて本当にみちる先輩は頭いいですよね」と廉人が先輩に話をふった。

「みちる先輩は大学をでてるんですよ、確か」

菊は未だに笑い転げている水崎の背中をさすりつつ言う。

「遺伝子生命学を専攻していたので理系は得意なだけですよ。代わりに文系はあまり芳しくありませんから」と苦笑する先輩。

俺はマジックでチョコビ髭を書き、髪を七三に別けた。そして水崎が見えるように彼女の前にしゃがみ、真面目な顔をする。

「夏目漱石」

「ぎゃーっはっはっはー！」

「あやや!? 樹どこ行くの!？」

な、ななななな、なんで、あああ、あんな超瞬速逃亡対象が……! ? とととと、とにかく逃げないと! 殺られるうつつ!

いきなりの超展開に俺はパニックになりながらばたばたと走る。

全速力で大通りを駆け抜け、薄暗い路地裏に入ったその時だった。くんっ。

足に何か引つかかったと思ったその刹那、視界が回転する! ?

「うおほおおおおおおおお! ?」
しゅるるる!

気づけば銀色の糸に体を縛られ路地裏に宙ぶらりんにされていた。

しかもかなーり恥ずかしい縛り方で! ?

よく見るとその路地裏には銀色の糸が蜘蛛の巣のように張り巡らさ
れているではないか!

ああ! これじゃあまるで搾取される美しい蝶の運命じゃないか!

「あややー、飛んで火に入る夏の虫だや。」

もうっ、逃げるなんてひどいよ。予想はしていたけど」

路地裏を曲がってこちらへとゆっくり歩いてくる金髪ツインテ
ール(超瞬速逃亡対象)。

「だ、だだだ、誰ですか、チミは! ? 降りしてください!」

俺は今更ながら他人のフリをすることにした。

「もうっ! それが三年ぶりに会った恋人に対して言う台詞?」

「んがっ! お前を恋人にした覚えなんかない!」

他人のフリを忘れ、思わず全身全霊全力全開全オーラを使って否
定してしまう。

「あやや〜? 三年経って私が綺麗になっちゃったから照れちゃっ
てるのや〜?」

身体をくねらせてしなを作る少女。

確かに見ないうちに良い体つきになった。スカートから伸びた生
足なんかは生唾ものであるのは認める。

だがそもそもの問題はそこではないのだ。奴は根本的に性格がぶっ

壊れている！

「照れてない！」

俺は喉をぐくりと鳴らしてから精一杯否定した。

「あやー、やることはやったのにウブなんだからあ。

初めては全部樹が奪ったくせに。ぽっ」

赤くなつた顔を両手で挟んでもじもじしだす少女（超瞬速逃亡対象）。

「そんなことした覚えねえよ！ いい加減なこと言うな！」

俺の言葉になぜか訝しげな顔になる。そして何か合点がいったようにポンと手を打った。

「あやや。そうだったや。樹、あの時は睡眠薬で眠って」

「ギヤアアアア！ 聞きたくなー！ーい！」

俺の知らないうちに何かされてるー！？

「それにしてもひどいよ、樹。生きてるなら連絡くれても良かったのに……。」

私てつきり死んだのかと思つてたよ？」

そのまま死んだものだと思つてくれれば良かったものを……。どこで知りやがったんだ、コイツは……。」

「ああ、そうかよ。そりゃ悪うござんした。

んで？ 今更俺の前に現れたつてことは何か理由があるんだろ、アア？」

俺はヤクザばりに睨みつけてやる。

「警告しにきたのよ」

その新たな声に首だけで振り返るとそこには赤髪長髪の女が腕を組んで立っていた。

黒革のライダーズジャケットにこれまた黒いレザーパンツ、その長い足の先には革のブーツ。

危険度MAX！

ワーニン、ワーニン！

俺の頭の中で警告が鳴り響きまくっている。

その人物（超ミラクル瞬速逃亡対象）を見て俺の口が『あがつ』と開ききる。開いた口が塞がらないとはまさにこのことを言うのだから。

「お、おおお、お前まで……！」

「久しぶりね、“エース”」

風が吹く。彼女の燃えるような赤髪がさらさらとなびいた。

「また懐かしい呼び名を……。つーか、警告ってなんのだよ!？」

「私たちがここにいるからもう予想はできてるかも知れないけど……」

…… “あの男”…… 今、日本にいるわよ」

「…… あー、やっぱり?」

「死んでることになってるんだし、あんまり動かない方がいいと思うわよ。生きてるってことが知れたら色々と面倒なんじゃないの?」

「んがっ! 動かない方がいいって……。あのキスマークの手紙よこしたのお前だろ! 絶対そうだ!」

「静かに動きなさいって意味よ。」

…… キスマーク。発情した?」

「してねえよ! キスマークにキスなんかしてないからな!」

「あら」と少し驚いたような赤髪。だがすぐに妖艶な笑みを浮かべた。

「へえー、そんなことしたんだ。相変わらず分かりやすいわね、樹は」

そう言った後、何かを考えるように視線を上にし、ペロリと瑞々

しい唇を舐めた。

「……………んー、……………間接キスね」

ああああ！ もうヤだこの人たち！

「……………お前ら、もしかしてヒューマンイーター事件に関わってるのか？ なんか知ってるのか？ 犯人は誰だ？ お前じゃないのは確かだけど」

この女が人を殺した場合、死体は綺麗に掻っ捌かれているはずだからだ。そりゃもう刺身かっつくくらい綺麗に。この女が扱う刃物は銃器よりも凶悪な凶器へと変貌するのだ。

「お姉ちゃんに対して『お前』だなんてひどい呼び方ね。反抗期？ 不機嫌そうに眉を曲げる赤髪の女。

「誰が姉だ、誰が！ つか本当の名前も知らない奴を姉だとは思えねえよ！」

「なあに？ まだ騙したこと怒ってるの？」

「あつたりまえだろ！」

「……………もしかして本当に私のこと好きだったとか？ でも、だめよ。ちゃんと血は繋がってるんだから、たぶんね」

クスクスと笑う自称・俺の姉。

カツと顔が熱くなるのを感じる。

「……………！ てめえ、殺す！ 葉月、おろせええ！ マツハ2であいつを殺すう！」

「あやや、ダメだよ紗枝姉。樹怒っちゃったや」

「凶星をつかれちゃったのよ。可愛いわね」

「ぬうあうにが凶星だ、ぬうあうにが！ 誰がお前なんか！」

俺の言葉を遮ってぴっと人差し指を立てる赤髪（自称・俺の姉）。

「兎に角。警告はしたわよ」

「それじゃあねー、樹！ またねー！」

話はこれで終わりらしく振り返る二人。

「おう、いけいけ。二度と俺の前にツラ見せんな。

つて、ええええええ！？ 降ろしてってくんないの！？ 降ろしてか

ら行けよ！ 降ろせ、コラアアア！」

俺の叫びも空しく手をふりふり去って行く二人。

ひゅおおおお……。。

途端に静かになる路地裏。

俺は縛られた腕でなんとかポケットからPCを取り出す。

そしてこの状況から救ってくれそうな人物に連絡をとった。

ホログラムモニターに『エリ・F・橘 コール中』の文字が浮かぶ。

頼む、出てくれ！

何度かコールした後、彼女は不機嫌そうな声で電話に出た。

『なによ。こっちは二日酔いで頭が』

俺はPCに向かって助けを求め叫んだ。

「助けてええガーディアン！」

キーン！！

『~~~~~っ！』

なんだか向こうではたばたと悶える音が聞こえる。ついで『どがっ

！ がしゃん！』と何かを落とす音も聞こえてきた。

がこっちはそれどころじゃない。

「助けてくれ！ 怖いやつらに空中つり上げ」

ぶつ……ツーツー。

ファック！ 切られた！

パートナーのピンチをシカトするとはなんて奴だ。ムカつくから助

けにくるまでコールしまくってやる。

トウルルル！ トウルルル！

数十秒ほどだろうか、それくらいした時に彼女は電話をとった。

もつと真剣に！ ちゃんと話せば分かってくれはす！

『なによ、もう……。悪戯電話なら簡便してよ……』

「違うんだ。自称・俺の姉がきて」

『はあ？ あんたの姉ですって？ それがどうかしたの？』

「間接キスを」

ぶつ……ツーツー。

だめっしたー！

あ、諦めるな！ こんな異常事態を解決できる奴はエリしかないな

い！

俺は三度、彼女をコールする。すると彼女はすぐに電話に出てくれた。

「真面目な話なん　！」
ぷつ……ツーツー。

あ、あのアマ！　とった瞬間に切りやがった……！　ま、負けないぞ！

なんだか根本の目的を忘れて意地になってきた。

トゥルルル！　トゥルルル！

ガチャ。

「じゃじゃ馬！　高飛車！　外国被れ！　彼氏いない歴〓年齢！

日本苗字で呼ぶぞ、コラア！　橘！　たちばな！　夕チバナ！　T

ATTIBANA！」

どうせ切られるのならとありったけの罵詈雑言をぶつけてやるう！

『……………』

……ってあれ？　切れて……ない？

イヤホンの向こうから彼女の呼吸を感じる。

『……………』

彼女無言。回線が切れてない代わりに彼女がキレたようだ。

あっはっは、やだもう樹くんったらウマイこと言っちゃってー、あ

っはっは。

って、笑ってる場合じゃねえ！？

PCからぷつぷつと怒気が伝わってくる。

『へえー、あんた私のことそういう風に見てたんだ。へえー、外国

被れ……ねえー。へえー』

ゴゴゴゴゴ……！

やばい。

殺られる。

どうにかしないと……。

七色の声帯（即席）を持つ俺はとっさに裏声を使った。

「あらやだ。何を言っているのかしら。これは間違い電話よ。私は

樹なんてイケメンじゃないぞますわよ？」

『キモい裏声使ってるんじゃないわよ。殺すわよ？』

もろバレリーナ!?

ドスのきいた声が返ってきて俺の頬に脂汗が流れる。

『さつきから何度ももうっさいのよ! 用もないのに電話してきてんじゃないわよ!』

キーンッ!!

ぐわ、奴の声は新型鼓膜破砕声帯波動兵器か……!? 異常殺人事件の犯人はあいつなんじゃないのか……!? 一緒に捜査してる相棒が実は犯人って結構よくある話だよな!?

だがどうしたことだろう。その兵器本人も自分の波動で苦しんでいるようだった。どうやら改良が必要のようだ。

もちろん下方方向への。

「用があるから電話してるんですよ、橘さん! 助けて!」

『はあ? 助けてってどういうことよ……イタズラじゃないわけ? てゆーか橘って呼ばないでよ』

「いいから来いYO! 来てみれば分かるYO!」

『はあ……。なんでラップ調? 余裕あるじゃないのよ、アンタ』

「うるさい、黙れ。早く来い」

『このっ……! ……はあ。分かったわよ。場所は?』

それからしばらくして彼女はやってきた。

そして俺の状況を見、にやっと笑って一言。「で、これは何プレイ?」

いつかお前にしてヒイヒイ言わせてやる、と決意を固め俺は羞恥の涙を流した。

俺とエリは喫茶店に移動していた。

「この仕事受けるよ」

「ぶふう!?!」

俺がそう宣言するとエリは盛大にアイスコーヒーを吹き出す。

「ちよつと……やめてよ!」

あれ? なんて依頼された側に断られてんのかな俺。
思わず可愛らしく首を傾げてしまう。

「この街で起こっているのならアンサーとして放っておくわけにはいかないし。それに……」

「それに?」

「ちよつと自分で調べてみたんだけど……。やっぱり興味があるんだよねー」

こういう事件に対する嗅覚には自信がある。この件はヤバイ。放っておくとこの街どころの話ではなくなると俺は予感している。

ではその予感はどこからくるのか。

裏で糸を引いているのは一体誰なのか。

是非とも突き止めてやるうではないか。

「調べたって……何か分かったの?」

俺はこの街で猟奇殺人とは別に行方不明事件が起こっていることを話した。

「あー、その件ね。警察がイライラしている原因の」

興味無さそうに言ってアイスコーヒーをストローで吸い上げる。

「ありや? 関係あると思っただけなの?」

「私は別物の事件だと認識してたけど?」

だって行方不明事件の被害者は一般人ばかり。『ヒューマンイーター事件』の被害者は政府関係者。これのどこに繋がりがあるとい
うのよ?」

「だけど二つともこの街で起こっている事件だ」

「それだけでこの二つの事件が関係してるっていうのはちょっとねー」

ぶくぶくぶくぶく。

やはりこの話には興味が無いらしく。エリはストローでコーヒーに息を吹き込んで泡ぶくを大量発生させていた。

なので女心分かるイケメンタル（イケメンなメンタルを簡略化した造語）な俺は彼女が興味のある話題へと方向転換することにする。

「『ヒューマンイーター事件』の犯人の目星はついてるの？」

「それがぜーんぜん」

片肘をつき、煙草のようにストローを啜えながら視線を窓に向ける。

「アンサラーが快樂殺人者に成り下がったっていうのが一番ありそうなのよねー」

「うん。ないとは言えない」

「でもアンサラー一人がやるにしてはペースが早すぎるのよねー。」

この件には組織的な動きを感じなくもないし」

「うん。その通りだな」

「だとしたらストレンジャーたちなのかしら」

窓の外を見つめるエリの眼が細くなった。

ストレンジャーとは国家に対していい感情を抱いていない連中が集まった組織である。

主に貧民街の人々で構成されて動いているのだが、彼らストレンジャーに協力する政府の人間もいるらしく、今までにも結構派手なことをやらかしてきた。要するに企業に心体売ってしまった国家へ警告もといテロ行為を行う集団……といえは分かりやすいだろうか。彼女は今回もそうなのではないかと言っているのだ。

ツバキが聞いたら憤慨しそうな話だな。

「これなら動機も分かるのよねー。被害者が政治家ばかりっていう

のも筋が通るし……。

今夜にでも調べてみようかしら……って、あんた……聞いてるの？」
俺は電子ノートから顔をあげた。

「俺はアンサラーである前に学生なんだよ。勉強しなきゃいけないんだよ。テスト期間なんだよ」

まあ、学生である前に男なんで、こんな美人なおねーさんとの時間を大事にしたいところではあるが。テストという敵はあまりにも強大なのだ。

「はあ。貴方と組んで解決できるのかどうかほんっと不安だわ……。あの人がどうしてあんたなんかを……」

その言葉に俺は眼を細めエリを見つめる。

「な、なによ？ いったちよまえに怒ったの？」

俺の視線に少し構えるエリ。

俺は広げていた宿題の問い二を電子ペンで指した。

「この問題……わかる？」

「……はあ……」

彼女はなぜかため息をつくのだった。

Answer - 1 " ガーディアン " 其の 6 - 2

その日の夜。

俺とエリの二人は貧民街のとある場所へ訪れていた。

なんとエリはストレンジャーの基地に忍び込んで情報を得ようというのである。

彼女の性格がよく分かるやり方だ。

なんとというかイノシシだよね！

ひゅおおおおおおお……。

冷たい風が吹きぬけ、かさかさとして紙くずがヒビ割れた床を転がっていく。

俺とエリは今、廃屋の屋上にいる。

敵本拠地の視察のためだ。どこかに忍び込もうと思つのなら、アンサラーでなくてもこれくらいの手備知識を入れておくことはするだろう。そのことから分かるとおり敵情視察というのはとても重要な要素だったりするのだ。

俺たちの視線の先には元々病院だったらしい建物。そここそがストレンジャーたちの本拠地らしい。

今は木造の大きな壁がその病院を囲っていて、とても乗り越えられそうにない。バリケードのつもりなのか、手作り感が溢れるそれだが、簡単に壊せるものではないのが分かる。

その建物には電気が通っているのか、それとも松明でも燃しているのか、とところどころ明かりが見えている。その明かりに照らされて、何人かの人影も確認することができた。

どうやら本拠地の中庭にも巡回警備している人間がいるようである。

「一五、一六……。楽勝ね」

中庭で警備にあたっている人間を暗視ゴーグルで数えてエリはニヤリとほくそ笑む。

「所詮は烏合の衆。ちゃっちゃと情報だけ持って帰りましょ」

「へーい」

俺たちは屋上を後にして、ストレンジャー本拠地の壁まで移動するのだった。

その壁は普通に考えてジャンプしたくらいじゃ手の届かない高さなのだが……。

「よっ、と」

エリは軽やかな身のこなしで壁を蹴り、三角跳びで壁の頂点に手をかけた。

ひらひらと黒いタイトスカートが揺れる。

あっ、見えそう！ 見えそうだけど見えないいい！ これが噂の“鉄のスカート”か！ どんな見えそうな状況でも絶対に見せない見えないという鉄のスカート現象！

ああ、くそー。見えそうなんですけど注意の言葉がどうしても口から出そうにありませんごめんなさいそれが男の子なんですああ体が勝手に！

俺はすぐさまPCを取り出すとカメラモードを起動させた。

ベストショット貰ったぜ！

そして上を見上……ゲエ！？

俺の視界に映ったのは花園などではなかった。

そこに映ったのは金属の鉄板が仕込まれた革靴の靴ぞ

めきよこ！

「ぎゃひん！」

俺はブツと鼻血を噴出しながらもんどりうつて返った。

「あんたつてやつは……！ どうしてそう煩惱にだけは素直に従うのよ……！」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

俺はどこかの村の人みたいにごめんなさいを連呼して謝った。

「ったく、さっさと終わらせるわよ」

「はい」

再び壁を登りエリは壁を股で挟んだ。

俺もエリと同じように三角跳びして壁の頂点に手をかける。

こう見えても運動神経は良いんです。

そしてぐつと腕に力を入れ、体を壁の上まで持っていき、股をかけた。

「よっこい……って、おわ！」

股をかけたところで俺はバランスを崩してしまい、

どすん！

ストレンジャー本拠地の敷地内に落ちる。

「もう、バカ！ 大きな音たてないで！ バレたらどうすんのよ！」

すたんとこれまた軽やかに敷地内に着地して、エリは小声で怒った。

「ははは、悪い悪い。俺って潜入に向いてないんだよ。どっちかっていうとドンパチ向きだから」

と、その時だった。

「なんだ、貴様ら！」

男の声がして俺たちにライトの眩しい光が当たる。

「やっぱりバレてるじゃないのよ！」

エリはぼかんと俺の頭をどついた。

なので俺は『てへっ』と可愛く舌を出してみせる。

だが不思議なことに、どうやら俺のプリチーフェイスはお気にめさなかつたらしくエリが俺の首を両手で絞めてくる。

「死・に・た・い・の？」

「ぐ、ぐえ……！ し、死にますって……！ ほんとに……！」

「侵入者だ！ 侵入者がいるぞ！」

男が大声を張り上げた。

すると『カンカンカン！』と耳をつんざくような警鐘が夜の闇に鳴り響く。

それを聞いてエリは舌打ちをした。

「仕方ないわね！ やるわよ！」

「よしきた！」

集まってきたストレンジャーのメンバーがマシンガンの銃口をこちらに向ける。

俺とエリは同時に左右へ跳んだ。

ドガガガガガガガ！

銃口が火を吹き、闇の中で光る！

その凶弾は地面の土を巻き上げ、木造の壁に穴を穿つ。

俺は近くにあった瓦礫へ、エリは近くの大木へと身を隠した。

ふう……。まったく……。どいつもこいつも血の気が多いたら

ないよねー……。

ダウンッ！ ダウンッ！

木の裏からエリが銃一丁で応戦している。

その一発一発は確実にストレンジャーたちを捕らえていた。

おおー。どんどん敵が減っていくじゃないか……。

ばったばったと倒れていくストレンジャーたち。そして再びエリの方を見てみると、木の裏から彼女の姿がなくなっていた。

ありや？ 一体、どこに……？

と、思っ た刹那！

暗闇の中で木の上から飛翔する影に俺は気づいた。

うおっ！？ 跳んだ！？

ストレンジャーたちはまだ木の裏に彼女がいるものだと思って弾丸を放ち続けている。

その中央へ無音で降ってくる死神。

ズギャゴ！

一人の男の頭が変な方向に曲がる。

エリが空中から鋭い蹴りを放ったのだ。

「え？」

いきなり後ろの仲間が倒れたことに気付いて、男が振り返る。

だが、時既に遅し。

音も立てずにエリは懐に忍ばせていた電磁ナイフで男の首を掻っ切る。

おお、あいつ強いなあ。どんどんと敵を沈黙させていくぞ。うわ、金的っ！ あいつの足底には鉄板入ってたぞ！？ いったそー！

そして十数秒後。

ストレンジャーたちはすべて地に伏していた。

「こんなところね」

銃のマガジンを取り替えながらエリはふうと一息つく。

どうやらもう安全らしい。

「ま、なかなかの敵だったな」

俺もエリの隣でフンと鼻を鳴らしてみる。

「あんた！　今までどこ隠れてたのよ！」

ひよっこり出てきた俺を見てエリは眼を三角にして怒った。

「いや……だって怖いし。死にたくないし」

「ドンパチ向きって言ったのはどこのどいつよ!？」

ああ、むかつくわね!！」

そう言つとエリが俺の背後から俺の首に腕を回して締め上げてくる。

「ぎゃあ！　苦しい！　死ぬう!？　死んじゃうう!」

俺は空気を求めてバシバシと彼女の腕にタップする。それを見たエリは意外なことに簡単に手を離れた。

「はあ……。あんた、本当にアンサラーなの？」

頭痛でもひどいのか。こめかみを親指で押さえていらっしやる。

「ぜーぜー、しょっちゅう俺も思ってるよ」

しかし、これには同意せざるを得ない。何度も言うが俺は好きでアンサラーなんてやってるわけじゃないし。

「まったたく……」

「それよりさ」

俺は物言わぬ死体となってしまったストレンジャーたちに目をやる。

「なに?」

先を歩こうとしていた彼女はうざったそうに振り返った。

「なんで殺したんだ」

「はあ?　こいつら政府の敵じゃない。殺しておいた方がいいのよ。毎度毎度、変な事件起こしてくれるし」

なんでもないように彼女はそう言った。その言葉のとおり彼女は本当に彼らが死んだ方がいいと思っっているようだ。

哀しいことである。

俺が彼女に『ハーフなのか?』と訊いた時、彼女は『たぶんね』と言った。そこから想像してみるに彼女は孤児だったのだらう。そ

こを政府に拾われ、政府の命令で人を殺すガーディアンになったの
だろう。

人を殺すということに違和感を感じることもなく、だ。

幼い頃からの洗脳教育というのは恐ろしいものだ。自分で間違い
だと気づくことができない。

こいつも俺と同じ被害者か……。

ズキリと胸が痛み、彼女と昔の自分の姿が重なり合う。

俺は気づくことができたが、果たして彼女には誰が気づかせてく
れるというのか。

誰かが気づかせるしかない。

和雅さんが俺にエリを会わせたのは

「ここにいたらすぐにまた敵がくるわ。さっさと中に侵入するわよ」
言って駆けだすエリ。

あれだけの戦闘を行ったところだといのうに元気な人だ。

やれやれと首を振りながら俺は彼女の後を追った。

Answer - 1 "ガーディアン" 其の7 - 1

『こつちにはいなかった！ もう中に入ってるはずなんだが……！』
『くそっ！ どこいきやがった！』

ばたばたばた！

下の廊下をストレンジャーたちが駆け抜けていく。

そう、下。下と言うからには俺とエリは今、上にいるわけで。詰まる所、俺たちは廊下の天井にある換気口の中に寝そべったかたちで身を潜めているのであった。

おーおー、奴ら血眼になって探してるなあ。

と、見下ろしながら匍匐前進していると、

ガッ！

「いて！」

先を進んでいるお尻 あ、いやエリに頭を蹴られた。

つついっい声を出してしまい慌てて口を塞ぐ。

『ん？ 今、何か聞こえたような……』

「なーお」

エリが猫の声真似をする。

『なんだ。猫か』

今時、猫で納得するとは……。

俺は下にいるストレンジャーに呆れてしまう。

バレなかったことに、ほっとして顔をあげるとエリは裏社会特有の手文字を使って俺に『右の部屋へ降りるわよ。誰もいないわ』と指示を送ってくる。

俺はこくりと頷いた。

再び、匍匐前進で進み始めるお尻もといエリ。

それにしてもなんて美尻だ。右へ左へとふりふり動いて、俺を挑発していると思えない。

鉄のスカートは健在だし……。

気付けば俺はその魅惑の果実に手を伸ばしていた。

「っ！」

するとその気配を感じたと思ったのか、エリが振り返り、俺の腕を股に挟んで固める。

「いわゆる腕ひしぎ逆十字固めと呼ばれるプロレス技だ。」

「ギチギチ！」

『ぐあ！ ギブギブ！ こんな狭い所で逆十字なんてするな！』

俺が手文字でそう言うのと、

『こんな狭い所でセクハラしようとしてんじゃないわよ！』
と言いつ返された。

しかし、腕を胸元まで引っ張られているせいで手の甲に柔らかい感触が……！ ああ、なにこのマシユマロみたいな……！？ ねえ、なに！？ なんなのこの懐かしい感覚……！？

「ぐへへ……」

俺の顔つきが緩んだのを見て、そのことに気付くエリ。

「こおの……！」

エリが逆十字をしたまま、片方の踵を振り上げる。

と、その時だった。

「バキヤゴン！」

古い建物だということもあってか、換気口がぶっ壊れる。

「へ？」

「え？」

俺とエリは逆十字を極めた格好のまま、間抜けな顔で下へと落下した。

Answer - 1 " ガーディアン " 其の7 - 2

どてーん！

大きな音をたてて廊下に落ちる俺。その俺の背中に尻餅をつくエリ。

「ぐえっ」

肺の中の空気をすべて吐き出し一瞬呼吸困難になってしまう。

「お、おも……い……！」

「し、失礼ね！ 私は軽いわよ！」

げしっ、と上から後頭部を蹴られる。

空気を求めて顔をあげると、そこには先ほどエリの猫マネを真に受けたストレンジジャーの男が立っていた。

「なっ！？ お前らどこから　！」

エリが俺の背中を踏んで跳び、長い脚で男の足にスライディングをかける。

あっ、見えた！　今、俺の頭超えた時に黒いの見えた！　鉄のスカート破れたり！

おもいつきりバランスを崩した男の腹へエリは立ち上がり様に掌底を叩きこむ！

俺が慌てて廊下の右にある部屋の扉を開くと、吹っ飛んだ男が開けた部屋の中に転がっていく。

それを追ってエリはすたすたと部屋の中に歩いて行く。そして俺も中に入って扉を閉めた。

うーん、なかなかの連携っぷりだ。あと一人加われば“乱れ雪月花”の三連携技も夢じゃない連携率だな。

先ほど上で確認した通り、部屋の中には誰もいなかった。

エリはお腹をおせて床に倒れている男の腹を踏んづけて動けないようにすると銃口を突きつけた。

「うるさくすると額に穴が開くわよ」

その様はどつからどう見ても悪役である。

そして哀しいことに似合っている。

「ひ、ひいっ！」と怯えるストレンジャー。

「近頃の異常殺人事件、あんたらの仕業でしょ？」

「お、俺たちじゃねえよ！俺たちだってその事件について調べてるんだよ！」

「だってさ。あてが外れたな」

「嘘をついているだけかもしれないわ。締め上げましょう」

言つて懐から手の平サイズの爪剥ぎ器を取り出して、ガチャンと床に放る。

それを見た男の顔がサーツと青くなった。

「あ、おい、やめろつて。こいつは嘘ついてないつて」

「どうして分かるのよ」

「フ、言つたる」

俺はめい一杯カツコつけて髪を掻き揚げるとエリの眼を真つ向から見据えた。

「俺は真実に敏感なんだ」

「……………キマつた……………」

「はいはい。そうだったわね」

既に俺を見ていないエリ。

「ええええええ！それだけえええ！？」

「うるさい」

「げぶる！」

エリの回し蹴りを頬に受けて俺は地面に倒れ伏した。

この人のツツコミ……………いちいち痛すぎるんですけど……………。

「アンタ、おかしなことを言つたわね。私たちが調べてる異常殺人事件は政府の重要な人間にしかまだ知らされていないことよ。

どうしてストレンジャーのあなたが知っているのかしら？」

チャキ、と銃の撃鉄を起こすエリ。

「ちよつと前に貧民街で同じことが起こつてたんだよ！最初の被

害者は俺たちだ！ だから調べてただけだ……！」

「な……んですって……？」

銃口が揺らぐ。

「だから言ったる。ストレンジャーは白だって。橘さんの下着の色は黒だったけど」

シュツ！ ざく！

俺の横を投げナイフが通り過ぎた。間を置いてから頬をたらーつと血が垂れる。

ボ、ボケるのも命がけだぜ……！！

しっかし、まあた訳の分からないことになつてきたな……。

このストレンジャーの言う事が事実だとすれば疑問が残る。現在、異常殺人の被害者は政治に関わる者のみ。しかし、その前には政治になんら関連性の無い貧民街の人間が襲われていたという。一体、貧民街の人間を襲うことに何の意味があるというのか……。

「だとしたら、振り出しね。

アンタ、さつき調べてたって言ったわよね。ストレンジャーはこの事件について何か掴んだの？」

「あ、ああ！ ある企業がやばい研究をしてるらしい！」
研究。

その言葉に俺の眼がすつと細くなる。

「企業はいつだってやばい研究しているものよ」

「そんなレベルじゃねー！ あいつら戦争する気だ……！」

「戦争ねー。その企業っていうのは？」

「そ、そんなもん知るかよ！ リーダーに聞いてくれよ！」

「……はあ。そんなに簡単にはいかないわよね。他の奴ら呼ばれても面倒だし、とりあえず死んどいて」

再び銃口が男の脳天を捉える。

「ひいつ！ お助けえ！」

「こらこら。とりあえずで殺すなよ。俺たちで調べればいいだけの話じゃん？」

見るに見かねて俺は止めに入る。

「俺たちって……。どうせ調べるのは私でしょ!？」
とエリが言ったその時。

不意に声がした。

「相変わらず甘いな、君は」

「リ、リーダー!」とエリに銃口を突きつけられていた男が叫ぶ。
いつの間そこにいたのだろう。

部屋の扉を固めるように男たちが立っていた。

その中央に立っているリーダー格の男。歳の頃は二十台後半だろうか。茶色の色眼鏡をつけた黒髪長髪の男。その長身は青いローブに包まれている。

その後ろには十数人の男たちがつき従っていてこちらに銃口を構えていた。

エリは瞬時に取り調べていた男を立たせると背後に回って男のこめかみに銃口を突きつけていた。

その姿はまるでCQCの基本を思い出した某蛇さんのようだった。彼は人質というわけだろう。

もしこんな狭い部屋で撃ち合えば俺たちに勝ち目はない。

ストレンジャーたちは妥当な国家政府という理念の元に動いている組織だ。その組織のリーダーともあるう人物が部下を見捨てたとあれば、ストレンジャーたちの士気はガタ落ちするだろう。

つまり、人質がいる限り手出しはできない。

エリの行動はその事を理解した上でのことだろう。

リーダーと呼ばれた男。

その男の顔に俺は見覚えがあった。

「ありゃあー？」と思わず呆けた顔で指をさしてしまふ。

「久しぶりだな、樹」と視線もくねずに言う男。

「あれま。ストレンジャーのリーダーってお前だったのか」

「……………なに？ あんたの知り合い？」

人質の背中で眉をひそめるエリ。

「工藤宏治。元アンサラーだよ、こいつ。昔はよく仕事で組んでたんだ」

「アンサラー？ どうしてアンサラーがストレンジャーなんかにいるのよ」

「樹の言った通り私は元アンサラー。国家政府側の人間だった。」

しかし私が理想としていたものと、国家が築こうとしているものは別物だった……。

そう別物だったのだ」

悔しそうに拳を握る宏治。

「私がどれだけ人を殺めようと貧民街の人間は救われはしない……！」

この国をよくするために！

そんなことを声高らかに言いながら、国家がやっていることは企業にすぎってこの国を維持し続けるのがやっと……！

もはや任せてはられない！ 今の国家政府に、存在価値などない！」

まるで演説でもするように拳をふるう。

実際、それは仲間の結束を固めるための演説でもあるのだろう。

周りの部下たちが何か熱中するように夢中になるように宏治を見つめている。

「だから私は今ここにいる！ 君たちも知っているだろう！ 貧民

街の様子を！ 今日食べるものにも困窮している人々を！

だから私は今ここにいる！

ふざけた国家政府をうち滅ぼすために！

貧民街の人々を悪政から解放するために！」

そう宣言すると、

『うおおおおおおおおお！』

ストレンジャーたちの気持ちが一気に高ぶる。

さすが宏治だ。貧民街の人々の心をよく掴んでいる。

宏治は昔から口がうまかった。覚えてる範囲で俺は彼に口論して勝てたことがない。

「話を通じる相手がいて良かった。銃を降ろすんだ」

宏治が部下たちに指示を送る。

「し、しかし……！」

「降ろすんだ」

有無を言わさぬ宏治の威圧感。

渋々と銃を降ろす部下たち。

「君ももう私の部下を解放してくれないか。君たちが望んでいるのは情報だろう。彼の尊い命ではないはずだ」

あまり納得のいってない顔でだが、エリは男を解放した。

「では、私の部屋で話そうか」

青いローブを翻してカツカツと宏治は歩き始める。

それに俺とエリは顔を見合わせ、ついて行くのだった。

宏治に連れられて俺たちは別部屋へと案内されていた。

そこは一見、会議室のようだった。

中央には長い楕円型の机。その周りを囲む椅子。壁にはストレンジャーたちのエンブレムが描かれた青い旗が張り付けてある。他にもモニターシートが壁に広げられていて、そこには貧民街を含めたこの街の地図が映っている。

隅っこにはデスクが一つあり、どうやら宏治の部屋と会議室が兼用されているらしい。

俺は部屋を見回すのをやめて本題に入った。

「で、何が分かったんだ？ さっきお前の部下が戦争だとか物騒なこと言ってたぞ」

「それは事実だ」

机に両肘をつき、鋭い眼光と口調で宣言する宏治。

「どうということ？」

「今までも裏で アンサラーを通して企業は抗争を続けてきた。だが、それにさえ痺れを切らした企業があるということだ」

エリの問いに残念そうに答える。

「おいおい。まさか企業が保持している軍事力で直接他の企業を攻撃するっていうのか？ 国家が許さないぞ」

「それでもなくても国家政府は企業が軍事力を持っていることを嫌がっている。それを自分の利益のために使うとなれば、黙っているはずがない。」

止められるかどうかは別にして。

「普通にやればそうだろうな。だが今回企業が計画している方法を使えば、企業の名前は一文字たりと判別しない」

「そんな方法があるのか？」

「あるのだよ」

「毒ガス、細菌。そんなところね。仕掛けを作れば遅延させることもできるし。特定範囲内で無差別大量殺人を行うならこれ以上に良い手はない。建物も壊れないしね。」

「ただ、今回の件はそうじゃない」

「鋭いお嬢さんだ。彼女の言うとおりそれらではない。もっと画期的なものだ。非常に殺傷力があり、隠密性もあり、トラブルにも瞬時に対応することができる……。」

「そういう“代物”だ。」

その企業ではこの研究のことを“コード：A計画”と呼んでいるようだ」

“コード：A”……。

ここで出てきやがったか……。

その言葉はMSNで手に入れたデータチップに入っているリストで登場した。

つまり、MSNがその企業ということか？

いや、待て待て。MSNで手に入れたリストのもう片方は行方不明事件者名簿だったはずだろ？

ということはやっぱり、行方不明事件とこの異常殺人事件には関係性がある？

俺はふうむと唸ってあごに手をやる。

「国家はそのことを？」

「どうだろうな。どこまで掴んでいるか」

俺はエリに視線をやった。

「………………。掴んでないわよ。初耳」

宏治はため息を吐いた。

「だろうな。知っていれば行動を起こしているはずだ。いよいよ国家は情報収集も満足にできない状況になったと見える」

「……………」

無表情のまま黙っているエリ。

だが俺には見えていた。

感情の见えない顔の裏に隠された悔しがるエリの顔が。
当然、宏治の言うことはエリも分かっているのだろう。年々顔を広げる企業、それにつれて影が薄くなっていく国家政府。
国家直属のアンサーであるガーディアンがこんな話をされて何とも思わないはずがない。

Answer - 1 " ガーディアン " 其の 8 - 2

「話を戻そう。その“代物”も厄介だが、この件にはもつと厄介なもの関わっている」

「アンサラーか？」

力をなくした国家政府よりも莫大な資産を持っている反政府企業側について保身に走るアンサラーなどよくある話だ。いや、むしろ今の力関係を考えれば当然と言えるだろう。

「フ。アンサラーなど彼らに比べれば可愛いものだろう」

そう笑ってから宏治は真面目な顔つきになる。

「 Nobody knows 」

「！？」

驚きのあまりかガタツとエリが席を立ち上がる。

くどいようだがNKとは世界最高の暗殺者たちの組織だ。アンサラーとしての登録はなされておらず、独自の組織性を持っている殺人者集団。

やっぱりあいつらこの件に関わってやがったのか……。

「あーあ、最悪だ。俺おりていい？」

「駄目に決まってるでしょ！ もう契約したんだから！」

「だよなあ。あー、殺される」

ぶしゅーと空気が抜けたように机に突っ伏す俺。

「貴重な情報、ありがとう。助かったわ」

エリは振り返ると扉へ向かった。

「どこに行くんだい？」

「どこって……。帰るのよ。情報も頂いたし」

「フハハ、まさか……。」

このことを知った政府側の君たちを簡単に帰すとても？」「ジャキッ。

部屋にいたストレンジャーたちからマシンガンを向けられる。

扉が大きな音をたてて開くと、ぞくぞくとストレンジャーたちが俺とエリを取り囲む。

「っ！ あんたら……！！」

周りを睨みつけるエリ。

「俺テスト期間だから帰って勉強しないとマズいんだけどなあ」

ポリポリと頭を掻いてみる。

「連れて行け」

だが無情にも宏治はそう言った。

Answer - 1 " ガーディアン " 其の 8 - 3

ぴちよん……、ぴちよん……。

どこからか水音がしている。

そのためか牢獄の中は冷たくひどくじめじめしていた。

その後、私たちが連れて行かれたのがストレンジャー基地の地下にある牢獄であった。

「ああ、最悪。一生の汚点だわ。敵に捕まるだなんて」

私は狭い牢獄の中をうろつくと歩き回りながら頭を掻いた。

裸足にされたせいで石の地面が冷たい。

これでは鉄格子も蹴り破ることはできない。

銃もナイフも当然とられちゃってるし。

「そうだなー」

がちやがちや。

隣の牢獄から緊張感の無いバカの声が聞こえてくる。

「おなかも減ったわね」

くうくう、と鳴るお腹をよしよしと撫でる。

「そうだなー」

がちやがちや。

「あんた、本当にこの状況分かってんの!?!? 殺されるのよ!?!?」

「そうだなー」

がちやがちや。

聞いているのか聞いていないのか。気のない返事しか返ってこない。つていうか、さっきからガチャガチャガチャガチャうるさいわね。ちよつとは静かにできないのからしら、あのバカ。

まあ、あのバカのことはこの際どうでもいいわ。こんなところで死んでたまるもんですか。私だけでもさっさとここから脱出しなさいや。

私は鉄格子からちらりと警備しているストレンジャーの男を見た。

少し離れたところにおいた椅子に座って、暇そうにしている。その腰には電子キーがぶら下がっていた。

ふふふ。相手は一人……。これなら簡単に抜け出せそうね。

私は早速、作戦を実行することにした。

牢獄の中にあつた金属製の皿を地面に落とす。

ガチャンガラガラッ！

甲高い音がして警備の男がこちらを見た。

「静かにし」

そして男は見たはずだ。熱に侵されたように艶かしく倒れている私の姿を。

「おい、どうした！？」

「はあ……はあ……。熱い……熱いの……」

私は胸元をはだけさせ、自慢の白いふとももを摺り合わせる。

ごくり。

男が私のあられもない艶姿を見て生唾を飲み込んだ。

ふん。ちよろいわね。

私は男に見えないようにニヤリとほくそ笑むと、うるうるした瞳に戻し、片手を拳にして口元にそえ、男を見つめる。

「お願い……きて……」

ずきゅーん！

男の心の臓が打ち抜かれた音が聞こえた。

「うおおおおおお！　今いくぞおおエリたああああん！」

なんか隣で叫んで壁をガンガン殴っているバカがいるが放っておこう。

と、その時だった。

「おーい、交代の時間だぞー」

もう一人のストレンジャーが階段を下りてきた。

げっ……！

「おお、丁度良かった。俺は今からコイツの相手するから見張り頼む」

ま、待って！ 話しが違っじゃないの！

当初の作戦では鍵を持った男が扉を開けた瞬間にぶち倒し、そのまま脱出するって手はずだったのに……！

「ったく、お前はほんと仕方ない奴だな」

見張りの男が先ほどきた男に鍵を渡す。そして交代した男は鍵を開け、今まで見張りをしていた男が牢獄の中に入るとすぐに鍵をかけてしまった。

まずい。これは非常にまずい。貞操の危機である。

牢獄の中に入ってきた男はニヤニヤとしたイヤらしい顔で私に近寄ってくる。

「あー、やっぱり何ともありませんでしたー。あは」

私は胸元をささっと隠して立ち上がる。

「おいおい、そりゃないだろ。あんだけ誘っておいて」

男が私の腕を掴んで、無理やり壁に押し付けくる。

「いつっ」

「ぐへへへ……いい体だな……」

「きゃああ！ 変態！ 死ぬ！ 近寄るな！ ばか！ 触るな！」

ああ……もうダメだ……。こんな奴の好きにされるくらいなら舌嚙んで死のう……。

と諦めかけた時、私はあのバカがとこと廊下を歩いて行くのを見た。

「……は？」

思わず眼が点になる。

そうあのバカは 新谷樹は牢獄から出て廊下を歩いているのだった。

「ちょ、ちょっと、あんだ！」

バカは壁に押さえつけられている私の方を見ると、

「あ、忘れてた」

忘れてたじゃねえー！？

「てめえ！ どうやって牢から！」

「なんだと……！ いつの間に外に……！」

と鉄格子に迫る男と、あのバカに殴りかかる警備の男。

「つるさいわね！ どいてよ！」
どげし！

私の鋭い蹴りは男の背後から金的を捉えていた。

「はあうづうづうづうづうづうづうんっ！」

ガシャンと鉄格子にしなだれかかって倒れる男。

バカはといえば殴りかかってきた男の拳を横にひょいと避けて、足をひっかける。

「あわ！ あわわわわ！」

がつん！

足を引っ掛けられてもろに体勢を崩し、顔面から倒れた男はそのまま気を失ってしまった。

「ちよつとあんた、どうやって……！ いやどうやってでもいいから早く出して！」

倒れた男をふんづけて私は鉄格子にすがりつく。

「えー、でもなあ」となぜか渋る彼。

「私とあんたの仲じゃない!? 仲間でしょ!？」

「いや、だって橘さん俺のこと嫌いだろ？」

「橘って呼ば 嫌いなわけないじゃない! 何言ってるのよ、樹ったら! 私たちパートナーでしょ!？」

「今初めて名前で呼ばれた気がするんだけどなあ」

「き、気のせいよ、樹! ほら私たち前々から名前で呼びあう仲だったじゃない!」

「じゃあ俺のこと好きなのか？」

何の脈絡もなくそう聞かれて、

「は？ 誰があんたなんか ！」

と思わず本音が出てしまう私。

「んじゃ、またな」

手をふりふり歩き出す樹。

「うそうそ！ 好きです！ 大好きです！」

恥も外聞もなく私は背中を向けた樹に手を伸ばす。

「なんだそうだったのか」。だったら早く言えば良かったのに。俺も橘さんのこと好きだから」

「ワー、オドロイター。アナタモワタシノコトスキダツタノネー」

よくもまあ真面目な顔でそんなことが言えるものだ。聞いているこっちが恥ずかしい。

「棒読みになつてない？」

「いいから早く出してよ！ デートでも何でもするから！」

「なんだつて？ んまつ、なんて破廉恥な！ なんでもだなんて！ ? よし、すぐ行こう！ さつさとホテルに行こう！」

樹が針金でガチャガチャと鍵をいじり始める。するとほどなくして鍵は開いた。

こいつ、謎にスキル持つてるわね……。どうやって針金で電子鍵を解除してんのよ……。

「さあ、早くボクたちの子供を作ろうか、エリ」

どげし！

「ごぼっ！」

こちらに手を伸ばしたセクハラ男の顔面にハイキックをお見舞いする。そして地に伏せたバカの背中をぐりぐりと踏みつける。

「よくも私を置いていこうとしてくれたわね……。？ ああん？」

「ぎゃああ！ 嘘つきー！ 俺の子供を産んでくれるって言ったくせにー！」

「言つて無いわよ！」

私は思いつきり背中を踵で踏んづけた。

「ああん！ そこ！ もつとー！」

ビクツとエビ反りになって震える樹。
嫌悪感でびくびくと私の眉があがる。

「こんの……！ ド変態がああ！」

私は思いつきり樹の後頭部を踏みつけるのであった。

Answer - 1 "ガーディアン" 其の9 - 1

カポカポ……カポカポカポ……。

「歩きにくいわね。あんた足のサイズでかいのよ」

私と新谷樹は物影に隠れながらストレンジャーたちの本拠地脱出を試みていた。

「人から靴を奪っておいてよく言えますね」
私の足元を見て言う彼。

そう。鉄板を仕込んであるブーツをとられて裸足だった私だが、今は彼の好意にあやかかって彼の靴を履いている。

「武器もないのに逃げられるかしら……」

私は人気のない廊下をすたすた歩きながら呟く。

あれからだいぶ時間が経ったせいか、ストレンジャーの連中も見張りを除いて眠ってしまったようである。

この分だと私たちが牢獄から逃げ出したことにはまだ気づいていないようだ。

「そうだなあ。一丁しかないのは心もとないよな」

一丁？

その言葉に私は振り返って彼を見た。するとどうだろう。彼はハンドガンを指でくるくると回しているではないか。

「つて、えええええ！？」

私は思わず小声で叫んで、彼の持つ銃を指差す。

「あんた、それどうしたのよ！ 銃回収されたでしょ！」
すると彼はひょうひょうとした感じでこうのたまう。

「ああ、とられた。でも胃の中のは回収されなかった」

「は？」

意味が分からない、という表情を私がしていると、彼はこくりと頷く。

「説明しよう。人間ポンプって知ってるだろ？ あの金魚を口から

だすやつ。あれと同じで銃をバラバラにして」

「ああ、はいはい。あんたが大道芸人だつてのは分かったわよ」
私はうんざりとしながら再び歩き始める。

こいつの言う事はいまいち信用にかける……。というか、どこまでが本当の話なのか判断しにくいのだ。銃を分解して胃に入れていたなどという話も真実かどうか……。

私は内ポケットから小さな鏡を取り出すと、その反射を利用して廊下からその先の様子を確認した。

この先はどうやら広い玄関ホールになっているようだった。暗いながらも外への扉が見えている。

出口はもうすぐそこだ。

かといって安心はできない。ここはまだ敵の本拠地内。敷地の外に出るまで気を抜いてはいけない。

「もう一丁あるけど出そうか？」

その言葉に私の表情がぱっと明るくなる。

「もう一丁あるの！？ ありがたいわ！ てか、あんた、胃に何丁いれてるのよ……」

「いや、もう一丁はお尻の」

「いるか……！」

バカの頭を拳でどついた。

「まったく……さっさと出るわよ」

と、玄関ホールへと出たその刹那。

「そこまでだ」

その言葉と共にカツと私の網膜を白い光が焼く。

ライトの方向を見てみると、二つの大きなライトの真ん中に人が立っているのが分かる。

それは誰であろうかなストレンジャーのリーダー、工藤宏治であった。

Answer - 1 " ガーディアン " 其の9 - 2

「……！ 囲まれてるわね」

私はそこでやっと周りの気配に気付く。

ザッザッザッザ。

銃器を持ったストレンジャーたちが私とバカを囲む。私とバカは背中合わせになって周りに眼をやった。

所詮は烏合の衆と侮っていたわね……。まさか潜んでいる気配にも気づかないなんて……。

数はざっと二十人ほどだろうか。

完全に私たちは包囲されているようだった。

新谷樹は抵抗しないことを表すためか、銃のマガジンをだす。

ガチャン、と彼の足元に落ちるマガジン。

「さすがといったところだ、樹。どうやって牢から逃げ出した？」

「だから口からカードキーをこう」

私は無言で背後にいるバカの横っ腹に肘鉄を入れる。

どす！

「ぐぼ！」

「そのネタいつまで続ける気なのよ。こんな時にふざけないで」

「？」

そんな私たちの様子を訝しそうな眼で見る工藤宏治。

「あー、気にしないで。こっちの話だから」

「そうか。本音を言ってしまうえば君たちにはストレンジャーに加わってもらいたかったんだが……。

どうやら不可能……みたいだな」

工藤宏治は残念そうに眼を閉じた。

ふん。私たちを殺さずに牢獄に入れていたのはそのためだったのね。

「当たり前でしょ。私はガーディアンだもの。あんたら国家に反逆するストレンジャーに属するなんて死んでもごめんよ」

「だろうな」

彼は眼を閉じたまま、深いため息を吐いた。

「では、仕方ない。我々の敵をこのまま逃すわけにはいかないの
な。

せめて、苦しまずに逝け」

工藤宏治がすつと手をあげ、部下たちに指示を送ろうとしたまさに
その刹那だった。

ぞわっ……！

私の背筋を尋常ではない殺気がかけぬけた！

それは感覚の鈍い一般人でも身が竦み吐き気を催すような濃密な
殺気。

これが本当に殺気と呼べるものなのかそれさえも怪しい。

幾人……幾百人、いや幾千人をも殺した者だけが会得できるよう
な老練で研ぎ澄まされ刃となった気……！

ズウオオオオオオオオ……！

その殺気にあてられれば誰もが恐怖せざるを得ないだろう。

なぜなら私とてその殺気に声が出せないでいたからだ。

一体、何が起こっているのか分からない。

ただその殺気は背後から伝わってきているものだということとは理
解できていた。

振り向けない……。

振り向きたくない……！

ガクガクガクガク……！

震える。

自然と体が震えてしまう。

ガチガチと歯が合わさらずに音をたててしまう。

数多の修羅場をくぐった私でさえ弾き返せない殺気。

私の背後にいるのは

“化け物”だ……！

その空間にいた誰もがその殺気に気圧されていた。

信じられないほどの威圧感と圧迫感。まるで金縛りにでもあったかのように動けないでいる。

圧倒的不利な状況だというのにこの空間の支配者は間違いなくこの殺気を放っている人物であった。

過去にこの恐ろしい殺気を受けたことでもあるのか、いち早く反応できたのは工藤宏治だった。

焦燥を隠そうともせず、大声で叫ぶ。

「何してるんだッ！ 早くあいつを　！」
だが遅かった。

その刹那！

私の体が後ろに巻き込まれるように風が轟ッと靡き危うく倒れそうになる！

ダ、ダゴウンン！　ダゴウンン！　ダゴウンン！

私が聴いたのは三発の銃声。いや四発か。

しかし銃弾は私を貫いていなかった。

ストレンジャーたちが撃ったのではない。

ぼたり、と額から出た汗が流れ、地面に落ちる。

私は恐る恐る振り返った。

彼の持つハンドガンの銃口から白い煙が立ち昇っている。

そう。撃ったのはド変態のバカ野郎　新谷樹その人だったのだ。

遅れてバタバタと周りにいたストレンジャーたちが同時に倒れる。

「ぐあつ！ ああああつ！」

「撃たれたあ！ 撃たれたア！」

「なんだ……！ 一体、何が……！？？」

完璧に肩を撃ちぬかれ、苦しみ悶えている。

私は理解できなかった。

銃声は四発。だというのに倒れている人数はそれを遙かに上回る。

物理法則に反していた。

いやそもそもマガジンは抜けていたはず……！ なのにどうして弾が……！？ チェンバーの中に弾を残していた！？

普通一般的に銃弾を補充する時、予めコックして弾を一発薬室の中に入れてからマガジンを装着するものだ。そうすればマガジン＋一発分の銃弾を撃つことができる。それはマガジンを抜いても一発は薬室に残すことができるということだが……。

だとしても一発だけのはず……！

そこで私は彼の足元のマガジンがなくなっていることに気づいた。そして樹の銃にはちゃんとマガジンが刺さっている。

まるで空間が転移でもしたような現象。

一体、なにが……！？

私がそう思った矢先。

彼の足元の地面についた銃痕に気づいた。マガジンがあった場所に銃痕があったのだ。それ以外にも空のマガジンが二つ。

まさか……！ こいつ……！

それを見て私は今の現象を推察することができた。

銃の中にあつた一発でマガジンを撃つて上に弾き飛ばし、それを銃に装着してこいつらを撃つたっていうの……！？

しかも二回もマガジンを入れ替えた！？

あの一瞬で……！？

だがそう考えれば計算が合い、物理的にも可能である。

私が聴いた四回の銃声。最初の一発はマガジンを弾くため。他の三回、その一回の銃声が一つのマガジン分の銃声だとするなら……！
合う。

ぴったりと合ってしまった。

私の頬を脂汗が流れる。

ごくりと生唾が喉を流れる。

でも……！

有り得ない……！

こんな奴にそんな芸当ができるはずが……！

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……！

地響きのような音となって聞こえてくるような、それほどに圧倒的な存在感。

銃を構えるその姿にいつものへらへらとした様子は一厘も見えない。
い。

彼は私が見たことの無い鋭い眼をしていた。

これが……こいつの本気……なの！？

新谷樹がゆつくりと次のマガジンを装着する。

そして工藤宏治に銃口を向けた。

「チエックメイトだぜ？」

私は長官の言葉を思い出す。

すぐに分かる。私が彼こそ世界最高のアンサーだと言った意味がな。

っ……………！こいつ……………！

と、その時だった。

『ゴゴゴゴ……ガチャ……まじかるきゅーと……
きづなち
や……ん』

どこから流れてくるポップなメロディ。

「は？」と思わず私の眼が点になる。

私だけではない。その場の誰もが眼を点にしていた。撃たれたストレンジャーたちも痛みを忘れ口をぽかんと開けている。

工藤宏治の色眼鏡もずりりと片方に垂れ下がってしまっている。

よく見ると樹のポケット（おそらくPCだろう）からそのメロデイが流れてきているではないか。

「あ、しまった！ 威圧感の効果音の上にきづなちゃんのテーマソング上書きしたの忘れてた！ くそっ、せっかく橘さんが俺に惚れそうだったのに！」

慌てて樹はPCを何やら操作する。

『ゴゴゴゴゴゴゴ……！』

再び流れ始めた地の底から響くような音。

またもや渋い表情に戻って銃を構えるバカ。

「……………はあ」

せっかくの緊張感が台無しになって、私はだらりと肩を落とした。

Answer - 1 " ガーディアン " 其の10 - 1

宏治はやれやれと首を振ってため息を吐いた。

「一瞬の隙も与えてはいけなと分かっているつもりだったのだがな」

「そんな考えじゃ逆転されて当然だな。本当に脅威だと思ってたなら最初に捕まえた時点で殺しとくべきだった」

「私の負け……だな。撃て」

宏治は眼を閉じた。

「なら遠慮なく。じゃあな、宏治」

ドギヤウン！

一発の銃声。

宏治の体がビクツと震える。

だが、いつまで経ってもこない痛みを疑問に思ったのか宏治はゆっくりと眼を開けた。

「やゝい！ 引っかかった、引っかかったゝ！」

俺は宏治を指差してカツカと笑う。

宏治は俺の左手に持ったPCを見ると眼をぱちくりとさせた。

俺がPCを操作するとPCから『ドギヤウン！』と再び銃声がする。

「何してんのよ、アンタ！ さっさとトドメを刺しなさいよ！」

「ガーディアン言うとおりだ。今のうちに殺しておかなければ私はお前たちの脅威になるぞ」

「俺がお前を撃てるわけねーじゃん。

それにこの銃、さっきので壊れちまったみたいだしな。やっぱハンドガンじゃダメだわ」

言いながら俺はハンドガンを見下ろす。金属のトリガーが変な方向に曲がってしまっていて、トリガーを引けないような状態になってしまっていた。

おそらく俺の早撃ちに耐えられなかったのだろう。

「はっはっは！ まったく君ってやつは……。
だがいつかそれが君の命とりになるぞ」

忠告のつもりなのか、真面目な表情をする宏治。

「かもな。それじゃあ、俺は今からホテルでイチャつかない
って、あああああ！？ 試験勉強、結局できてねえ！」

「いつまで言ってるのよ、アンタは」

俺が肩を落としてとぼとぼと出口へ向かうと、エリもため息を吐いてついてくる。

と、その時だ。

「樹」

宏治に呼ばれ振り返る。

「持っていけ」

宏治がひゅつと何かを投げた。

それを俺は片手でキャッチし、確認する。

それはデータチップだった。

「そこに“コード：A”の一部が入ってる。それを見ればお前の探している企業が何を“つくっている”のかが分かる。

止めるんだ、絶対に」

俺は少し驚いてしまいデータチップを眺めていたが、すぐにニヤリと笑った。

「ありがとな……相棒」

俺のその言葉に宏治は眼を丸くして驚く。

そして懐かしそうにフと顔を綻ばせるとザッと振り返り背中を見せた。

「“元”……な」

青いローブを翻し、傷を負ったストレンジャーを引き連れて宏治は闇の中へ消えて行った。

その青いローブの背中にはストレンジャーの雄雄しいエンブレムが刻まれているのだった。

Answer - 1 " ガーディアン " 其の10 - 2

「あー！ 朝日が眩しいー！」

山のとっぺんから降り注ぐ光に樹は眼を細める。

私たちは街へと戻ってきていた。

朝の光を抱くように両手を広げている樹を背後からじっと見つめる。

思い浮かぶのは一瞬でストレンジャーたちを無力化したあのクイツクショット。

あんな芸当、トップクラスのアンサーでもできない。

できるとすれば

私は聞いたことがあった。

銃器類を思いのままに操る一人の男の話を。

それは“ Nobody Knows ” に所属する一人の男。

NK史上最悪の殺し屋。

その男は銃の軌道の総てを知り尽くしているという。どんな狙いも外すことはない。その命中率もさることながら、彼の真骨頂はその早撃ちにあるという。

信じられない話だが、その男はマガジンに詰められた弾全弾を瞬間で放つらしい。

あまりにも早すぎてその銃声は一発に聞こえるのだとか。

正直言つて人間とは思えない。化け物だ。

その男はNKでも尊敬と畏怖の念を込められてこう呼ばれているらしい

樹が立ち止まっている私に気付いて振り返る。

朝の光を浴びて、私には彼の笑顔が輝いているように見えた。

「何してんだよ、早く帰ろっぜ」

“ エース ” と。

私は大きくかぶりを振った。

「……………。何考えてんだろ、私。こんなセクハラ男が……………？まさかね……………」

そもそも“エース”は三年前に死亡したという記録が残っているじゃないのよ。

私は彼の後を追って歩き出した。

「あー、お腹減ったー！」

ねえ、樹。どうせなら朝ご飯食べていかない？」

私のその言葉に樹は驚いた表情になる。

「なによ？私があんたを誘うのがそんなにおかしい？」

「……………いや」

と微笑むと、樹は空手家のように両手をビュッとばってんにきった。

「ゴチになります！」

「誰が奢るって言ったのよ！」

「お金がないんです」

「はあ！？前金でがっぽり貰ったはずでしょ！？」

「その金が入るはずだったキャッシュカード。この前、貧民街にいた可愛い女の子に渡しちゃった。てへっ」

「……………。バカだ。信じられないバカがここにいる。」

「あんたって奴は……………！だいたいあれだけの早撃ちができるなら最初から」

「あーだ、こーだ。」

私は樹に文句をぶつけながら、朝の光に照らされた道路を二人して歩いて行くのだった。

誰にも平等に降り注ぐ朝日の中を

翌日、俺とエリはまた駅前の喫茶店にいた。

ストレンジジャーのリーダー、工藤宏治がたくしたデータチップ。

その中には確かに研究資料が入っていた。それはとてつもなく禍々しい研究資料だったらしい。

「遺伝子操作？」

「ええ、そうよ。八足歩行のワニ、翼の生えたライオンとかね。見たいなら送るけど？」

エリの申し出を俺は手を振って断る。

「まさに“キメラ”だな。それが企業の生み出した新兵器ってことか」

「……………」

エリは少し考え込むように黙る。

「やっぱり……………何か変なのよね」

「なにが？」

「その“キメラ”とやらで狙った人が殺せると思う？ “ヒューマンイーター事件”は政府関係者が狙われて殺されているのよ？」

「あー、言われてみれば、確かに」

いくら“キメラ”といえ知能は元の動物とほぼ変わらないはずだ。無差別な大量虐殺ならば得意そうだが、ピンポイントな暗殺になると話は違ってくる。

「どうにもきな臭いわ。この件、まだ裏に何かありそうね」

深く椅子の背もたれに身を預けて天井を見上げるエリ。

「まあまあ、どっちにしるどこの企業か分からないし、手詰まりなんだから地道に調べるしかないじゃん」

「何言ってるの。ある程度の目星はつくじゃない」

「へ？ どういうこと？」

「犯人は遺伝子生命学の研究をしている大企業でしょ。さらにこの

街に研究所がある企業。これでいくつかには絞れるじゃない」

言われ俺は手をポンと打つ。

「あー、なるほど。頭いいなあ」

「あのねえ……これぐらい誰でも推測できるわよ。」

それよりも問題なのはその幾つかの中から一つを導き出すことよ。

三日で一人が殺されている現状、全部調べるのは時間がかかりすぎるわ。見つけたす頃には新たな被害者が続出しているわよ」

アンサラーは慎重に行動し、地道に情報を選び集めて任務を成功させるものだ。一ヶ月、二ヶ月の下調べなんてざら。なぜならば急いで動きがバレては意味がないからだ。確実に成功への道を辿るために時間がかかるのは仕方がないことなのだ。が

「一週間」

俺はすつと人差し指を立てた。

「なにが？」

「一週間でどの企業かを割り出せるかもしれない」

「はあ？」と不審げなエリさん。

「企業の方から名乗りをあげてもらえばいいんだよ」

「あのねえ。そんなことできたら苦労しないわよ」

「できるんだなあ、これが！　すべてこの新谷樹に任せなさい！

あーっはっはっはっはっは！」

俺は自信たっぷりで立ち上がると胸を張って大笑いしてやる。

いまいち信用していない橘さんの眼。

この視線が熱視線に変わる日も遠くないだろう。

Answer - 2 "反国家政府" 其の1 - 2

『定期試験後の打ち上げ?』

俺の言葉にみなは電子ノートから顔をあげた。

今日も今日とて定期試験の勉強会をしている経済研究部のみなさん+ツンデレ。

「そうそう。こうパーツとさ!」

俺は両手を大振りで大げらみでみせる。

「あらまあ、いいですね」とみちる先輩は乗り気のご様子。

「俺も構わないぜ。久しぶりに騒ごうじゃないか」と頷く廉人。

「いっつも騒いでる気がしますけどね」。

打ち上げて何するんですか?」

菊がそう尋ねてきたので、俺はフツと笑って言葉を返す。

「菊隊員、冬といえば何だね? 聡明な君ならば分かるはずだ」

「ハッ、鍋でありますか隊長!」

「そうそう、みんなでおこたに入りながら鍋を囲んでちっがあ

う! ばっかもあうん!」

ぺちんっ!

菊っちは俺の愛の弱ビンタを受けて少し怯みながらも頭を下げた。

「あ、有難うございます! では雪合戦でありますか!」

「そうそう、雪の中に小さい石を入れてギャー顔は狙わないでえせつかくのイケメンがあつてちがあう! このばかもん!」

ぺちんっ!

「あうっ! あ、有難うございます!」

再び俺の愛弱ビンタを受け涙眼になりながら頭を下げる菊っち。

うーむ、素晴らしい調教具合だ……。

「そのくだらない漫才いつまで続くの?」

と既に興味をなくして冷たい眼の水崎。

くっ、こいつ……ツボに入らないネタだとクスリともしやがらね

えな……。

「いいだろう。ずばり言っただけよ。」

俺はたっぷり時間を使って全員の顔を見回す。俺にちゃんと注目が集まっていることを確かめて俺は声を張り上げた。

「スキー合宿にいくぞおおおお！」

『おおおおおっ！』

ぱちぱちぱちぱち！

概ね好評だったらしく拍手するマイフレンズ。ありがとう、皆ありがとう。

俺は天皇のようににこやかな笑みで応えて手を振った。

「私はパス。そもそも経研部じゃないし」

そして空気を読まないツンデレは机の真ん中で広げられたスナック菓子をポリポリと食べる。

「いや、これ副部長命令だから。強制イベントだから。誰もが通る道だから。もうフラグ立ってるから」

「だから私は経済研究部の人間じゃないって言ってるのよ！ っていつか先輩、なんでこんな奴が副部長なんですか！」

「あらまあ水崎さん。こう見えて新谷くんはよくやってくれてるんですよ？」

さすがみちる先輩だ。俺のことを理解してくれていらっしやる。それに比べて……。

俺はツンデレに顔を向ける。

「水崎・T・葵よ。あ、このTはもちろんツンデレのTだからな」

「ハーフ名みたいにして呼ばないでよ」

「お前最近太っただろ」

ぴたりとお菓子を取る手を止め、その手を拳にかえる彼女。

「ぐっ。あんたってやつは本当にデリカシーないわね……！」

「昨日、体重計にのったら四五キロから四六キロになってたもんな。俺は非常に残念そうな顔で言ってるよ。」

「なんであんたが私の体重知ってるのよ!?!」

水崎は顔をリンゴのように真っ赤にするとバンッと机を叩いて立ち上がった。

「お前のことなら何でも分かるさ。これも愛の仕業かな」

「黙れストーカー！ アンサラーに暗殺されてしまえ！」

水崎が投げた電子ペンを俺は首を傾げるだけで避ける。

「はっはっは。狙いはいいがそんな大振りでは当たらないぞ四七キ口」

「体重で呼ぶな！ 勝手に増やすな！ あんたは医療ドラマに出てきた某麻酔師か！」

「まあまあ、待ちたまえ。この企画は君にとってもメリットのある企画ではなかるうか」

「はあ？」とダンベル（10キロ）を振り上げたまま訝しげな顔をする水崎。

このダンベル（10キロ）度々登場するが誰が持ち込んだんだ、マジで。

「スキーはああ見えて結構な運動量だ。しかも寒さを防ぐウェアの効果も相まって相当な発汗を引き起こす。これは立派なダイエットになるのだよ！」

名づけて！ スキーダイエット！」

ドババーン！

犯人はお前だ、とばかりに水崎を指差す。

「レコーディングダイエットなんてやめてしまえ！」

俺は机にバンツとピンク色の可愛い手帳（ライオンさんシール付き）を叩きつけた。

瞬間、水崎は『キャー！』と叫んでその手帳を掴み胸元に抱く。

「どうしてアンタがこれを持ってんのよ!?」

「健気に毎食の食べたもの書いてる水崎萌え」

「うっさいわ！」

もう水崎の顔は茹蛸のように火照りまくっていた。今にも白い煙を頭から出しそうだ。

「菊隊員！」

「ハッ、私は朝バナナダイエット派であります！」

「いや、訊いてないから。」

菊も水崎がきたほうが楽しいよな？」

「それはもちろんです！ 水崎さんがいないと樹先輩のターゲットがずっと私に向い あ、いやなんでもありません」

最後の方をにごにごによと濁す菊うち。

よく聞こえなかったがきつと乙女には色々とあるのだろう、と俺は勝手に納得して触れないでおいた。俺は女心の分かるイケメンタル（イケメンなメンタルの略）の持ち主なのである。

「ほおれ見る。こんな可愛い後輩が慕ってくれているんだぞ」

「はあ……分かったわよ」

水崎は大業にため息をついて頭を振る。

「あらまあ、全員参加ですね。」

新谷くん、計画はもう立ってるんですか？」

水崎を含めて全員だということに一応のツッコミを入れたところだが、俺はぐつと自分の気持ちを押しさえ込む。

「もちろんです先輩。テストが終わる明日の夜からロッジを予約してありますよ。雪山のロッジですよ、ロッジ。暖炉ですよ、暖炉」

「明日あ！？」

「おいおい、樹！ 試験終わってすぐかよ！？」

「ああ。善は急げだ。早いほうがいいだろう」

「早すぎるぞ、このバカ！ こうしちゃいられん！ すぐに準備しないと！」

「あわわわ！ 今から間に合うかなあ」

「ばたばたと帰り支度を始めるみなさん。」

「新谷くん。お金の問題は部費でまかなえばいい話ですが。移動手段はどうするんですか？」

「車の出迎えがきます。金髪美人の運転手つきですよ」

「あらまあ、それは楽しみですね。」

「それでは皆さん、今日はこれで解散しましょうか。私も帰って準備しないとじゃありませんし」

「あ、はい、お疲れさまです先輩」

「はい、お疲れさま」

とほんわか笑っていち早く部室を退出するみちる先輩。今にスキップでも始めそうな浮かれようだ。

みちる先輩……。あれ相当楽しみにしてるよな……。

続いて廉人と菊がバタバタと慌てながら帰っていく。

「それじゃ、お疲れ！」

「お疲れさまです、また明日！」

そんな二人を見送って水崎はため息を吐いた。

「はあ……なんでこの部活の人間はこんなに能天気な奴ばかりなのよ……」。

それじゃあ、私も行くわ。あんたと勉強しても意味ないし」

さり気無くひどい事を言い残して水崎もまた部室から出て行った。部室に一人残った俺はフンと鼻を鳴らすと、どこかのノートを使つて新世界を創ろうとしたイケメンみたくニヤリと悪どい笑みを浮かべる。

「計画通り！」

「どこが計画通りかあああ！？」

いきなり上から跳び蹴りが降ってきて俺は派手に床に吹き飛ばされる。

その跳び蹴りを繰り返したのは誰であろうかなエリ・F・橘さんだった。

橘さんは天井の通気口に潜んで今の会話を全部お聞きになっていたのだ。

それにしても流石ガーディアンのおツッコミだ。毎度毎度のことだが支点をズラしていなければ危うく死んでいるところだった。

「金髪美人の運転手って私！？ 私なの！？」

床で伸びている俺の胸倉を掴むとガクガクと上下に振る橘さん。

「おおおおちちちつつつつけけけ」

「こおんれが落ちていていられるか！」

パンパンパンパンッ！

今度は往復ビンタをされて俺の首はグキゴキボキツと異様な音を鳴らしまくる。

「たすけてガンジー！ この人に非暴力の教えを説いてあげてえええ！」

俺は偉大なハゲジーちゃんに救いを求めて叫んだ。

「私はどっちかというと仏教よりキリスト教なのよ！」

「うるさい！ 貴様の宗派など知るか！ 俺は右頬をぶたれて左頬を差し出すようなドMじゃない！ 俺の信仰の自由を侵害」

「ドMであるのが無かるうが私の知ったこつちやないわよ！ アンタ分かってんの！？ 私たちはどの企業が犯人か突き止めないといけないのよ！？ 遊んでる暇なんかないのよ！？」

ガクガクガク……！

再び胸倉を掴んで頭を揺らされる。

「ま、任せとけて！ 約束通り一週間後には企業を炙り出すからああ！」

ぴたりと手を止めると恐ろしい顔を近づけるエリさん。

「本・当・な・ん・で・しょ・う・ね？」

「うんマジマジ」

すると納得したのか何の前触れも無くエリはすつと手を離れた。

「ごちん！」

急に離されて俺は後ろの壁に後頭部をぶつける。

「~~~~~っ！」

ばたつばたつ！

俺はその痛みに床を転がりまわった。

「一週間経って分からなかったら

殺すわよ」

ギンと鋭い眼で俺を見降ろす橘さん。

「は、はい」

俺の返事を聞くとフンと鼻を鳴らして窓から飛び降り、姿を消す。ここ四階なのになあ……。ガーディアンって凄いなあ。

俺は他人事みたく考えながら帰路につくのだった。

「はいはい！ 経研部のみなさんはこちらですよー！」

試験終わりで開放感バリバリの学生たちが下校していく最中、俺はパタパタと旗を振りながら校門に立っていた。

中にはちらりと奇異の眼で俺を見る学生たちもいたが、経研部の名を耳にすると『なんだ経研部か……』と言わんばかりに、っついうかあからさまに視線を反らす。

どうやらこの高校で経研部は触れてはいけない禁忌の世界らしい。知ってたけど。

たぶん俺のせいだけだ。

「経研部がそんなに変な存在か、アアン？」

俺は下校しようとしていた見たこともない男子生徒の胸倉を横からいきなり掴んだ。

「は？ え？ な、なんですか、急に！？」

「今、経研部だって、きもーいとか思ったろ、コラ」

「えええええええええ！？ 思ってたませんよ！ 冤罪ですって！」

俺が暇つぶしに男子生徒に絡み始めたのを気づいているのか、気づいていないのか。俺の後ろにある赤いスポーツカーには気ダルそうにエリが運転席についている。

「なんでガーディアンの私がこんなことを……」とかさつきからずうーつとぶつぶつ言っているがそれはそれ。気にしないでおこー。

下校中の男子たちがエリに気付くといちいち呆けたように立ち止まっている。まるでボーリングのピンみたいに集まって突っ立っているがそれも気にしないでおこー。

そりゃまあこんな金髪美人が真っ赤なスポーツカーで校門前にいりゃーなあ。しかもオープン車。あ、オープン車っていうのは屋根のないやつのことね。

「えい」

俺はエリに見とれているピンたちに向かって胸倉を掴んだ男子生徒をそのままぶん投げた。

「わっ、わわわ！」

「がすっ！ どたどた！」

『ギャー！』

男子生徒が当たってバタバタと将棋倒しになるピンたち。

「おー、ストライク」

俺が見事に倒れた男たちを見ていると声がかかった。

「……………もつと人目につかないようにできなかったの、アンタ」

最初に来たのは水崎だった。

「お、一番のりだぞ、水崎。よほどの企画が気に入ったと見える」

「ま、悪くは思っていないわよ。試験勉強で鬱屈した気持ちを晴らせるし」

「ダイエットもできるしな」

「……………っ！ こおの……………！」

と拳を振り上げたところで、彼女はエリに気付いた。さすがに見知らぬ人の前ではツンデレの拳も鈍るようだ。

「あ、どーも。今日はお世話になります」

ゴス！

「こはっ」

エリに笑顔を送りながら拳を俺の頬に打ちつける水崎。

初対面にも関わらず凶暴な性格を隠さないあたりがとても彼女らしい。俺はまだ水崎という人間を侮っていたようだ。

「いいわよ。これもシ！ ゴ！ ト！ だから」

仕事の部分をえらく強調して俺をギンと睨みつけてくるエリ。

「お待たせしました」

「うわ！ 凄い！ 本当に旅行みたい！ さすがですね、樹隊長！」

みちる先輩と菊がやってきた。

「ふふふ、そうだろうそうだろう。ロッジからの雪景色も見ものだぞ。今日はロマンチックにいこうか、菊」

俺は菊の顎を掴んでくいと上にあげた。

「やゝだ、先輩ったら！」

どごむむ！

菊の結構本気な膝蹴りが俺の鳩尾に入って俺は無言で校門に手を
つく。

Answer - 2 "反国家政府" 其の2 - 2

「あら荷物入るかしら」と頬に手をあて小首を傾げるみちる先輩。
なにせ車体の低いスポーツカーのトランクだ。五人分の荷物を詰め込むのはちよいとキツイ。

「大丈夫ですよ、先輩。この車こう見えてこうやって押し込めばほら、ぎゅーっ」と

「あ、ちよつと！ 私の車に傷つけたりしないでよ!？」
エリが慌てて車から出てくる。

「んあ？ ああ、大丈夫、大丈夫。ちよつとトランクの下地凹んだくらいだ」

「ギャー！ー！ー！」

詰め込まれた荷物を見て何やら叫んでいる金髪。

まったく、校門前で騒がしい奴だ。みんなが注目しているじゃないか。

「それじゃあ、そろそろ出発しましょーか！」

「殺す……企業を割り出せなかつたら絶対に殺すわ……コイツ……」
何か恐ろしいことを呟きながら、運転席へ向かうエリ。

彼女はドアに腰をつくくと、くるつと体を回転させ足を中にいれ運転席へと乗り込む。

おおー、さすが持ち主。様になるなあ。俺も真似してみよーつと。
俺も助手席のドアに腰をかけ、くるつと体を回転させようとしたところでフロントガラスにがつんと足が当たる。

「ありゃ？」

橘さんは無言で俺の胸倉を掴んだ。

「次やつたら殺す」

「……………すみませんでした」

俺はガクガクと震えながら助手席に着席する。先輩、水崎、菊は後ろの座席に座る。

「おー、革シートが気持ちいいな。いくらしたんだ？」

「千四百万よ」とミラーの角度を直しながら言うエリ。

「ブツ！ 高ッ!?!」

「せ、千四百万!?!」

「あらあら」

その値段をきくと後ろの三人もいきなり居心地悪そうに身をそわそわとさせる。

「アンティークだもの。もうパーツが生産されていないから壊さないでよね」

「壊してもお前の給料ならすぐにもう一台買えるだろ」

「そういう問題じゃないでしょ!」

エリがキーをまわすと重低音エンジン音が鳴る。

「おっしゃー! 何か忘れてるような気がするけどしゅっぱーつ!

本当は気づいてるけどお約束という名の魔物には勝てないんだ!

「ごめんね廉人!」

「気づいてるなら乗せるよ、樹いいいい!」

なんだか真横から叫び声が聞こえるが無視しておこう。

瞬間、エリがエンジンの回転をMAXまで持って行く。そしてゴツゴツとトツプギアに入れるとそのままクラッチを繋ぎやがるではないか。

ギヤギヤギヤギヤ!

タイヤの跡を残していきなり走りだす真っ赤なスポーツカー(千四百万円)。

「ぎゃあああ! ふざけんな! 壊すなとか言いながらクラッチがイカれそうな発進しやがって!」

「黙ってないと舌噛むわよ……!」

前に見えてくる丁字路。

そしてバックミラーから見えなくなる廉人。

超速度で壁に迫る真っ赤なスポーツカー(千四百万)。

「ぶつかる! ぶつかるうう! こんな速度じゃ木端微塵になっち

「やっつっっ！」

するとエリはニヤリと不気味な笑みを浮かべハンドルを曲げる。瞬間、ぐぐつと横にGがかかる。

「出る出る！ 落ちるうう！」

エリはクラッチを切るとサイドブレーキを思いっきり引いた。ギヤギヤギヤギヤギヤ！

自然の掟に従ってお尻を振る真っ赤なスポーツカー（千四百万）。

「きゃあああああ！」

「降ろしてえええええ！」

「あらまあ」

後ろの席でも悲鳴が巻き起こっている。若干一名動じてない声も聞こえてきたが……。

ちようど九十度に曲がったところでエリはサイドブレーキを戻し再びクラッチをトップギアで繋げ直し発進する。

「こんな住宅街で無駄なテク見せるな、バカやるおお！」

俺の叫びが街中を木霊するのであった。

Answer - 2 "反国家政府" 其の3

ちーん。

ロッジについても俺は口から半分魂が抜けかけた状態ですらりと座席に座っていた。

「だ、大丈夫か、みんな……」

後ろを見てみると水崎と菊はごちゃごちゃと入り乱れた状態で眼を回していた。

「ら、らいりよーふれふ〜」

頭と足が逆さまになっている菊らしき人物の声が聞こえてくる。

「い、いきへる？ いきへるのわらひ？」

水崎はくるくると頭を回転させながら何かうわ言のように呟いている。

「まあ、いい景色ですね」

みちる先輩はといえばすくりと立ち上がると何事もなかったかのようにすたすたと新雪を踏みしめて、うーんと気持ちよさそうに伸びをした。

あ、あの人……エリのあの運転で何ともないのかよ……。相変わらず凄い人だな……。

俺はくらくらとふらつきながら、扉を開けて雪を踏む。

ジャッジャと小気味良く雪が鳴く。

このロッジは小高い丘に建っているらしい。長い雪の坂を下ったところにスキー場が見えている。

どうやらスキー坂と真逆の位置にこのロッジはあるらしい。

その景色のよさに俺も思わず言葉をなくしてしまう。

夕方の赤い光を浴びて、白の坂がきらきらと赤く輝いているではないか。

スキー場では米粒みたいな点がすいと動いている。

うーむ、ツバキたんめ。よくこんなところ見つけたなあ。感謝の

気持ちを込めて俺のヌード写真を送っておこう。

ばおーん！

樹からのメールを開いた私はソレを見て固まってしまっていた。

何かの見間違いかと思い一旦、PCを閉じ、深呼吸をし、もう一度確認してみる。

ばおーん！

私の頭がソレを認識すると同時にびきりと額に青筋が立った。

ばきん！

手に力が入りすぎたせいか、PCのモニターにヒビが入っていた。

あつれー？ ツバキたんから何の返事もないなあ。忙しいのかな？

「ちよつとー！ 寒いんだから早く開けてよー！」

遠くからエリの声が聞こえてくる。

まったく……。感動のない奴だ。

俺はロッジの鍵を開けて、荷物運びを開始した。

荷物を運び終わった頃には水崎と菊も歩けるようになってロッジの中に戻ってくる。

「うつわ、ひろーい」

菊は玄関で口をばかーんと開けて突っ立っていた。

このロッジは玄関から入ってすぐリビングになっている。壁で隔てられることなくキッチンも見えていて開放感重視になっているようだ。二階は個室になっているようだ。

「へえー、内装もいい感じじゃない」

水崎はとこと中を見て回り始める。

パチツ……。パチパチツ……。

大声を張り上げ荷物を玄関に投げ捨てる廉人。

「だって最近は空気だったし」

「今言つてはいけないこと言ったな、てめえ！」

血の涙を流しそうな勢いでつかつかと歩いてくる。だが不意にくらりと体が傾いでそのまま床にダウンする。

どうやら彼の限界が訪れたらしい。

「あらあら。秋原くん、大丈夫ですか？」

「し、すっかりしろ！ 春はすぐそこだぞ！」

俺は廉人の体を抱きかかえた。

「俺は……もうダメだ……。せめて俺の分まで……楽しんで……」

「死なないでー、秋原先輩！」

菊が髪の毛を振り乱して叫ぶ。

「フ……。お前らのこと、結構好きだったぜ……」

意識が落ちたように力が抜ける廉人の体。

「廉人オーツ！」

畜生！ お約束という名の魔物が彼を……！ 彼をこんな目に……

……！

おいおいと廉人の死を悲しむ俺たち。

「……………。何やってんのアンタたち」

たっぷり滑ってきたらしいエリは冷ややかな眼で俺たちを見ていた。

こうしてなんとか全員が揃ったのだった。

ザザー！

みちる先輩が綺麗にシユプールを描きながら斜面を降ってきた。そして、俺のところまできてブレーキをかける。

「さすがみちる先輩、スキーもうまいですね」

「はい。小さい頃からよく連れていってもらいましたので」

先輩はゴーグルを上にあげ、にこりと笑顔で応えた。

続いて廉人も俺たちの所へ戻ってくる。

「廉人も意外に滑れたんだな」

「みちる先輩ほどじゃないけどな」と廉人は肩をすくめてみせた。

「それに比べてあの二人は……」

俺は問題の二人の方に視線をやった。

「きゃーきゃー！ 水崎先輩、手を離さないでくださいよ！？ 絶対ですよ！？ 絶対ですよ！？」

「ちよつと暴れないでつてば！ きゃっ！」

すてーん！

二人して仲良くすつころげていなさる。

うーむ。菊はともかくツンデレは運動神経良かったはずなんだが…

…。

「新谷！ 見てないで助けなさいよ！」

水崎は上半身を起こすと俺に向かって雪を投げてきた。

「おつとすまん。ほら」

そうだった。俺はこの二人にスキーのなんたるかを教えるべく、コーチをしている途中だったのだ。

俺は尻餅をついている水崎に手を差しのべる。

「まったく」

水崎が俺の手を掴んだ瞬間、俺はぱつと手を離してみた。

どしゃ！

腰を浮かしかけてた水崎が再び雪に、といつかちよつど菊の背中に尻餅をつく。

「ぎゃひん！」

菊は背中を弓なりに反らして、ガクリと力尽きる。あ、菊りんから魂が抜けかけているのが見える。

「し・ん・た・にい〜！ あんたね……！」

一方、ツンデレは顔を真っ赤にして右拳をふるふると震わせている。

「あ、すまん。お前って怒った顔も可愛いから、つい」

ジタバタッ！

「ついじゃないわよ！ ふざけてんの！？」

「そんなことより、さっさとどいてやらないと菊が死ぬぞ」

「へ？」

「うわーん！ スキーダイエツトなんて全然水崎先輩に効果が表れてないじゃないですか、樹先輩のバカー！」

菊が水崎の下でジタバタと暴れている。

「ご、ごめん菊！ しっかりして！ っていうか、今かなり失礼なこと言わなかった？」

慌てて横にどいたツンデレだったが、菊の発言にぴくりと眉を跳ね上げる。

「は、はあ……。死ぬかと思いました。さすがは四六キギゃひん！」

菊が何かを言いかけようとすると、水崎が菊の髪を引っ張った。

その反動で菊の首がゴキリと生々しい音をたてる。

「菊ちやくん？ よんじゆうなんだって〜？」

にこにことした笑顔でくいくいと髪の毛を引っ張るドSな水崎。

対して菊は目の幅の涙を流しながら許しを請う。

「きゃー！ すいませんでしたー！ 髪を引っ張らないでくださー

い！ ちよつとした冗談なんですうー！」

なんだか女の子二人できゃっきゃと楽しそうだ。仲が良いのは嬉しいことだけど、こういう時はちよつとした疎外感を受けるよね！

Answer - 2 "反国家政府" 其の4 - 2

と、俺はそこでふと疑問に思ったことを口にした。

「ツンデレよ。お前もしかしてスキー経験ないのか？」

運動神経の良いコヤツがこれ程までに滑れない理由となれば、最初に思いつくのが未経験という理由だが。

「ぐっ。悪い！？ このクソ寒い中わざわざ冷たい雪を滑らなくてもいいじゃない！」

明らかに悔し紛れの言葉を吐くツンデレ。

「ははあん、分かったぞ。最初、合宿に行くのを渋ったのも格好悪いところを見られたくなかったからか。可愛いよなあ」

俺は腕を組むとしみじみと頷いた。

水崎は顔を紅潮させて

「くう〜」と唸っている。

「やーい！ ねえ、今どんな気分？ 立ち上がることもできないってどんな気分？ くやしいのう、くやしいのう！」

とはやしたてる俺。とその時だった。

いつの間にか足下へ匍匐前進していたらしい菊が俺の足をスキー板でひっかける。

「自力で立ってみ　ぬおるんがっ！」

俺は顔から雪の中に倒れる。

「あははは！ よくやった、菊！」

ばたばたと腹を抱えて笑う水崎（スキー経験無し）。

「はい！ やりました、先輩！」

菊は菊でビツと親指を立てた。雪の上に倒れたまま。

俺は無言で雪から顔を離してパンパンと体についた雪を払う。

「樹……先輩……？」

「新谷……？」

俺が無言であることを訝しがる二人。

「カチャン。」

俺は金属のチェーンを廉人の腰ベルトに繋げる。

「いってらっしゃい」

俺は笑顔で彼に別れを告げた。

「は？ いってらっしゃいって何が」

廉人は自分に繋がれたチェーンの先を見る。そして一瞬で顔色が変わった。

そこには誰も乗っていない雪上走行可能なATV（四輪バギー）がエンジンを震わせていた。

「自動前進ON！ レディ、ゴー！」

俺がぼちつとスイッチを押すと、廉人の体を引きずってATVが走り始める。

「いつきいいいい、てめええええええええええ！ おぼえてるよお

おおおお

「山彦のように声を反響させて、すぐに廉人の姿が見えなくなってしまう。」

「ははは、あいつ、変わった楽しみ方するやつだなあ。」

「もうやめて樹先輩！ 私のために争わないで！」

ドラマっぽく俺の腰にすがりついてくる菊。

キュピーン！

俺の眼が光る。

ガード入力発動！

説明しよう！ 新谷樹は攻撃をガードした瞬間にコマンドを入力することで、投げ技へと繋げることができるのである！

「飛天 剣流奥義！」

がしつと菊の腰を掴む。

「はえ？」

「雪積もる獅子の閃き！」

俺はそのまま体を後ろに反らして菊を雪の上に叩きつける。

ゴキッ！

再び菊の首が異様な音を鳴らした。

「じゃ、じゃーまんすーぶれつくす……。せ、先輩……相手が女の子でも容赦ない……です……ね……ガク……」

ちーん。

菊がすつとセピア色になった。

「きゃー！ 菊！ しっかりして！ 死んじゃだめよー！」

水崎が菊の胸倉を掴んでがくがくと揺さぶる。

そして俺は次の獲物を求めて走り出す。

「カップル、コラアアアア！」

「な、なんだあいつ！ こっちに向かってギヤアアアアア！」

「きゃー！ まーくん！？ ちょっと私のまーくんになんてことイ

エアアアア！」

「に、逃げるおおお！ 殺されるぞおお！」

スキー客が叫び声をあげて逃げ始める。

その様は大怪物が街で暴れているような風景だった。すぐさま他の警備員たちがかけつけてくる。

「キミは完全に包囲されている！ 無駄な抵抗はやめて、大人しく投降しなさい！」

警備員たちが麻醉銃を持ち出してきた。だがしかし！

「おしとおおーおおる！」

俺はどこかのアシタカさんのように勇ましく警備員の群れに向かって走って行く。

「ちっ。仕方ない。撃て！」

ダンッ！

麻醉銃が発射された。

しかし、俺はダーツのようなその麻醉銃の弾を素手で掴みとる。

「馬鹿な！？ 矢をキャッチしただとおおお！？」

そして俺はダーツさながらに麻醉銃の弾を近場の警備員に投げた。とす、と額に矢が刺さつてすとんとその場に膝を落とす警備員。

どこかの小五郎さん並に麻醉が効く体質であった。

「こんなもんで今の俺を止められると思うなああ！」

俺は警備員のリーダー格っぽい奴に掴みかかった。

「ぎゃあああああああああああああ！」

掴まれた警備員は目を見開いて叫び声をあげる。

『ぎゃーぎゃー！』

「あらあら。みなさん元気ですねえ」

阿鼻叫喚となりつつある俺たちを眺めながら朗らかに笑っているみちる先輩。

流れ弾の雪の玉や麻醉弾を微笑みながら難なくひよひよい避けているあたり彼女だ。

「アンタら……本当に何しにきたのよ」

エリは呆れたように俺たちを見ていた。

その場にいた警備員の男の一人は後に語る。

『あ、ありのままに起こったことを話すぜ……！ 俺は奴に麻醉銃

を撃つたと思つたらいつの間にか俺が撃たれていた……！ な、何を言っているかわからぬーと思うが俺も何をされたか分からなかった……！ 催眠術とか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃ断じてねえ……！ もっと恐ろしいものの片鱗を味わつたぜ……！』

“ 経済研究部合宿事件 ” と呼ばれるようになったこの出来事はこのスキー場で未永く語り継がれたという。

「あーもう。あんたのせいで中までびしょびしょに濡れちゃったじゃない」

水崎はすぐすぐに濡れたウェアにうんざりして呟いた。

俺たちはロッジに戻ってきていた。

「悪かったな、水崎。ほら、頭こっち向ける」

俺はバスタオルで彼女の髪の毛をわしゃわしゃとふいていく。

ちなみに菊りんは暖炉の前で小刻みに震えながら暖をとっている。

よく見るまでもなく唇が紫色になっていた。

その姿を見ると流石に可哀相なことをしたなーと思うが……。

ま、いつか！ 菊だし！

と心の中で勝手に踏ん切りをつけた瞬間。

まるで俺の心の声を聞いたかのように菊が俺に憎悪を込めて睨みつけてきた。負のオーラで髪がゆらゆらと揺れ、両の瞳が赤く輝いている。いかにも『視線で人が殺せたら』という感じだが……。

はっはっは、女の子がそんな顔しちゃダメだぞ、菊っち……お兄さん、さすがに怖いなー。

「ちよつと！？ もつと優しくしてよ！」

「ああ、すまんすまん」

よそ見しながら拭いてたせいで水崎の髪の毛が暴風に吹かれたように無茶苦茶になってしまっていた。ナチュラルヘアを通り越して先鋭的としか言いようが無い髪型だな。

俺は彼女の髪を拭うのを止め、彼女のウェアのジッパーを降ろして彼女の濡れたウェアを勝手に剥ぎ取った。

「ほら、セーターも脱がすぞ。濡れた服を着てたら風邪をひいちまうからな」

「服はいいわよ！ 自分でやるから！」

「ああ、すまんすまん」と言いつつ俺は水崎のセーターをがっ掴

んで脱がそうとする。

「キヤーキヤー！ 変態！ セクハラ！」

必死にセーターを下に伸ばして俺に脱がせられないように押さえる。

「ああ、すまんすまん」

仕方ないので俺は水崎のズボンに手をかけた。

「いい加減にしろ、このどすけべええ！」

「ごぶ！」

水崎の膝蹴りが鼻柱に突き刺さってゴロゴロと床を転がる俺。

「い、いつてえ！ 強くツツコミすぎだぞ、水崎！ 俺の高い鼻が

凹んだらどうしてくれるんだ！ 美少年は国家の宝なのに！」

俺は蹴られた鼻をさすりながら涙眼で文句をぶつけた。

「あ、ご、ごめん……！ つい力が……」

「あー、こりやダメだ。起き上がれそうにない。体の節々が痛え。

意識が朦朧としてきた……」

さすがに悪いと思ったのか水崎が俺のところまできて心配そうに顔を覗き込んできた。

「だ、大丈夫？ ごめんね。ちょっとやり過ぎたわ……。ほら、手を貸すから」

となんだかんだ言って優しいツンデレが俺に手を伸ばしたその時

「うふふ。昼食ができましたよ。手を洗って食卓にきてください
ね」

すくつ。

「はいい！」

俺はみちる先輩の声を聞いて子供のように大きく返事をする、何事もなかったかのようにスキップをしながら洗面所へと向かった。

「あらら。水崎さんどうかしたんですか？ ぶるぶる震えてしまつて……」

みちる先輩が俯いている水崎を見て小首を傾げる。すると『くわっ！』と顔をあげ、水崎は目を三角にして叫んだ。

「しんたにいいいい！ 騙したわねええ！」

「はっはっは！ 俺は貴様が悪い男に騙されないように身を持って体験させてあげただけさ！ 感謝されこそすれ、文句を言われる筋合いはないよ、チミイ！」

テーブルの上に立ってビシリとツンデレラを指差す俺。

「あらあら。新谷くん、テーブルから降りてください。危ないですよ」

やはりにこやかな笑顔で注意するみちる先輩。

「あ、はい。すいません先輩。すぐ降ります。」

はっはっは！ 捕まえてみたまへ、明智くん！」

俺は先輩に謝ってから、かの怪盗のようにテーブルから颯爽と飛び降りて走り出した。

「誰が明智よ！ アンサラーに暗殺されてしまえ！」

ばたばたっ！

俺と水崎が菊が座るソファの周りを駆け回り始める。

アンサラーという言葉に俺はふと足を止めた。そして真剣な顔で水崎に向き直った。

もし俺がアンサラーだと知ったら、こいつはどんな反応をするのだろうか。

いきなり俺が立ち止まったことに訝しがるツンデレ。

俺はがしりと水崎の肩を掴んで言葉を紡いだ。

「実はな、水崎……。俺は……」

そこで少し迷うように顔を反らし、

「なによ」とジト眼な水崎。

意を決めて彼女の眼を見る。

「俺はアンサラーなんだ」

「あっそ」

「いや、マジで」

「へー。凄いじゃない」

「本当なんだって！ これは真剣に！」

「だから認めてるじゃない」

その言葉と裏腹に水崎は『あー、はいはい』と受け流すような表情だった。

ああん！ 本当なのに！

仕方ないので俺は諦めて、とぼとぼと洗面所に向かうのだった。

「ひゃっほー！」

俺はジャンプ台から一気に飛び立つ。

昼食を摂った後、俺は再びスキー場へ来ていた。

そして、うまく着地すると両のエッジを効かせてブレーキをかける。

散った雪がきらきらと太陽の光を浴びて輝く。

すちゃりとゴーグルをあげ、俺は空を見上げた。

「チヨー気持ちいい！」

どこかの金メダル獲得者のように叫んでみる。

この爽快感がスキーの醍醐味なんだよなー。

午前中は菊と水崎のせいで俺自身はまったく滑ることができなかったが、今は存分にスキーを満喫している。

ちなみに、あの二人はみちる先輩に預けてきた。今頃はまだふもとの方ですっ転がっていらっしやることだろう。

周りを見回すと周囲ではきゃっきゃと家族連れやカップルなどがスキーを楽しんでいた。

レジャー施設というものは、その周りの楽しそうな雰囲気にも当てられて、テンションが上がったりするものなのだろう。

ああ、微笑ましいな。本当に来て良かった。ほら、あそこにいる金髪ツインテールの小さい女の子なんてソリでジャンプ台を超えて

「あやややや！ これ面白いや〜！」
びぎっ！

俺の笑顔にヒビが入る。

おかしいな。ジャンプした女の子が一番日本で会いたくない奴に見えてしまった。

そのツインテールの女の子は器用に体をひねってブレーキをかけ

ると、またジャンプ台のところまでぱたと雪坂を昇る。

疲れているんだな、と俺は指で眼の間を摘んで揉んでみる。そして再度、恐る恐るそちらの方に視線をやってみる。

ズゴオオオオオオオオツッ！

やっぱりゴシツクアンドロリータ調の服を着た金髪ツインテールが赤いソリでジャンプから飛び立っていた。しかも、『テポドンか！』ってな速度でだ。

周りにいたスキーヤーやスノーボーダーたちがソリで上空を飛んでいく彼女を見て啞然としている。

そりゃそうだろう。

ウェアも着ず、スキー坂をソリで下っていりゃ注目されない方がおかしい。

そもそもスキーヤーやスノーボーダーに混ざってこのジャンプ台にくるか、普通！？ 小さいとはいえジャンプ台だぞ！？

「……………」

俺は何も言わずあからさまに体勢を変えた。

と振り返った先で、

「ほらほら、邪魔よ！ どかないと刺さるわよ！」

ズシャアアアアッ！

愛用の洋剣をスノボのボード代わりにしてジャンプ台から飛び立つ赤髪が通り抜けた。

スキー客が驚きのあまり固まっている。

そりゃそうだろう。

洋剣をスノボ代わりにして滑る人間がどこの世界にいるというのか。

そして赤髪が着地しようとするが、

ぐさっ！

雪坂に洋剣の先が刺さってしまう。

「しまったわね。なかなか難しいわ」

赤髪は洋剣を引き抜くと再びジャンプ台へと昇り始めた。

「……………」

見なかったことにしよう。

再び、無言で振り返ると、

「じー」

いつの間はこちらに来ていたのか先ほどの赤ソリで坂を滑っていた金髪ツインテールがこちらを見ていた。

そして俺だと判るとぱっと明るい笑顔になる。

「あやー！ やっぱり樹だー！ わーい、樹ー！」

こちらに走ってきて胸に飛び込もうと雪を蹴ってジャンプする金髪ツインテール。

そんな笑顔の葉月を俺は横に避け、奴の後頭部に手を添えて、勢いを殺さずそのまま地面に彼女の顔を叩きつける。

ズボオ！

彼女の顔が雪の中に半分埋まる。

じたつばたっ！

息ができないのだろう。葉月はどうにか顔を上げようとバタバタと暴れ始める。

だが俺は鬼の心で後頭部を押さえつける手を緩めなかった。

しばらくして力尽きたのか葉月はびくりともしなくなる。

「南無大師遍照金剛」

俺は片手で印を切ると、彼女の後頭部から手を離して額の脂汗をぬぐう。

だが

「あやー」と葉月は何でもなかったかのように顔を上げた。しかも風呂上りのようなほんわかした笑顔でだ。

「ぎゃあああああああ！ 死ぬ！ はやく死ぬ！ 助けて、陰

陽師！」

「やあん。もう樹ったら照・れ・屋・さ・ん」

つんつんと俺の頬をつついてくる葉月。

「お前、何でこんな所にいるんだよ!？」

俺がそう問うと、葉月は目線を上にし、少し考える素振りを見せてから笑顔で答えた。

「樹がいる所に行くのが私の趣味だからー」

「ぎゃああ! ストーカー! ストーカー!」

俺は雪を掴んで葉月に投げつけまくった。

「あやー。分かった! 私と雪遊びがしたいんだね!」

そう言つと葉月は後ろに振り返って何かを掴む素振りを見せる。

「よっこいしょー」

そしてどこから取り出しのか葉月は雪だるまの下の段みたくでかい雪玉を頭の上に持ち上げた。

「どうええええええええええええ!?! ちょ、ちょっと待って下さいよ! どう考えても今までそんなものなか」

「えいやー」

ずぼっ!

俺の頭に雪玉が刺さる。

「きゃー、樹可愛いやー! 雪だるまみたい!」

ぱちんと両手を合わせて眼をきらきらさせる葉月。

「ぶごぶごぶごっ!」

俺は足をふらつかせながら頭に刺さった雪玉をなんとか持ち上げようとする。だが思った以上に重量があり、なかなか持ち上がる気配はなかった。

「ぶごへ! はふひ!(外せ! 葉月!)」

「あやー。可愛いのにー。仕方ないやー」

葉月は持っていた赤ソリをぎゅるんつと振りかぶる。

豪ッ!

そして葉月は思いつきり俺の頭(雪玉)目掛けて赤ソリをスウイ

ングした。

どぎゃーん！

俺はぐるぐると回転しながら吹っ飛んで雪の上に四肢を投げだす。
びくっびく。

嗚呼、体が痙攣しているのが自分でも分かつちゃうよ、葉月さん

……。

「あやー、樹ー。無事かやー？」

「無事なわけねえだろ、うらあ！ 耳がキーンってなってんぞ、ミ
ミガー！」

俺は片手で葉月の胸倉を掴んで足を払い雪の上に引き倒す。

「あやー！」

しかし、何が楽しいのか倒されてきゃっきやと笑う葉月。どうやら彼女は俺とじゃれているものだと思われているようだ。

こいつ……全然懲りてねえ……！ どうしてくれようか……！
と俺が処罰を考えようとすると、葉月の手から俺の体の節々にしゅるつと銀糸が飛び出してきて巻きついた。そして体がぐいつと引き倒された。

「ぬおっ！？」

慌てて手をついたが、なんというか葉月の上に覆いかぶさる形になつてしまった。

「あやー！ 樹、やめて〜！ 押し倒して何するつもりかやー！」
大声で騒ぎ始めるストーカー。

「何もしねえよ！ つか勝手に俺の体を操るな！」

操り人形よろしく葉月はくいくいと指で俺の体に巻きついた糸を操る。

すると俺の手が勝手に動いてっておいおいおいっ！

「あやややや！ 樹っ、だめっ！ こんなところでそんなところっ
……ふわっ……んっ……！」

「ぎゃああああ！ 悶えるなあああああ！ 変な声をあげるなああ
ああ！ R規制されるっつうっ！」

なぜか葉月がいるし、橘さんには勘違いされるし。

なんだか絶望的な状況に泣きそうになってきた。

「あら嫌だわ。ゲレンデが溶けちゃいそうなほどお熱いじゃない。

お邪魔かしら」

俺が顔を上げるとそこには紗枝が洋剣をゲレンデに突き刺して立っていた。

「あ、てめ！ 見てないで助ける！」

「あら……私も混ぜてくれないの？ 楽しそうなことしてるじゃない」

俺と葉月を見下ろしてクスリと笑う赤髪。

「なっ……！」

俺の顔がカーツと熱くなる。

「やってられるかあああ！」

「あやや！？ あややややや！」

俺は銀糸がついたまま立ち上がった。それにぶら下がるように葉月の体も浮き上がる。

「あやー、樹ったら力持ちー」

ハートマークを漂わせながら腰に抱きついていいるゴスロリ娘を放つておいて俺はビシツと赤髪を指差した。

「なんで貴様までここにいる！？」

「葉月のお守りよ。ゲレンデで何しでかすか分からないじゃない。周りの人に迷惑をかけるわけにもいかないし」

何言ってるのよ、とばかりに答える赤髪。そして何言ってるんだと言いたいのはこちらだ。

「お守りできてねーから！ つか、そもそもお前も迷惑かけまくりだったから！」

「そんなまさか……。おかしいわね」

ふうむと何がいけなかったのか悩み始める赤髪。

クレイジーだ。こいつらナチュラルボーンクレイジーだ……！

「ほら。いつまでも抱きついてないで行くわよ。仕事だってあるんだから」

紗枝が葉月の首根っこを掴んで俺から離す。

「あやー」

その姿はなんとというか猫のようだった。同時にしゅるつと俺の体を取り付けていた銀糸が外れて、ひらひらのゴスロリ服で見えない部分にしまわれた。

「シゴトねー。そういえばお前ら、“コード：A計画”に関わってるんだとね」

こいつらが話すとは思えないが、一応情報集めを試みてみよう。

「あらま断定。どこの情報？ 私たちが関わっていると知っているのは内部だけのはずなのに」

「企業秘密だ。んで、どっちについてる？ 国家政府側か？ 反国家企業側か？」

「………………。その質問から考えるに樹はまだ真意には辿りついていないようね」

「ああん？ どういうことだ？」

どうして今の質問でそんなことが判断できるんだ……。

「ちなみに今回の仕事は“ノセ”よ。私たちはもしもの時のための対応策。樹と直接戦うような事にはならないと思うわよ」

“ノセ”というのは俺たちの間で使われていた業界用語だ。要するに『協力』や『援護』という意味を示唆しているのだが……。

「だといいがな」

こいつの言う事をあまり真に受けてはいけない。紗枝は虚偽と真実を巧みに切り替えることができる人間なのだ。

「それじゃあ、そろそろ行くわ」

「ええー。もつと遊ぼうよー」

紗枝の言葉に葉月が眉をしかめて駄々をこね始める。

「何言ってるのよ。抜け出したのバレたら怒られるわよ」

「あー。それは嫌ー。」

樹「、また会いにくるねー」

「ああ、分かった。二度とくるな」

と、そこで俺は兼ねてから問いたかった質問を思い出した。

「あ、待った。一つ訊きたいことがある」

「なに？」

顔だけ振り返る紗枝。

「……“クイーン”は……どうなった？」

その言葉にすつと紗枝の眼が細くなる。

沈黙が訪れ、まるでそう問うた俺の真意を探るかのように見つめてくる。

たっぷり時間を使った後、彼女は答えた。

「あの爆発よ。“エース”、貴方みたいに死んでない方が不思議ね」
わざと昔の呼び名で呼んでくる紗枝。

「……………そうか。やっぱり死んだのか」

いや、問う前から分かっていた。なぜなら俺は彼女の死体を見ているのだから。

だが問わずにはいられなかったのだ。

どこかでまだ信じたくないと思っている自分がいるのかも知れない。

「……………。死体、見つかってるわよ。ひどい姿だったらしいわ。

私たちが弔ってあげたかったけど、政府に回収されたようね」

「……………」

「樹…………。あの任務の時、ママと何があったの？」

葉月が暗い顔で尋ねる。こいつ、こうやってしんみりしていると可愛らしいんだけどな。

「さあな」

俺はそっぽを向いて答えた。

嘘だ。俺はあの時のことを覚えていている。たった三年前のことだ。忘れるというほうが難しい。

彼女の優しい深緑の瞳。

俺たちにとって彼女は母親同然だったのだ。と言っても直接的に優しくされた覚えも、何かを教わった覚えも無い。

そもそも“クイーン”は人付き合いというものが下手だったのだ。口数こそ少ない女性だったが、それでも俺たちを気にしていつも遠

くから見ていてくれるような……そういう人だったのだ。

俺たちが安心して無茶できたのは彼女が周りに気を配っていたからだ。

口には出さないがそれを皆、理解していた。だから、“クイーン”のことを信頼し慕っていた。

俺たちが無茶をする度に彼女は仕方ない子たちだと、ぎこちなく苦笑いするのだ。

母親というには若い年齢だったがそれでも俺たちにとって“クイーン”は母親だったのだ。

その“クイーン”が言葉に詰まりながらも一度だけ俺に真剣な話をしたことがあった。

樹……。人が死ぬっていうのはね。とても哀しいことなの。人を殺すっていうのはね。その人の命を奪うだけじゃないの。その人の後に出でるはずだった子たちの命の系列、何百何千の命をすべて消し去ることなのよ。それだけ一人一人の命は重いものなのよ。

彼女の言葉にあの時の俺は何と返したか。

ただ彼女がとても複雑で哀しそうな顔をしたのは確かだった。

「詳しくは訊かないでおくわ。あの空港爆破の時、“クイーン”と一緒に行動していたのは“エース”貴方だった。そして“クイーン”は死んで、“エース”は生き残った。いえ、私たちは“エース”も死んだものだと思っていたけど……」

そこで切って、紗枝は俺に鋭い視線を送った。

「どうして生きていると連絡をよこさなかったのかしらね」

ぞわぞわと徐々に空気が変質していく。

チリッ！ チリチリッ！

毛先が殺気で焦げるような感覚。

「……………」

俺は黙ったままでいた。

「何かやましいことでもあったのかしら。

そう。例えば……“エース”。貴方が“クイーン”の死に関与し

ている……とか」

疾ッ！

紗枝が俺の首筋に洋剣を突きつける。

遅れて風が豪ッと頬を吹きぬける。

反応する暇はなかった。

そりゃそうだ。こと近接戦闘に関してコイツの上を行く奴など存在しない。ただ一人を除いてだが。

どちらにしてもこの距離、この間合いなら世界最強だろう。俺が銃を抜こうとすれば抜こうと思った瞬間にはもう腕が斬りおとされる。

これは間違いない。

なにせコイツは銃弾を切つて無効化したり、剣先で弾道を反らしてしまふような化け物なのだ。

隙でも作らない限りは不可能。まあ、こいつがそう簡単に隙を作るわきゃーないんだが。

「さ、紗枝姉……！ や、やめなよ……！！」

それを見ておろおろとしたす葉月。

「黙ってなさい、“スパイダー”」

「っ……」

見向きもせずと言われ葉月は唇を噛んだ。

「さっきも言った通り、何があつたかを話せとは言わない。“もしも”のことがあれば私は貴方を殺さなければならぬもの。

“スラスト”として」

ばさばさ！

近くの木で休んでいた鳥たちが何かを感じ取ったのか慌てて逃げ出していく。

背筋がゾクゾクくるような濃密な殺気。

彼女の眼の奥にドス黒い闇が覗いている。無機質で無感情な、幾千人をも殺した暗殺者独特の眼。

一般人なら殺気だけで殺せるだろう視線。

こいつは殺せるのだ。

何の迷いもなく俺を殺せる。

戦友としての友情？ 義弟に対する愛情？

そんな感情はこいつらに無い。

奴らにとって人の区切りは簡単だ。

自分と他人。

ただそれだけ。

見詰め合う俺と“スラスト”をあたふたと交互に見ておろおろしている“スパイダー”。

“スラスト”は暗にこう言っているのだ。

『貴方が“クイーン”を殺したんじゃないの？』と。

「俺の答えはもちろん黙秘。」

なぜかを問うならば答えは簡単。

彼女らの理解できることではないからだ。

何秒いや何分間、そうして“スラスト”の鋭い視線に晒されていただろうか。

不意に俺の知った声がかかった。

「あれ？ 樹先輩、こんな所で何してるんですか？」

菊だ。

“スラスト”はチツと舌打ちをすると、洋剣をくるくるっと回転させて逆手に持ち替えザクリと再びゲレンデに突き刺す。

殺気もそれで消え失せた。

“スパイダー”は『あやー』と心底安心したように深く息を吐いた。どうやら緊張し過ぎて息を止めていたらしい。

菊はおっかなびっくりでこちらまで滑ってきて、やっと彼女ら二人の存在に気づく。

「はーん。まーたナンパですか。お盛んですね」

菊はニヤニヤとしながら肘で俺の脇腹を突いてくる。

今日ほどコイツに救われた日はない。後でたっぷり可愛がってあげよう。

「あら。なに、この子。樹の彼女？」

紗枝の問いに俺と菊は同時に答えた。

「そっだ」「違います」

「ああん！ 菊ったら！ お姉さん（たぶん）の前でくらい格好つけさせてよ！」

「あ、私、桜咲菊といます。樹先輩とは部活が同じなんです」

「へえー、桜咲さん……。珍しい苗字ね」

「あはは。よく言われます」

と、そこで何を思ったのか葉月がずいずいと菊の前に出て睨みつける。

「じとー」

「は、はえ？ な、何ですか？」

下から睨みつけられて半歩引く菊つち。

そして葉月はズビシツと菊を指差した。

「樹は私のものなんだからっ！」

「どうぞ、どうぞ」

菊はどこかの『ヤー』な倶楽部の人たちみたいにすんなりと俺を差し出した。

「えええええ！？ 菊りん、それヒドくないっすか!?!」

こいつに渡したら俺、操り人形のオモチャにされて精魂抜かれると思うんですけど……。

「キイーツ！ どうぞつてなにその上から目線！ やれるもんならやってみなさいよ、この幼女がってことなのね！ 挑戦と受け取ったやー!!」

イノシシのように菊に体当たりをしようとする葉月。

だが紗枝が無言で葉月の襟首を掴んだ。

「ぐえっ」

当然、前に進めずゴスロリ服で首が絞まる葉月。

そして紗枝は葉月をぽいっと後ろに投げる。

「あやー！ー!?!」

放物線を描いて飛んでいった葉月は頭から雪の地面に刺さった。ズボツ。

「……………。樹先輩」

「言つな、菊。頭のネジが緩んでる子なんだ」

俺は涙を流しつつ自分の境遇を哀れんだ。昔の俺はよくあんな奴らと一緒にいて平気だったな。影響されないうちに離れて正解だった。

今でこそ俺は至極真つ当なジェントルメンになったけど、もしかしたら昔は傍から見るとコイツらと同じように変人だったのかも知れないな。

なんていうか、人間の順応性って凄いよね！

「それじゃあ、いい加減私は行くわ」

紗枝は洋剣をゲレンデに倒して片足を乗せる。つか、やっぱりそれで行くのか、コイツ。

「いや、お前あいつちゃんと持って帰れよ」

逆さまになったせいでスカートがめくれ、赤い毛糸パンツが見えまくりのまま、じたばたしている葉月を指差す。

色々と周りの注目を集めていて他人のフリをしたいところだ。

紗枝はじたばたしている葉月をじーっと見ると、とても不満そうな顔で振り向いた。

「なんであの子、赤パンなの？」

「知るか！ 俺に訊くなよ！」

「ゴシッククロリータならモノトーンでまとめればいいのに。いつまで経ってもジュニア用スポーツブラだし。今年でもう（ピー）歳よ、あの子」

「ばっ！ そ、そそ、そういうことを俺に言うなよ！」

なんて破廉恥な！ 大っぴらにそんなことを堂々と言える神経を疑いたい。

「ちなみに私が今つけてる下着は黒のハードガードルだから。見てみる？」

「見ねえよ！ それこそ俺の知ったこつちゃねえよ！ ガールズトークがしたけりゃ他でやれ！」

「ちえー」

紗枝は不満そうに唇を尖らせると、すーっと洋剣に乗ってゲレンデを下り始める。

「って、おいしいい！ あいつ、連れて帰れつてのおお！ なんでこの俺が始終ツッコミに回らなきゃいけないんだ！」

俺の言葉が聞こえているのかいないのか。紗枝は後ろ手に手を振って、そのまま行ってしまう。

しーん。

沈黙を破って菊が呟いた。

「……………先輩……………あの子、どうしますか……………」

「他人のフリだ、菊。いくぞ」

「そうですね。賢明だと思います」

「滑れるようになって良かったね、菊っち」

「はい。誰かさんと違って指導者が良かったですもん」

「はっはっは、こーいつー　コブラツイストしちゃうぞ」

「てへへ」

俺と菊はきゃっきゃと笑いながらゲレンデにシュプールを描くのであった。

ちなみに、廉人はもう日も暮れるという夕方にATVに乗って口ッジへ帰ってきた。

愛着でも湧いてしまったのか、愛おしげにATVを撫でて“スノーフェアリー”と呼んでいたのも、彼らの間に何があったのか俺は尋ねてみた。すると彼は遠い眼で雪山を見てこう答えた。

「雪山には魔物が住んでいる。だけど女神もまた住んでいるのさ」
気持ち悪かったので俺は何も言わずそのまま彼を放っておいた。

夜。俺たちはリビングに集まっていた。

「さあ楽しいレクリエーションの時間だ！ わくわくどきどきスーパー双六タイム！」

俺はばさつと大きな真つ白な紙をテーブルに広げた。そして俺がスイッチを押すとその上にホログラムが浮かび上がる。

「お！ 人生ゲームか。懐かしいものを持ってきたな樹」
隅に設置された1から9の電子ルーレット、そして山あり谷ありなフィールド。これこそ現代の人生ゲームなのだ。

「あらまあ。ボードゲームなんて久しぶりですね」
みちる先輩も興味津々らしく、さつそく設定画面でみんなの名前を入力していく。

「ふふふ、そうでしょう。この女心が分かる新谷樹にぬかりなどありませんよ、先輩」
と、そこで目ざとい水崎が何かに気づいたようだ。

「ちよつと待って。この人生ゲーム何かおかしいわよ。私が小さい頃持ってたのと違うような……」
どきっ！

思わず俺の肩がびくりとなる。

「ほえ？ なにがですか先輩」と菊もボードゲームを眺めようとした。

「はいはい！ それじゃあ席についてくださいねお二人さん！」
俺はすぐさま二人の腕を引っ付かんで席に座らせる。

「へえ面白そうなことやってるじゃない。私も混ぜてよ」
エリがやってきた。

「ほうこの俺に金を巻き上げられにきたか」

「冗談。貢がれにきたの間違いでしょ」
「ばちばち！」

俺とエリの間で視線が交錯し、火花が散る。

「チツ、後悔するなよ」

「そっちこそ」

俺の舌打ちにニヤリと笑うことで返すとエリも席についた。

「それではまず順番を決めましょうか。ぼちつとです」

トウルルル！

みちる先輩がボタンを押すと名前と番号がシャッフルされた。

ババン！

「やりの私がトップバッターね！」

水崎がパチンと指を鳴らす。

順番はこうなっていた。

水崎、廉人、菊、俺、橘、先輩である。

『人生ゲームスタート！』

人生ゲームからほんわかとした音声 flowed。

喋ったのは人生ゲーム公式マススコットのジンくんとセイちゃんだ。デフォルメした可愛いキャラクターで、ボードの上をぐるぐると飛び回っている。

「私の番ね」

水崎がルーレットを回す。

『5！』

「12345と」

水崎が自分のコマを進めた。そしてそこに書かれていることを読む。

「えーつとなになに……『服を一枚……脱……ぐ』？」

しーん。

急に静かになる室内。

ジンくんとセイちゃんが、楽しそうに手を繋いでボードの上をぐるぐると踊っている。

「あれ？　なんでみんな固まってんの？　どうしたの？」

瞬間、弾けたように全員が俺に向けて口を開いた。

「はあ!? ちょ、ちよつと!? なによこれ!?」と文句を言うツンデレ。

「あらまあ。破廉恥なマスですねえ」

やはり朗らかな先輩。

「なにつて……。さつさと脱げよ」
眼をぱちくりさせる俺。

「で、できるわけないでしょ!?!」

「あわわ! せ、先輩、先輩! なんですかこのマスは! 全部書かれてるからおかしいですよ!」

菊がボードゲームを指さす。

そこには「男を見下す感じの挑発的なセクシーポーズ」と書かれてあった。

「あらまあ。確かに過激なマスばかりですね」

あらあらと困った様子先輩。

「ふつうにやるのは面白くないだろうと思ってちよつと変えてみました、てへ」

「てへじゃねえええ!?!」

全員が席から立ち上がりつつツツコミを入れてきた。

「ぬーげ、ぬーげ、ぬーげ!」

そんな最中、ジンくんが一升瓶片手に「脱げ」コールをしている。

「せ、先輩……マスコットキャラクターも凄く親父臭くなってるんですけど……」

菊がぐききと首を曲げて俺を見やった。

「えーつと……。わ、私やっぱりやめておくわ」とエリが席から離れようとする。

「フン。敵前逃亡か」

「なんですって?」

「あーあ。そんな逃げ腰じゃあ国家の力が衰えるのもやむなしだよなあ」

「あんた……! 私のことだけでなく、政府をバカにしたわね……! 上等よ! 泣いて詫びさせてあげるわ!」

きゅぴーん!

かかった……!

俺は思わずニヤリとほくそ笑む。

この人、コツさえ掴めば扱いやすい人だよなあ……。熱くなっちゃって可愛いなあ。

「ちなみにボードに書かれたお金はおまえ等のPCからちゃんと読み込んでるからな」

「はあ!? これ表示されているのは本物の金かよ!」

菊がすぐさまPCを取り出して口座を開く。

「ほ、ほんとです! 一万円引かれてますよ、これ!」

「ふざけないですよ! なんなのよこのゲームは!」

「まあまあ。ほら、よく見る。ちゃんとお金プラスマスもある。そのマスに行けばちゃんと口座に同額の金が振り込まれるぞ」

「どこから振り込まれるのよ。やばい金じゃないでしょうね」

「まさか。振り込まれるのは俺の口座からだ。しかも! 一位でゴールすると賞金が振り込まれる!」

『!?』

みんなの目が\$になる。

なんて分かりやすいやつらだ。

だがそれがいい!

「ただし! マイナスのままゴールすれば、そのマイナス分はお前らの口座から俺の口座に振り込まれるシステムになっている!」

「フン。このボードゲーム。あんたが親元の博打ってわけね」

「そついうことだ」

ごくりとみながつばを飲み込む。部屋を緊張感が包み込んでいた。

さすが経済研究部メンバー+ だ。どうやらみな覚悟を決めたらしいな。
かくして嬉し恥ずかしなマネーゲームは始まったのだった。

「何してるツンデレ。早く脱げよ。それとも1ターン目でリタイアですかあゝ？ 別にいいですよあゝ？ 俺に一万円が振り込まれたままになるだけだしゝゝ」

俺が目一杯憎らしい顔で見てやると、

「この……！」

ぴきつと水崎の額に青筋がたつ。

「分かったわよ……！ 脱げばいいんでしょ……！」

水崎は潔よくセーターを脱いでシャツ姿になる。

『ねーちゃんいろっぺーなー！ ひゅーひゅー！』

ジンくんがやし立てている。どこでこうなったのか宴会気分全開である。

「うう……。ジンくんが全然可愛くない……」

幼い頃の思い出が汚されでもしたのか、菊が眼の幅涙をどばーつと出していた。

「ちつ。まだ下があったか。冬で良かったなツンデレ」

「くつ。あんたつて奴は……！ いいわ、この挑戦受けて立とうじやない……！ 借金地獄に落としてやるわよ……！」

どうやら火がついたらしい。これは面白くなりそうだ。どちらが上かということは今一度見せ付けてくれよう。

「次は廉人の番だな」

「お、おお」

廉人がルーレットを回す。

『4……』

「えーつとゴールまで異性の服装を着る……だと！？」

『ブフウウウ！？』

女性陣がなぜか顔を赤くして吹く。

「おっとなぜか良いところにフリfrisカートのドレスが」

俺が真つ赤なドレスを取り出すと、サアーツと廉人の顔が青くなる。
「くふふ」とにじりよる俺。

「や、やめ……！ ギャアアアア……！」

ちーん。

「覚えてろ……この屈辱……絶対に……ぶつぶつ」

赤いドレス姿で床に倒れている廉人を捨ておいて俺は菊をびしりと指さす。

「次だ、菊！」

「は、はい！ 桜咲菊いきます！」

『8！』

「8マス進んでえーつと……」

菊が止まったそのマスに『亀甲縛りで「もっといじめてください」主人様』と叫ぶ』と書かれてあった。

「な、なんで罰ゲームマスはこんなに変態チックなものばかりなんですか！」

さすがの菊も涙目になって俺に文句を言う。どうやらこれはノリで解決できないらしい。

「うるさい。縛られる」

俺はしなるロープを両手で引っ張ってぴしつと鳴らした。

「きゃー！ こないでください！ 汚されるー！」

「あつはつは！ よいではないかよいではないか！」

「たーすーけーて！」
しばらくして

「うつつ。もうお嫁にいけない」

そこには亀甲縛りで床に転がった菊つちの姿がそこにあった。

「ほら菊っち！ カメラに向かって叫んでみな〜！」

「ってなんでPCで撮ってるんですか！？ やめてくださいよ……！」

「いや、だってせつかくだしもつたいないじゃないか」

「真顔で応えないでください！」

「不遇だわ。なんて哀れなの……」

エリが可哀想にとばかりに縛られている菊から目を反らした。

「さっさと言わないとずっとそのままだぞ」

「うつつ……。もつといじめてくださいご主人様あ……うっ……」
涙を流しながら菊が小さく呟いた。

「もっと大きな声で！」

「もつといじめてくださいご主人様！」

半ばやけくそになった菊は顔を真っ赤にしながらPCに向かって叫んだ。

「はい、いただきましたあ。わーい、家宝が増えた、わーい、わーい！」

子供のように喜ぶ俺。

それを見た菊は俺を恨めしそうに睨みつける。

「うっ……鬼！ 悪魔！ 変態！ 覚えておいてくださいよ！ 必ず仕返ししてやりますから！」

「ほう面白い。謀反か。くっくっく、やれるもんならやってみるんだな」

俺は両腕を組んだまま菊を見下ろす。

どうやらまだ調教されたりないようだ。次期に知るだろう。どう足掻いたところでこの新谷樹には勝てないということが。

「はいはい。次は私の番ね」

大笑いする俺を放つてルーレットを回すエリ。

くう……！ まったくもってマイペースな奴だ……！

『9！』

「ふふん。いい滑り出し……ね！？」

エリは止まったマスに書かれているものを見てカッと目を見開く。

そこに書かれてあったのは

「ゴールするまで猫真似！？ 語尾に『にゃ』をつける！？ なんなのよこれ！？」

「おい。さつさと人間やめろ」

「くっ……！」

俺は人間をやめるぞ、（ピー）！のような状態に苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる彼女。

しかし何か悟つたらしく。彼女はすぐに冷静さを取り戻し、無言ですとんと席に座りなおす。

クソ！ こいつゲーム終わるまで喋らないつもりか……！ それじゃあ意味がない！

「おい、エリたん。なんか喋ってみろよ」

「……………」

目を閉じつーんと無視状態のエリ。

「チ。黙り込むとは……。お前の国家に対する誇りはそんなもんか、橘さん」

びくっ！

彼女の眉が一瞬跳ね上がる。

「橘さん？」と水崎。

「橘さんって？」と菊。

「橘さん……ですか？」と先輩。

「橘……さん？」と廉人。

全員が橘さんの方を見た。

どうやらエリの奴、日本姓までは名乗っていなかったらしい。

「あー、この人ハーフラしくてさ。本名はエリ・F・橘なんだよ。みんなからは橘さんって呼ばれて親しまれているんだ」

『そうだったんですか、橘さん』

全員にそう言われ、エリの顔が紅潮する。

「~~~~~っ！」

腕を組むその手がふるふると震えていた。

「ほう、耐えるか。なかなか頑丈な心だ。口を開けば楽になれるものを」

それが彼女の我慢の限界だったらしい。

「~~~~るさいニヤ！ さっさと進めるニヤ！」

瞬間。

「ギャハハハハ！ ひいーっひっひ！ あのエリが……！ ニヤっつて！ 今ニヤって！ ゲラゲラゲラゲラ！」

ばしばしとテーブルを叩く俺。

「殺すニヤ……！ こいつ絶対に殺すニヤ……！」

エリは憎しみのオーラを漂わせていた。

「それでは私の番ですね」

先輩がルーレットを回した。

『7！』

「あらまあ。4番目の方にひざまくらで耳掻きだそうです」

「やった俺だ！ せんばーい！」

俺はかの大泥棒三世のように先輩の胸に飛び込んでいった。すっ。

どがん！

すると先輩が俺を避け、俺は壁に顔をうちつけてしまう。

「せ、先輩……な、なんで避け……」

「すみません、急にこられたので反射的に」と苦笑いな先輩。うむ困った顔も可愛い。

先輩は絨毯の上にぺたんと女の子座りするとどこからともなく耳掻きを取り出した。

「はい、どうぞ、新谷くん」

「ごろにゃーん」

俺は甘えた声で先輩の白く綺麗なふとももに頬すりした。

「あらまあ。くすぐったいわ、新谷くん」

くすぐすと笑いながら耳かきを始める先輩。

「……なんだかスツゲーむかつくわね」

「何でしょうね、このイライラ」

嫉妬でもしているのだろう。水崎と菊は青筋をたてて俺を見ているのだった。

二時間後。

「H A H A H A ! 誰も俺に追いつけない!」

俺は口座の金額を見て笑いが止まらなかった。

他のメンバーはこの数時間で一気に老けたように見える。

だがみちる先輩だけはいつものようにここにこしているが。

「おかしい……絶対おかしいわ……」

「なんで樹だけ良いマスばかりに止まるんだよ……」

「これは裏がありそうニヤ……」

「ですよね……。そうとしか考えられません……」

なんだかひそひそと話し合ってるツンデレ、空気、ガーディアン、肉奴隷。

ん？ 作戦会議か？ フ……。無駄なことを……。なにせこの俺は……!

ぎゅつと俺はポケットの中の装置を掴んでほくそ笑む。

なにせこの俺はルーレットの出る数字を自在に操ることができるんだからな……!

「新谷くん」

内心で大笑いしていると不意に先輩が呼んだ。

「なんですか、先輩？」

「ラブレター読んで頂きました？」

「ラ、ラブレター!？」

俺はドガツと机に膝を打ち付けるほど勢いよく身を乗り出した。

「あらまあ。まだ読んで下さっていないんですね。新谷くんのポケットに入れたはずなんです……」

なんだとおおお!?

俺はいそいそとポケットの中を探り始めた。あれでもないこれでもないと言い猫型ロボットのようマイアイテムを外へ放り出して

いく。

くっ、どこだ……！ ラブレターどこだ！？

だが不思議なことにすべてのポケットのものを取出してみてもそれらしきものが見つからなかった。

「先輩、いつたいどこに」

顔をあげ、思わず俺は『ゲッ』と言ってしまった。

菊が例の装置を掴んでニヤニヤしているではないか！

「あれれ〜？ なんだろこれ〜？ 1〜9までの数字が書いてあるよ〜？」

くっ！ 菊のやつ！ どこかの体は子供、頭脳は大人な探偵みたいにわざとらしい台詞を！！

そこで俺はハツとなった。

まさか……！ みちる先輩これを狙っていた！？ ラブレターはダウトだったとでもいうのか！？

誰も気づかないほど叡智溢れる巧妙なトリックだ。さすがみちる先輩である。

俺はみちる先輩の顔色を伺った。しかし、彼女はいつものようにここにこしている。

きっと彼女は孔明の生まれ変わりに違いない。

「くっ！ みちる先輩……！ おまえもか……！」

今なら分かる。シーザー（カエサル）とは良い友達になれる！

「どうしたの菊？（ニヤニヤ）」

「なになに？ 何か面白いものでも見つけた？（ニヤニヤ）」

と菊に群がるビッチンデレとビッチ空気。

やばい。俺の直感が……本能が告げている！ 今すぐ逃げると…

…！

動き出そうとしたまさにその刹那。後ろからガツと首に腕を回される。

「樹〜遊んで欲しいニヤ〜。ごろごろ〜（ニヤニヤ）」

エリである。甘えるような猫なで声と打って変わってその腕は万

力のような力が込められていた。

「なーお、なーお（ニヤニヤ）」

俺の頬にすべすべのほっぺをすりつけてくるエリ。

「ええい、離れるろ！ 貴様は発情期のメスネコか！」

俺がそうしている間に菊はその装置を動かしてしまつ。するとルーレットがピピピと動いて止まつた。

「あれれ〜？ 押した数字のボタンと、ルーレットが同じ数字になつたよ〜？」

「フアーック！ コンなんか嫌いだーッ！」

「それじゃあゲームを再開しましょうか」

にこにこことみちる先輩が告げる。

それは俺にとって死の宣告を意味していた。

「ごわすですう」

俺はどこかのボクサーのように真っ白になって頂垂れていた。ちなみにフリフリの赤いドレスに身を包み、顔には超ケバい化粧が塗りたくられている。

「ちよつとやり過ぎましたかね……。樹先輩壊れちゃいましたよ？」

「い、いつの間にか意味不明な語尾になってるわね、コイツ……」

さすがに悪いと思ったのか、みな俺の灰になりかけの姿を見てポリポリと頬を搔いていた。

「アンタ、大丈夫？ 生きてる？」

と水崎が近づいたまさにその瞬間！

俺は水崎の手に持っていた例のイカサマ装置を取り上げた！

「！？」

俺のその行動に全員が目を見開く！

「くつくつく……！ バカな奴らだニヤなのらごわすですう……！

俺はこの瞬間をずっと待っていたのだニヤなのらごわすですう！」

「こいつ……！ まだ諦めてなかったのね……！」と苦虫を噛み潰したような表情の水崎。

「まさに黒くて油っぽくてカサカサ動くアレみたいな生命力です……！」

……！と嫌悪感を顕にする菊。

「それにしても語尾のせいで緊張感がまるで出ない……！」と廉人だけがツツコまなくていい所をツツコんでいた。

「フハハハハ！ こんなものこうしてくれるニヤなのらごわすですう！」

俺は持っていたイカサマ装置を口の中に放り込む。

バリバリバリ！

「し、信じられないわ……！ 機械を……食ってる……！」

「なんて執念なんだ、樹……！」

皆がおぞましいものを見るように俺を見ているが気にしてられるか！

ごくんと飲み込み、ニヤリと笑う俺を見てサササと全員が俺から

距離を取った。

「見るニヤなのらごわすですう。俺は次のターンでゴールに届くの
だニヤなのらごわすですう。誰にも賞金は渡さないのだニヤなのら
ごわすですう!!」

やはり最初のイカサマで突っ走った分は大きく。俺のコマはゴー
ル直前まで来ていたのだった。

ちなみにマスコットキャラクターのジンくんは酔いつぶれてぐー
すか寝ている。

「最後の悪あがきを……!!」

「さあ正々堂々と勝負しようじゃないかニヤなのらごわすですう!
!!」

「お前が言うなよ!!」

「まだよ! ゴールまでは9マス! 小さい数字が連続で出れば私
たちの勝機はまだあるわ!

それにゴールの一つ前のマスを見て!」

そこには『振り出しに戻る』というお決まりなマスが設置されて
いた。

「8が出れば樹はスタートへ逆戻りか!」

「お願い……!! 8出てください!!」

バカな奴らだ。幸運の女神に愛されたこの俺の力を侮っていやが
る。

「お前らに神を見せてやるニヤなのらごわすですう!

いでよ9ニヤなのらごわすですう!!」

俺はルーレットを回した。そして

『9!!』

『えええええええ!!?』

全員が信じられないといった表情でルーレットを凝視した。

「クッククックク……クハッハッハッハッハッハ! それ見たこ
とかニヤなのらごわすですう! やはり神は俺を見放さなかったニ
ヤなのらごわすですう!!」

「畜生……！　なんて強運の持ち主よ、コイツ……！」
嬉々としてゴールまでコマを進める俺。

「やったー！　あがりー！　一等賞！　一位！　優勝　！　こんな
もん着てられるか、ゴルア！」

俺は赤いドレスをばさつと脱ぎ捨てた。
それを見て悔しがる各々。

だが

「まだですよ、新谷くん」

いきなりみちる先輩がそんなことを言い出した。

「へ？　何がですか？」

「トラップカード発動。このカードは対象の出目からマイナス1する
ことができます」

「……………は？」

室内がシーンと静かになる。

今……先輩なんて言った？

ぼくちんわかんない。

「マイナス1!？」

「つてことは……！　8だから……！」

「スタートに逆戻り!？」

瞬間。弾けたように全員が爆笑し始めた。

「ギャハハハハハ！　先輩最ツ高ですよ！　樹、ざまあああ！　く
やしいのう、くやしいのう！」

「ひいーっひっひっひい！　新谷……！　因果応報よ！　きゃははは
ははは！」

「ぶくく……！　もうだめ……！　お腹が……！」

「やるわね、貴女」

なんだか握手しあっているエリとみちる先輩。

俺はこの日知った。

神をも超える存在。

それが川澄みちるといふ人物なのだ。

「うわああああああああああああああん！ 死んでやるニヤなのさうわすですうううううううううう！」

ロツジの二階にあるテラスからスキー場を眺めている時だった。

「一人で黄昏て何やってんだ」

「なんだ……廉人が……」

「残念だったな。可愛い女の子じゃなくて」

肩をすくめて笑う廉人。なので俺はフォローを入れておくことにした。

「お前のドレス姿も可愛かったぞ」

「今すぐ忘れないと、ここから下に突き落とす」

廉人は地から響くようなドス声で俺の頭を掴むとギリギリと力を込める。

どうやらフォローにならなかつたらしい。

廉人の周りにゆらゆらと負のオーラが立ち昇っているのが見えた。

「すいません！ 忘れました！ 綺麗さっぱり忘れちゃいました！」

どうして俺の周りにはこう攻撃的なヤツばかり集まるのか。

俺の頭から手を離してため息を吐くと、廉人は手すりに背中を預けて空を見上げた。

「ほれ」

逆の手に持っていた缶コーヒーを投げてよこしてくる。

「さんきゅ。缶コーヒーなんてどこに売ってたんだよ」

「ちよつと行った先に自販機があつたぞ。散歩の帰りついでだ」

暖かいコーヒーを喉に流し込むと口から白い息が漏れる。

「なあ」

「んー？」と俺は夜景を眺めながら生返事する。

「橘さん……お前とどういう関係だ？」

「失礼な。恋人同士以外に何に見えるってんだ」

「冗談はいい。あの人、政府の人なんだろ」

廉人は空を見上げたまま、こくりとコーヒーを飲む。

「なんで？」

「何でも何も、お前に政府を馬鹿にされてすっぱー怒ってたじゃないか。見てりやすぐ分かるって」

少しばかりはしゃぎ過ぎたか。気をつけないとな。

「政府の人らしいぞ」

俺は頭の中で反省しながら、そう答えた。ここではぐらかしても意味の無いことだし、逆に怪しくなるだけだ。

「らしいって……」

廉人は呆れたようにこちらを見た。

「色々あるんだよ、色々。いくらお前でもこれはなーいしょ」

廉人は振り返ると、手すりに両腕を乗せる。

「色々……ね。ま、そうだよな。人に言えないようなことなんて誰も持つてるもんだよな。」

親しいが故に言えないことも、在る」

それは一体、どつちのことを言っているのか……。

廉人の眼は何を見つめているのか、俺には見当もつかなかった。

ただライトで照らされたスキー場を見ていないのは確かだった。

俺と廉人の口から白い吐息が闇の中に溶けていく。

「橘さんは今の政府をどう思ってるんだろうな」

静寂を破って不意に廉人がそう呟いた。

「やけにシリアスモードだな」

「たまには経済研究部らしく、日本の未来を憂うのも悪くないだろ？」

おどけた感じで廉人が言う。

「さあな。政府の支持率なんて底を這っている状態だし、今のままじゃまずいってことは分かっているとと思うけど。」

でもこれも時代の流れなのかも知れないな。所詮、俺らなんて時代の大きなうねりに巻き込まれるしかないのさ」

「そうだよな。結局、今のままじゃ何も変わらないんだよな、日本は……。」

それならいっそ」

めきよりと缶コーヒーを握りつぶす廉人。

「廉人……？」

「……………」

俺の呼びかけには応えず、廉人は黙ったまま白銀の風景を眺めていた。

と、その時だった。

「ちよつとー！ 男二人で何してんのよー！」

水崎の声がして俺は下に目線をやる。すると玄関先には先輩や菊も集まって星を見ている様子。

俺はPCを取り出して時間を確認した。

もうそろそろか。

俺は残ったコーヒを一気に流し込むと叫んだ。

「よおし！ 天体観測にいくぞおお！」

「はあ!？」

下で驚いているツンデレ。

隣で廉人も俺のいきなりの提案に驚いている。

「こつからちよつと山を登った先に広場があるらしいんだ！ そこで見ようぜ！」

「あらまあ。いいですね」

よし、先輩の許可も降りた。

「ほら、廉人いくぞ」

「はいはい」

仕方が無いな、とでも言いたげに廉人は笑うのだった。

「わあー！ きれー！」

菊が満天の星空を見上げ、両の手の平を組み合わせ、乙女チックに眼をつるつるさせている。

「へえー、こりゃ大したものね」

水崎もこの星空には驚きを隠せないようだった。

広場から見える星空は絶景の一言であった。都会ではライトアッ

ブのせいで見えないような星が、こんなにも大きく輝いて見えるとは俺も予想していなかった。

みんな喜んでいようなので嬉しい誤算である。

俺はそんな女性陣を尻目に機材を組み立て始める。

「あら……。新谷くん、それは一体なんですか？」

「天体観測といえば望遠鏡！ この冬の思い出に星空でも撮ろうかと思ひまして」

俺は組み立てた電子望遠鏡にPCを接続する。

「激写！ 激写！」

そして俺は星空をパシャパシャと撮り始めた。

樹たちが星空を眺めているだろう頃、私はロτζジの広間でソファに寝転がっていた。

天体観測だなんて暢気なものね……。

私が天体観測についていかなかったのは樹の指示があったからだ。

詳しい内容は話さなかったが、今晚どうやらこのロτζジで何かが起こるらしい……。のだが、今のところは何ら起こる気配が無い。

おそらく例の企業を炙り出す何かなのだろうが……。

「大丈夫なんでしょうね……」

私は窓から外の星空を眺めた。

そこには私を飲み込んでしまいそうな星空が広がっている。

と、その時だった。

不意にちかちかと星が点滅した。

「？」

私は不審に思い電子双眼鏡を取り出し、設定を『アウル・アイ』に変えてちらつく星を眺めてみる。

「!?!」

そして気づいた。

星に被る巨大な影。

普通の人間ならばまず気づくことはないだろう。

「あれは……軍事航空機！？ どうしてこんなところに……！？」

あいつの言うとおり企業を釣ったっていうの！？ どうやって！？

その航空機の最後尾に注目すると、そこから黒い人影が次々と投下されていた。

……くる！ 考えるのは後ね……！

私は自分の部屋へ駆け込むと荷物のジッパーを開き、銃を組み立て始めた。

すぐに準備をしないと……！ ここは戦場になるわ……！

「あれ？」

不意に廉人が何かに気がついた。

「どうかしましたか？」

先輩の問いに廉人は怪訝な顔で指をさした。

「いや、あれなんですけど……」

廉人が指さした方の空が何やら赤く染まっている。

おー。派手にやっつてるなー、あいつ。

「あれ？ 火事かな？」

菊はうーんと背伸びする。

「冬は空気が乾燥しますからねえ」

あらあらとみちる先輩。

「ははは、ありや俺たちのロツジの方向だなー」

俺がそう言うつと電子望遠鏡を覗いていた水崎が叫ぶ。

「てゆーかあれは私たちのロツジじゃないのよ!!」

『ええええええええええええ!!』

「こんなもんね」

パチッパチパチッ!

ロツジが焼け木がはぜる音がする。そしてやたら焦げ臭い。眼が焼けるほどの強烈な赤がロツジから放たれていた。

「ちよつと……生きてる？ 急所は外したはずよ」

私は近場に倒れている黒いアーマーをつけた襲撃者を踏みつけた。全身を黒で覆われ、顔もヘルメットのような防弾メットをつけているのでどんな顔をしているかは分からない。

「ぐっ」

どうやらまだ息があつたらしく男が呻く。

「お、おまえ……何者だ……！？ 我が部隊が一人の女に壊滅などと……！」

「アンサラーよ。もつとも国家直屬だからガーディアンと言った方が分かりやすいかしら」

「ガーディアンだと！？ そんなまさか……ここまで嗅ぎつけていたのか！」

「なんだか勝手に一人で盛り上がってくれている。ちょうど良いのでそれに乗っからせて貰おう。」

「そうよ。すべて知っているわ。」

“コード：A計画”のこともね

「バカな……！ どこで漏れたんだ……！」

「細部までは統制できなかったようね。それが大企業の落とし穴よ」

「くっ……！」

悔しそうな様子の男。

「なーんてね。ところがどっこい。そんな馬鹿なことを考えてる企業がどこか知らなくてね。是非、教えて欲しいものね」

「言っつて私は男の額に銃を突きつける。」

「……話すと思うか？」

「…………。残念ね」

「パチッ……！ ドシャア……！」

「炎に舐められロツジの一部が崩れる。」

「男は静かに眼を閉じた。」

「パンッ！」

「夜の闇に乾いた銃声が木霊するのだった。」

Answer - 2 "反国家政府" 其の11 - 1

いつもの喫茶店で俺とエリはいつもの席に座っていた。

「はあ……。結局どこの企業か分からなかったじゃないのよ」

いつもと同じアイスコーヒーを飲みながらエリはため息を吐く。

あのロツジ炎上事件から二日が経過していた。あの事件は結局、暖炉の整備不良ということで片がついた。襲撃者の死体もエリが片付けたようだし、山の上でさらには雪も多く積もっていたことから消防車がついた頃にはロツジは全焼していた。そういうわけでロツジからはドンパチをやった形跡など嗅ぎ付けられることはないだろう。全部炭になっちゃってるわけだし。と、言っても多少の痕跡などは残っていたはずだが……。どうやらエリの上官が手配したらしく、大事には至らなかった。

経研部のメンバーはと言えば『荷物が燃えた!』と大騒ぎしていたが、今ではそのことも忘れて春休みどこへ遊びに行くかの計画を立てている。なんとというか、能天気な奴らで安心する。

「ん〜。まあもともと襲撃者たちが喋るとは思っ
てないし」

「はあ? じゃあなんであんなことしたのよ! てかアンタ、どうやってあの企業を引っ張ったのよ!」

「それじゃあ、ネタばらしといこうか。あの企業を引っ張ったネタはこれだ」

俺はエリにPCに写った画像を見せた。

それを見たエリは拳をふるふると震わせる。

「な・ん・の・冗・談・よ」

エリの反応も納得できる。なぜならそこに写っているのは双六ゲームの時、罰ゲームで縛られた菊の写真なのだから。

「こんなので企業が引つ張れるわけないでしょ！ 真面目に答えなさいよ！」

「ところがどっこい引つ張れるんだよ。企業はこの画像を見て菊を助けにきたんだよ」

「……………どうということ？ っていつか、前々から思ってたけど私
が知らない情報を持っているでしょ」

「MSNに侵入した時に見つけた“コード：A計画”の人名表。その中に名前があったのさ。桜咲菊。その隣には桜咲照光。遺伝子治療の研究に携わってる菊の親父さんだ」

「はあっ！？」

思わず席から立ち上がるエリ。

「調べるのは簡単だった。桜咲照光はつい最近、研究所を移動したらしい。兼ねてからヘッドハンティングを受けていたが、それを断っていたようだ。だがしかし、急に移転に同意した。なぜだと思う？」

「まさか……桜咲菊が脅迫の材料に……？」

「それが分かれば後は簡単だろ。MSNにこの写真を添えて誘拐を示唆するメールを送ればMSNは大慌て、桜咲博士に伝わる前になんとかしようとするだろう。菊が誘拐されたと聞けば博士も気が気じゃなくなるだろうからな。だけどMSNに軍事力は存在しない。そうなると軍事力を持った背後の大企業が出てくるしかない。それも“コード：A計画”に関わっているはずの大企業がな」

「なるほどね。企業を引つ張れた仕組みは理解できたわ。けどね……！ その大企業が分からなきゃ意味がないでしょーが！ あんたが企業が分かるって言うからやったんじゃないのよ！ これじゃあまた振り出しだわ！」

叫んでぐしゃぐしゃと頭を掻き毟る橘さん。

「そーでもないぞ」

俺はカメラの画像に眼を落としながらそう返す。

「ほら」

俺は窓からだるそうに外を見ていたエリにカメラを突きつけた。

「なに？ 星？」

「違う違う。」「」

俺が指をさすと

「これって……軍事航空機……。あんだ、いつの間に撮ってたのよ」

「天体観測のついでにな。この画像をナビゲーターに解析して貰えば何か掴めるんじゃないか？ 例えば この軍事航空機を所持している大企業とか、な」

「ちょっと待って」

何か辛そうに額に手をあててる橘さん。

あつれー？ てっきり俺を抱きしめて喜んでくれると思ったのになあ。

「もしかして私、奴らと戦わなくても良かったんじゃないの？」

「……………」

俺はPCで時間を確認する素振りを見せる。

「ありゃ。もうきづなちゃんが始まる時間だ」

席を立った俺の腕をがしつと掴む橘さん。かなり力が籠もっていて正直痛い。

「あんだってやつは……………」

バキヤ！

エリが持っていたアイスコーヒーのグラスが砕け散る。

ぎゃああ！？ こええ！？ 囿にしたことを怒ってらっしやる！？

「でも襲撃者を野放しにしたら探し始めるだろうし、エリなら一人で全部倒せると思ってたよ！ さすが俺の嫁！ 最高！」

「誰が誰の嫁なのよ！ 要するに囿にしたのね！？ そうなのね！？」

ガタガタガタ……！

「あがががゆゆゆらすすななな」

立ち上がって俺の首を絞めガクガクと揺さぶってくる。

他のお客さんが何事かとこちらを見ているので落ち着いて欲しい。

結局、何をやっても文句言われるのなんだろうっ！？

Answer - 2 "反国家政府" 其の111 - 2

「おぬしがガーディアンのか。樹から話は聞いている」

俺とエリはツバキの元へ馳せ参じていた。

「ぐっ……橋って……」

エリは首をぐききと曲げて俺の方を見る。

「なんだ？ 橋という名前ではないのか？ 樹にはそう聞いておっ
たが」

がしっ。

逃げようとした俺の腕が掴まれる。

「ん〜？ どういうことなのかな〜？ い・っ・き・く・ん〜
？」

「あ、いや、事件のことを話した時にですね、ええ、はい」

「って貴方まさか“ヒューマンイーター事件”のことを話したの！
？」

「うん！」

「笑顔で頷くな！ 親指をたてるな！」

ぐきっ！

「ぎゃああ！ 親指さああん！？ しっかりしてええ！」

俺は曲がった親指を見て叫ぶ。

「ったく。本当に信用も何もあつたもんじゃないわね。

それでこの軍事航空機をどの企業が持つてるか知りたいんだけど」

「軍事航空機か。待て、すぐに型番をだす。そこから所持している企業を調べてみよう」

タタタとツバキがキーボードに打ち込むと何やらリストのようなものがモニターに表示される。

「そこから遺伝子生命学に関わっている企業、そしてこの街に研究所がある企業を割り出して」

言われた通りにツバキが検索を絞っていく。

すると

「うそ……でしょ……」

「あーあ、こりゃ最悪だな」

モニターには一つの企業の名前だけがピックアップされていた。

テトラポッド社。

分かってても手を出せるような企業ではなかった。テトラポッド社は国家側の日本で三指に入る大企業なのだ。

そう国家側の大企業だったのだ。

政府が力を取り戻すために、権力が衰え始めた当時から政府を支えてきた大企業。

「まさかとは思いつけど信じるの？ 大企業なんてレベルじゃないわ。日本を支えてる企業って言っても過言じゃないのよ」

「でもこの企業だ」

俺はモニターを指差す。

するとエリは『ストップ！』と言わんばかりに両手を突き出す。

「待つて！ ちょっと待つてよ！ 相手は国家を支援している重要企業なのよ！？ 言うなれば私たちのパトロンでもあるのよ！？ それを国家側のアンサーであるガーディアンが悪事を暴くって要するにこれって」

「ああ、内部告発みたいなものだな。そしてテトラポッド社は政治の中枢とも繋がっている。こりゃ癒着してそうだな」

「ちょっと待つてよ！ 落ち着いて！」

「お前こそ落ち着け。頭撫でようか？ 抱きしめようか？ 結婚し

よ

どくす。

エリのボディブローが脇腹に入って俺は無言で壁に背中を預ける。

「この“ヒューマンインター事件”は政府が裏で糸を引いているとでも言うつもり!？」

大業に腕を振って俺を睨みつけてくる。

「そ、その……とおり……です……」

「その通りって……」

「だって事実だ。テトラポッド社が俺たちを襲ったのは間違いないじゃないか」

俺のその言葉にエリは天を仰いで頭をぐしゃぐしゃと頭を搔いた。

「ああ、もう……! いったいどうしたらいいのよ! 私の査定があっ……!」

いつものごとく何の部活か分からない部活動を終えて、私は一人で帰路を歩いていた。

それにしても樹先輩には困ったものである。

あの人の女好きはある種の病気のように思う。

今日もまたいつものようにはっちゃけていた樹先輩を思い出して私にくすりと笑みをこぼした。

しかし私は知っていた。

樹先輩は時々、ぼーっと物思いにふけったりすることがあるのだ。

その時の表情はいつもおちゃらけてるあの人とはまるで別人。

何か凄く遠くを見据えてるような眼差し。

それは私の手の届かない場所に行っているような……そんな感覚を受ける。

一体、何を考えているんだろう……。

不思議な人だった。あんなにも身近に接してくれるのに、とてもとても離れている人。

そこで私はハツとなった。

あーもう、また樹先輩のこと考えてるし……。

思わず出るため息。

と、そこでポケットのPCが震えだした。

ホログラムモニターを見てみるとお父さんからだった。

「もしもし。お父さん？」

『ああ、菊』

と何かほっとしたようなお父さんの声。

「？ どうしたの？」

『いや、何でもないよ。それより何か変わったことは起きてないか？』

変わったこと？ どういうことだろうか。

「別に何も無いよ。普段通りだよ？」

ロツジが全焼したのも普段通りといえば普段通り。非常に残念だが経研部の中ではよくあることである。

変わったことを強いてあげるなら最近のお父さんだ。研究所が変わってから家に帰ってきたことはないし、電話でも妙にそわそわしているように感じる。

『そうか……』とやはり何か安心した様子。

私は思い切って訊いてみることにした。

「お父さんこそ大丈夫なの？ 最近、なんだか様子が変だよ？」

その時だった。

『！』

電話の向こうで誰かの声が聞こえた。

『……ッ！ あ、すまん。もう切らないといけない。また連絡する』

プツ。ツーツー。

切られた。そんなに忙しいのだろうか。

なんだか心の奥底がもやもやとする。

そのもやもやの正体。

それは『不安』だった。

何か嫌な予感がする。

私はポケットにPCをなおして歩きだした。

今度、お父さんの研究所に様子を見に行ってみよう。

そう思った刹那！

「あぶないーい！」

樹先輩の声がして、

だきっ！ ダンッ！

私は抱きしめられて壁に押し付けられていた。

「……………」

何が起こったか分からない。きっと私の眼は点になっていることだろう。

「あのお……………樹先輩？」

私が視線をあげると、間近で樹先輩は真剣な顔をしていた。

って、顔近っ！

「ふう……………。危ないところだったな、菊りん。今、宇宙人にさらわれそうになってたぞ」

大げさに額の汗を拭う先輩。

「はあ、さいですか。菊りんって呼ばないでください」

要約すると私に抱きつきたかったということのようだ。さすがは

自他共に認める歩くセクハラ。公共の道端でも容赦ない。

「一人で帰っちゃうなんていつからそんな冷たい子になっちゃったんだ、菊りんは」

「いや、いつも一人で帰ってますけど」

私はつかさずツツコミを入れておく。この人のポケを放置するとツツコンでくれるまでポケ続けるか、拗ねてしまつという厄介な性質を持っているのだ。

「ところで菊りん。さっき誰と電話してたの？」

「見てたんですか？ そろそろ菊りんって呼ぶのやめませんか？」

私と樹先輩は何事もなかったかのように歩き始めた。

「うん。電信柱の裏でハンカチ噛み締めながら見てた。男じゃないよね？」

「はい、男ですよ。私にとって特別な人です」

私が含まを持たせるようにそう答えてやると樹先輩の眼が点になった。

そして彼はぶんぶんと首を振ると、真剣な顔で私の肩を掴む。

「その男はやめとけ」

「何ですか？ 優しい人ですよ」

「それがその男の手口なんだ！ いいか、その男は敵国のスパイだ。菊っちが持っている情報が目当てで近づいてきているんだ。残念だがもう会わない方がいい」

「何ですか敵国って。先輩の中でどういう設定になってるんですか」

「うるさい黙れ。お前は俺の言うことを聞いていればいいんだ」

「いきなり亭主関白ですね」

Answer - 2 "反国家政府" 其の12 - 2

あまりイジめるのも可哀想なのでネタばらしすることにする。

「実はさっきのお父さんなんです。てへっ」

私は舌をだしてコツンと頭を打つ。

「なんだって！ それならすぐにごっちからかけ直して挨拶しなければ……！」

樹先輩はいきなりポケットからPCを取り出した。

あれ？ 先輩、うちのお父さんのPCの番号なんか知って

よく見ると私のPCだった。

「い、いつの間に……！ か、返してくださいよ！」

私はポケットにしまった筈のそれがないと気づき先輩に詰め寄った。

「あ、もしもし。わたくし新谷樹と申す者ですが」

『？』

「突然ですが、娘さんを下さい」

「キャーーーーー！！！」

私は慌てて樹先輩の手からPCを奪い通話を切った。

PCを胸に抱き、ほっとする私。

「な、何てこと言っんですか!」

きつと私の顔は真っ赤になっていることだろう。

「安心してくれ。菊っちのお父さんのPCにかけたわけじゃない」

「……へ? それなら誰に……?」

確かに誰かへかけていたはずなのに。

「菊っちの家にかけたら、菊っちのお母さんが出た」

「同じじゃないですか!」

そして気付いた。いつの間にか胸のもやもやが薄れていることに。

私は思わず感心してしまう。

こうやってこの人は簡単に私の不安を取り除いてしまうのだ。

「? どうした、菊っち。もしかしてお父さんと喧嘩でもしたのか?」

「してませんよ。何か様子は変でしたけど……」

すつ。

瞬間。

ほんの一瞬。樹先輩の眼の色が変わった。

物思いにふけっている時の　遠くにいる時の彼の眼が姿を現したのだ。

きつと彼をよく知る人でも気付かないだろうささいな変化。

それでも先輩を見続けてきた私には分かる。

「様子が変わって、いつから？」

そして次の瞬間にはもういつもの何でもない風の彼に戻っている。

だから私も深くは触れない。

触れられない。

「最近、研究所が変わったんですよ、お父さん。元々は普通の研究所だったんですけど、テトラポッド社にヘッドハンティングを受けたんです。最初は断っていたんですけど、気がついたら異動を受けることにして……最近私に『何も起こってないか？』とか訊いてきたり、何かいっつも慌てる感じがするんですよ」

「んー、研究所だもんなあ。きつと毎日実験とかして忙しいんだろ
すつ」

なんだか知った風に腕を組んで『うん、うん』と頷いている先輩。
そうして樹先輩と話していると、すぐに別れ道まで辿りついてしま
う。

ここからは私と樹先輩は違う道なのだ。

「それじゃあ、また明日ですね」

「ああ。また明日な！」

いつまでもこっちに向かって手を振っている樹先輩にくすりとな
いながら私は帰路を歩いて行った。

ちなみに家に帰ると意地悪そうな顔をしたお母さんが待っていた。

そしてその第一声はこうだ。

「新谷樹くんって菊の彼氏？　ねえねえ、どんな子なの？」

思わず私はため息を吐いてしまふのでした。

「そうか。やはりそうか」

私の報告を聞いて長官は渋い顔をした。

「やはりって長官。まさかこの事を知っていたんですか!？」

思わずばんつとデスクを叩いてしまう。

「いや私も詳しい部分は知らなかった。だが最近のテトラポッド社は怪しい動きをしていたのでな。テトラポッド社は政府役人の中枢と通じているので確信を持てるまで表沙汰にはできなかつたのだ」

長官はぎしりと深く椅子に身を預けた。

「長官。まさかこのことは」

長官は立ち上がると窓から外を眺めた。

「ああ独断だ。お前がどういう任務についているのか知っているのはお前を担当しているサーチャーだけだ」

そしてゆっくりと振り返る。

「分かっているだろうが口外するなよ。テトラポッド社が何かをしようとしているのは間違いない。だが証拠が無い。お前にはその証拠を掴んできてもらいたい」

内ポケットからカードキーを取り出すと、すつとそれをデスクの上に置いた。

「テトラポッド社の研究所近くにあるマンションの一室を借りておいた。有効な使い方をしてくれ」

「分かりました。必ず証拠をあげてみせます」

「ここが俺たちの愛の巣か」

「何が愛の巣よ。言うておくけどちょっとでも変なことしようとしたら殺すわよ」

エリは長いボストンバッグを両肩にかけ両手にも持ちながら中に入っていく。そしてリビングに行くとき早速バッグの中身を取り出し始めた。

マシンガン、スナイパーライフル、電磁レールガン、手榴弾……っでもう少し女の子っぽいものは持ってきてないのか、この人。

だがしかし！ 男性諸君よ！ 聞いて欲しい！ これら四つのボストンバッグの中には絶対に彼女の肌着も入っているはずなのだ！

ああ、分かっているともし！ 任せておけ！

ここで動かずして何が男 いや漢か！

俺はカメラ目線でぐつと親指を立てて見せた。

ちらりとエリの方を確認してみると、彼女は銃火機を組み立て、並べること完全に気をとられている様子。

俺は手近にあった彼女のバッグを開けてみる。

な〜にが〜でるかな〜。

そこには

『男性の意識を変えるフリルファッション』という雑誌が入っていた。

……………フリル？

俺は橘さんがふんわりフリルなスカートを翻してる姿を想像してみた。

「……………」

俺はその本を静かにバッグの中へ戻し、ジッパーを閉じる。

「？ どうかした？」

「あ、いや…………別に…………」

俺は彼女をちらりと見て眼を泳がせる。

「なによ？ 勝手に私の荷物触ったら怒るわよ」

「ああ、分かってる。なあ、エリ」

俺は哀れむように彼女を見た。

「お前は充分、今のままで魅力的な女性だよ」

「はあ？」

何言ってるの、コイツとばかりに眉を曲げるエリ。いや、何買ってるの、お前と言いたいのはこっちだから。

「急に言っておきなくなっただ。気にしないでくれ」

おいおいと涙をぬぐう俺を見て訝しげな彼女。だが俺の近くにあってバッグを見た瞬間、彼女の顔が『かーっ!』と赤くなった。

「あんたまさか……!」

「橘さんがフリルなんて着たらへぎよろ!?!」

彼女のコークスクリユーパンチを頬に受けて俺は体を回転させながら吹っ飛び、壁に背中をうちつけた。

「最ツ低ね、アンタ!」

「すみませんでした。まさかそんなものが出てくるとは思っていませんでした……」

俺は正座して頭を下げた。

「はあ……。珍しく反省しているみたいだし、もういいわよ。つか、慣れたわよ」

途端にはあつと明るい顔をする俺。

「じゃ、じゃあお詫びに片づけ手伝つよ」

「いいわよ、別に。自分でやるから」

後ろ手にひらひらと手を振って、バッグの元へ戻るエリ。

「まあまあ、そう言わずに。これはどこに納すのかな？」

「だからいってば！ ちょっと……！ 荷物に触らないでよ！」

「遠慮するなよ」

俺たちは二人で一つのバッグを引っ張りあい始める。

「遠慮とかそういう問題じゃないのよ！ だってそのバッグの中身は……！」

とその時だ。互いに引っ張りあったせいでジッパーが壊れ、その反動で中身が空中に放り出された。

ばさっ！

ひらひらとソレは宙を舞って自分の頭にのっかったものをつまんで目の前に持ってくる。

「げ！」と思わず声が出してしまった。

それはなんとというか橘さんの下着だったのだ。

エリは並べた銃火器のところまで無言で歩いていくと、一番でかい電磁ガトリング砲を両手で抱え上げた。

連射性能にも優れ、その威力は戦車の装甲をも貫くという代物だ。

でも、いくらキレたとしてもまっさかそこまでは……。

とか思っていると、エリは慌てず騒がずセーフティを外しやがるではないか。

まず……！ コイツ、本気……逃げ……！ いや無理……ころさ……！

俺の体が反射的に逃げようと動き出す！

だが

「Have a nice die」

ドガガガガ……！

まるで工事中にドリルで地面を掘っているような騒音とともに弾丸が連射された！

瞬間、アンダーソンくんもびっくりなほど世界がスローモーションになる。

「ぎいいうゆうわあああああっ！」

「しいいなあああああいいっ！」

銃弾が床を穿ち、砂埃が巻き上がる。

俺は脅威の回避能力で自分に向かってきた銃弾を避け、転がり出るように部屋の扉を突き破って外へ脱出するのだった。

ぐくぐくぐく。

いい感じに煮えてきたカレーをおたまですくって口に含む。

うむ、うまい。成層圏までぶっ飛びそうなうまさだ。

俺は鍋を持ったままガムテープで蝶番を固定したりビングへの扉を開ける。

「おい、できたぞー」

そして鍋を蜂の巣になった机に置いた。

「結局カレーにしたわけ？」

割れた窓ガラスにダンボールを張る作業をしながらエリはそう言った。

「このカレーをただのカレーだと思ったら大間違いだぞ、愚民」

「はあ？ たかがカレーに対した違いなんてないでしょ。当たり前
れの無い料理じゃない、カレーなんて」

エリは手に持っていたガムテープをその場において、こちらにやってこようとした。すると、まだ充分に固定できていなかったのか、窓に貼り付けていたダンボールがべろりと剥がれる。

「……………#」

あ、イラついている。こいつ意外に不器用でやんの。……………別に意外でも何でもないか……。まあそれはともかくとして

「カレーじゃないカレーだ!」

俺はだんつと机に拳をふりおろす。すると穴だらけになっていたこともあり、簡単にその部分だけ割れてしまった。

「カレーでもカレーでもなんでもいいわよ」

はあ、と本当にどうでもよさそうな橘さん。

ぷっちーん。

そのあまりにカレーを冒瀆するような言い草に俺の額の血管が限界に達した。

「ばっかもーん!」

俺はどこかの派出所の部長さんみたく怒鳴ってちゃぶ台をひっくり返した。

「ちょっと!」とエリが慌てて空中でカレー鍋をキャッチした。

俺が半壊して裏がえった机を元に戻すと、エリはほっと息を吐いて鍋を置いた。

「ふう。思わずカレーを台無しにしてしまうところだったぜ」

額の脂汗をぬぐい、カレーに大事がなかったことに安心する。

「何がしたいのよ、あんたは」

じとりとした眼で俺を見ている橘さん。

「ふん。聞いて目玉を飛び出すがいい。このカレーにはな。樹マジック特製七種のブツダが求めた幻の大変有り難い伝説の万病に効く宇宙パワーが詰め込まれた貴重な香辛料が使用されているのだ！」

ざばーん！

俺の背後に津波が押し寄せた。

「凄いやりたいのは分かったけど尾ひれが尽きすぎて信憑性が薄くなってるわよ。てゆーか、うさんくさい」

「ええい、黙れ！ ならば食ってみるがいい！」

「やっと食べさせてくれるのね」

はあとため息をついて樹マジック特製（中略）香辛料を使ったカレーを口に含む。

刹那！

ズガシャアアーン！

エリはスプーンをくわえたまま雷に打たれたような表情をする。そ

してぶるぶると震えながらスプーンを握りしめ、眼から光線を出しながら立ち上がった！

「うまぁー……い！ この口の中でまるやかに広がるカレーいやカリーの風味！ これは……まさに宇宙の広がり……！？ そう、まるでビックバンのよう……！ 至高の一品と呼ぶにふさわしいカレー！」

その姿はどこかの美食家のおじさんのようだ。

「一体……一体何を入れたの！？」

「決まってるだろ。あ・い・じ・よ・う」

そう言ってウィンクするとエリは急に冷静になって座った。

「なんか萎えた」

「ええええええええ！？」

仕方なく俺も座る。

かくして俺たちは無言のままカリーの消化に当たるのだった。

「ほら起きなさいよ」

「ん〜、おはよう。……んあ?」

俺は眼を覚まし、寝袋から出ようとした。しかし一体どうしたことだろう。体が一切動かない。

俺が寝ぼけたまま「そそ」としているとき、

「あ、そっか。ちょっと待って。外すから」と橘さんの何か思い出したかのような声。

「外す?」

カチャンと金具を外すような音がした。

俺が顔を自分の体に向けるとそこにはジャラジャラとチェーンが巻かれていた。

「なにこれ!? S Mプレイですか、橘さん! 俺初めてだからわくわくしちゃう!」

俺が期待に膨らんだ眼で彼女を見ると、エリは見下すように俺を見下ろした。

「違うわよ。あんたが夜中に起き出して変なことしないように縛っておいたのよ」

「……………。さいですか」

俺って信用ないんだなあ。

学校で昼飯を食べている時にそれは起こった。

ピンポンパンポーンと放送の注目音が鳴った次の瞬間。

『またお前か樹イ！ 職員室に今すぐ来い！何で呼び出されているか分かっているな、ああん！？ すぐだ！ すぐにこい！』

このヤクザのようなガラガラ声は間違いなく森先生のものだ。というかこの学校で経済研究部に関わろうとするのは彼ぐらいなものだ…………。

森先生は生活指導部の長で経済研究部の顧問でもあるお人だ。用件は間違いなくスキー合宿のことだろう。

彼はすぐに経研部をガミガミと叱るきらいがある。最初は俺たちのことを嫌って当たり前散らしているものだと思っていたのだが、どうやらそうでもないようだ。

彼はちゃんと俺たちを理解しているのだ。

それだけに怒る時はきっちりとしてんぱんに凹ましてくる。経済研究部を叱れる唯一の人間と言い換えてもいいだろう。

本人には口が裂けても言わないが、奴以外に経研部の顧問が勤まると思えないし。

「げ……！ 森ちゃんに伝わらないように情報規制したはずなのに！ どこで漏洩したんだ！」

「あーあ、しかも指名されちゃったな。こりゃご愁傷様だな」

「こつてりと絞られてくるといいわ」

後ろの席からこちらを見て『くひひ』と嫌らしくニヤつく水崎。

「フン。いいだろう。今日こそどちらが飼い主か教えてやる時だ」

鼻息も荒く俺が席を立つと、あるはずの無い声がした。

「あらあら。行かなくても大丈夫ですよ、新谷くん」

俺たちがそちらを向くと、そこにはいつものように微笑むみちる先輩の姿。

「あれ先輩。どうしてここに？」

「食堂へ行こうとしたら先ほどの放送が聞こえまして、立ち寄ったんです」

「また律儀な……」とツンデレ。

みちる先輩はそういう面倒見のいい性格なのだ。ツンデレには一生こんな思いやりのある行動はできまい。少なくともデレ期に入るまでは。

「うふふ。森先生には私が話をつけてきましょう」

「でもたぶんめちゃくちゃ怒られますよ？」

「それなら余計に行かせられませんね。第一に、新谷くんは副部長じゃないですか。ここは部長である私が行くべきでしょう」

まあ、それは確かに。といっても原因が俺だから指名なんてされただろうけどね！

「はあ。正直、助かりますけど」

「うふふ。それじゃあ出頭してきますね」

にこやかにそう微笑むと、とことことみちる先輩は教室から出て行った。

それから一分程経過した頃。またも放送が流れる。

『あー、新谷？ さ、ささ、さつきは大声出してすまなかった』

開口一番、何かにおびえるように森ちゃんはそう言った。

『うふふ……。それだけ……ですか？』

近くにいるのだろう。みちる先輩の小さな声が聞こえた。

『ひいつ！？ ぶつぶ、不器用なだけでほ、本当は良い生徒だと分かっていからな、新谷！ だから……！ だからたすプツリ』

そこで放送は途切れてしまう。

たす？ タスマニアデビル？

俺は可愛く首を捻った。

「おー、こりやまたえらい態度の変わりようだな」

廉人は机に頬杖をついたまま笑う。

「さすがはみちる先輩。敵無しだな」と俺も腕を組みうんうんと頷く。

「なんで経研部のほうが教師より力があるのよ！ あんたらおかしいと思わないの！？」と天井のスピーカーを指さしている水崎。

『だつてみちる先輩だし』

俺と廉人が同時に発した言葉に水崎はぺしゃりと自らの額を打つ。

「はあ……その言葉で納得できちゃうのがあの人の恐ろしいところね」

「仮でも何でもなくあの経済研究部を纏めている人だからなあ」

Answer - 2 "反国家政府" 其の14 - 2

と噂をしていると噂の張本人が教室に帰ってきた。

「お疲れ様です、みちる先輩。ナイスファイトでした」

俺と先輩は右拳をコツンとぶつけ合う。

「はい。ただいま戻りました」

「圧勝でしたね、先輩」

廉人のその言葉に先輩は少し苦笑いをした。

「それがそうでもないんです」

「とていつと?」

俺がオウム返しに問うと、先輩は笑顔で答えた。

「今回の件を不問にする条件を出されちゃいました。それをクリアできなければ、経済研究部は廃部だそうです」

「はっはっは、なんだ、廃部かあ。」

「って廃部ウ!？」

いきなりの展開に俺と廉人が立ち上がる。

微笑んだままおっしやるから一瞬、飲み込みかけたじゃないか。

「廃部ってそんないきなり……！」

「条件ってなんなんですか？」

「はい、それが困った条件なんです。どうやら、やっと正規部員が五名に満たないことがバレてしまったらしく……。校則違反の上に数々の不祥事は見逃せないと……。」

不問にするからもう一人、部員を探せ、と……。」

俺の問いにみちる先輩はさほど困った様子もなく答えた。

「よりによって校則の件を突いてきたか。ま、今まで気づかれなかったのがおかしいくらいだけど」と呆れたような廉人。

不祥事の割には軽い条件のように思える。だがしかし、これはあの経済研究部に今更入部するような人間はいないだろうと、先生方が考えた結果なのだろう。

「でも簡単な条件で良かったじゃん」

俺は安心したように席に座りなおした。

「簡単だって？ あの経研部に今さら誰が入りたがるって言うんだよ」

廉人にそう言われ、俺は視線で応える。

俺の視線の先を追う廉人とみちる先輩。

「は？ え？ 私？」

そこには当然のようにツンデレラこと水崎がいるわけだが。

「な、なんで私が経研部に入らなきゃいけないのよ！」

「話聞いてただろ？ 人助けだと思ってさ」

「イ・ヤ・よ！」

ぶいっとそっぽを向いてしまう水崎。

「そこをなんとか！ 頼むよ、水崎さん！ 経研部ほど気ままにやれる部活動はないんだよ！」

水崎の前でぱちりと両の手の平をあわせて拝む廉人。

俺も負けずに水崎勧誘を試みる。

「水崎。今、経研部に入ればもれなく俺が後ろから尾いてくるぞ！」

俺は白い歯をキラッ とのぞかせる笑顔で親指を立てた。

「いらないわよ！ っていうかただのストーカーじゃないのよ、それ！」

すぐさま俺の額にチョップでツッコミを入れる水崎。このツッコミ力は経研部として確保しておきたいところである。

「水崎さん。私からもお願いします。経研部を廃部にさせたくないんです。」

それとも、私たちのことお嫌いですか？」

「うぐっ」

うるつと潤んだみちる先輩の瞳に、一步退くツンデレ。

さすがみちる先輩だ。泣き落としとはえぐいことをなさる。

「そ、そりゃあなたたちのことは嫌いじゃないけど……」

水崎は顔を赤くしながらそっぽを向き、頬をぼりぼり搔く。

あ、デレ期入った？

「わ、分かったわよ……！ さ、さすがに廃部にされちゃうのは可哀相だし、入ってあげるわよ！」

顔を紅潮させたままで水崎はそう宣言した。

やっぱりこいつツンデレ属性だったんだな。

このデレ期の間こそ水崎の落とし所なのではないだろうか。

「なあ、水崎」

「な、なによ。べ、別にあなたたちのためってわけじゃないんだか

らね……！ あんたたちなら他の関係無い生徒を拉致しかねないし仕方なく」

「結婚しよう！」

「やだ」

水崎はいきなり無表情に戻っていた。

顔文字にすると『(´・`・´) ヤダ』って感じである。

あつれー！？ なんでだ！？

俺は水崎の様変わりに頭を抱えた。

これはもうMrブレインに水崎の脳解析をして貰わないといけないレベルだ。

「うふふ、有難うございます。これで廃部の件は解決ですね」

ぴしゃりと両手をあわせて微笑むみちる先輩。

この人はこの人で相変わらず人を操るのに長けている人だ……。

その日の放課後。

俺はいつものように部室へと訪れた。

今日から新入部員となった水崎もいるかと思いきや、部室にはみちる先輩の姿しかなかった。

「ありや一人ですか、先輩」

「はい。桜咲さんは委員会で遅くなるそうですよ。水崎さんは入部の手続きに職員室へ。秋原くんはその付き添いです」

彼女は操作していたパソコンから眼を離すと、夕日を背負いながら俺ににこりと笑顔を向ける。

その笑顔はやはり人の心を落ち着かせるものだ。実際、俺も彼女の笑顔で救われている部分がある。

彼女は　みちる先輩は最初からそうだったのだ。俺は思わず出合った当初を思い出してフと笑ってしまう。

柄にも無くセンチメンタルになってしまった気分を、すぐに俺は切り替えた。

「ということとはしばらく二人つきりですね、先輩。最近は忙しくて二人つきりで話せなかったので寂しかったですよ」

俺は真剣な顔で彼女の眼を見つめた。

「そうですね。ちょうど私も二人っきりでお話したいと思っていたところですよ」

彼女はノートパソコンをぱたりと閉じると、急に真剣な表情になつてこちらを見返した。

「先輩……実は俺、先輩のことが……」

「新谷くん。これをどうぞ」

俺の話など一切聞かずにみちる先輩は白い封筒を俺に差し出した。

どこかいつもの先輩と違う雰囲気。

その瞳には何か秘めた真意が見え隠れしている。

それを訝しがりながらも俺はその封筒を受け取った。

「ありー？ なんですか、これ？ ラブレターにしては大きいですね」

白地の封筒を電灯に透かしてみる。中にはどうやら冊子が入っているようだ。

「どうぞ。中を見てください」

みちる先輩はそう促した。

俺は不思議に思いながらも封筒から、その冊子を取り出す。

そして、俺は封筒から出てきた“それ”に眼を見開いた。

どくん！

心臓が一瞬、跳ね上がった。

今まで和んでいた空間にビシリとヒビの入る音がする。

平和だった日常が、ガラガラと崩壊していく音が聞こえる。

思わず驚きの声が出そうになった。気を抜いている時に奇襲を受けたような感覚。

足元をすくわれたような気分。

その封筒の中に入っていた冊子は

テトラポッド社のパンフレットだった。

真っ直ぐから彼女が見つめてくる。

「これが……必要だったのでしょ？」

ぐんつと急に視界が歪み、彼女と俺の距離が離れたように感じる。

頭が沸騰でもするように血流が早くなる。

どういうことだ……？ どうして先輩がテトラポッド社のパンフレットを俺に見せる……？ 俺がテトラポッド社について調べていることを先輩は知っている……？ 俺はカマをかけられているのか？ なら心を平常にして……って俺は馬鹿か！ カマなわけないじゃないか……！ 彼女はわざわざ“テトラポッド社”のパンフレットを持ち出しているんだぞ！？

それは詰まり、俺がテトラポッド社について調べていることに目測がついてるということ……！

ということとは

“敵”。

どくん！

俺の頭に嫌な一文字が思い浮かぶ。

可能性として考えられるのは、彼女は政府側、それもテトラポッド社側の諜報員つてところか。俺が“ヒューマンインター事件”と関わっていることを知って……いやそれは無い……！

つつい手に力が入りテトラポッド社のパンフレットをぐしゃりと強く握ってしまう。

彼女との付き合いは事件が起こる何年も前からだ……！ なら、最初から彼女は諜報員だった！？ そこに俺がこのこと首を突っ込

んできた！？ そんなことが有り得るのか！？

くそ！ 訳がわからねえ！

いや、“敵”だとしたらそもそもなぜこれを見せるんだ！？

宣戦布告か！？ としたら既に俺が“アンサー”だとバレている！？ そんな馬鹿な！ “敵”なら黙って今の状況を利用するはずだ……！

話が繋がらない！

彼女の知っている情報が部分的過ぎる……！ だが少なくとも俺が裏社会に何らかの形で関わっている人間だとはバレている……！

ここは確實！ 明白！

でもなぜだ！ なぜバレた！？ ロッジの一件から推測したのか！？ いや、ない……！ 不可能だ……！ やはり情報が少なすぎるはず……！ ならやっぱり最初から知っていたってことかよ！？ そんなバカな！ それこそ有り得ない！ 普段の彼女にそんな気配なんて微塵も……！

ごくり。

生唾を飲み込む。

彼女は変わらず真剣な眼差しで俺を見つめている。

だけどその可能性が高い……！ 他の企業などではなくテトラポッド社を見せたことから考えてもそう……！

彼女は知っているんだ……！

少なくとも俺がテトラポッド社の情報を集めようとしていることを……！

問題はどこまでバレているのか……！

どンドンと視界が歪む。

「新谷くん……やはり貴方は」

なんでなんだよ……！

気づけば俺は彼女から一步退いていた。

訳が分からない……！

どうしてバレた……！

すっとみちる先輩の眼が鋭くなる。

「貴方は“アンサラー”だったんですね」

一体、どういうことだったんだよ……！

Answer - 3 "アガスターシェ" 其の1 - 1

「新谷くんの反応で確信できました」

どくんどくん……！

心臓が早鐘を打つように鳴り響いている。

制服が脂汗を吸って背中に張り付く。

「まさかアンサラーなんて人たちが実在するなんて」

呆気にとられている。

思考が鈍っている。

「嘘ついても駄目ですよ。新谷くんのごことはよく見てましたから」

やっぱりカマをかけたのか！

彼女に俺がアンサラーであるという確信はなかった！

信じられないほどの推理力……。ロツジの一件から俺がアンサラー
かもしれないと導き出したっていいのか？

なぜ先輩が分かったんだ……？

まだ安心はできない。その理由を訊くまでは……。

「不思議そうな顔をしていますね。これ、どうぞ」

彼女が差し出した一通の手紙。

それはどこかで見たようなキスマークのついた手紙だった。

『新谷樹はアンサラーだ。テトラポッド社の調査をしているぞ』

このキスマークは……あの女の差し金か……！

これで謎が解けた。部分的に知っている俺の情報。それは他人によって部分的に与えられたものだからだったのだ。

そして安心できた。

彼女は“敵”ではない。

その事実にはっと胸を撫で下ろす。

「なぜ言ってくれなかったのか、なんて問いませんよ。新谷くんには新谷くんの情報を守る権利があるんですから」

にこりといつもの笑顔に戻る先輩。だがその笑顔には少し黒いものが含まれているように感じられる。

「うっ」

ちくりと俺の胸に言葉が刺さる。

「ええ、そうですね。アンサラーのことを調べて下さいとお願い

した時も平気な顔で『よく分かりませんでした』なんて言うんですものね」

先輩は両手でコップを持つと、お茶をすすりと飲み、ほうと熱い吐息を吐いた。

「うっっ」

く、空気が痛え……！

「新谷くんにとって私たちなんて村人Aと代わりないんですね」

やはりにこにこしたままの先輩。しかし先輩から立ち昇る負のオーラが俺には見えている。

「せ、先輩……も、もう勘弁してください」

「いいえ、駄目です。私の中では目の前に宇宙人や超能力者がいるのと同じ状況なんですよ。興奮しないわけじゃないじゃないですか」

どう見てもそれだけの理由だけではないように見えるが、そこはツッコまないでおこう。さすがにこの状況で藪を突く気にはなれない。

「でもこれをどうして先輩が持つてるんです？」

俺はテトラポッド社のパンフレットをひらひらさせながら最大の疑問だったことを問う。

「私かなぜ日本に戻ってきたのか、忘れちゃいましたか？」

みちる先輩はもう大学を卒業しているんだよな。そして日本に戻ってきたのは確か日本の研究所に就職するために帰って

「まさか……！先輩が就職する予定の研究所って……！」

「はい、そのまさかです。私が所属する研究所はテトラポッド社なんです。今は週末に研修を受けていますが、春休みからは泊り込みで本格的な研修が始まることになっています」

そうか。みちる先輩は遺伝子生命学を学んでいたんだっけか。

世の中ってのは狭いもんだ。こんなところで繋がっているとは。

「質問していいですか？」

「どうぞ。この際です。お答えしますよ」

「どうしてテトラポッド社を調査しているんですか？」

さて、どう話すべきか。

下手に隠さない方がいいか。その方が彼女が危険な場所へ就職しようとしていることが理解できるだろう。

「今、この街では“ヒューマンインター事件”という殺人事件が起きています。俺の仕事はこの事件の全貌を明らかにし、止めさせることです」

「人食い……ですか」

俺の突拍子も無い話を、みちる先輩はすぐに信用した。これは決して俺がいつに無く真剣な表情だったからではなく、互いの愛が深

いからこそ成せたことだろう。

「はい。狙われているのは政府関係者。そしてその殺し方は人間とは思えぬほど残酷な手口なんです」

「事件の名称から想像はつきます」

「この事件を調べているうちにある大企業が動物を遺伝子改良した“キメラ”を創っていることが判明しました。おそらく軍勢力として使用するためだと予想しています」

「それがテトラポッド社なんですね」

俺は無言で頷く。

彼女は少し哀しそうにテトラポッド社のパンフレットを撫でてページを開く。そこには赤線などで言葉がピックアップされていて、彼女がよく読んだ形跡が残っていた。

「ご存知かと思いますが、テトラポッド社は遺伝子治療の研究をしているんです。遺伝子治療は現代で最も画期的な治療法と言えるでしょう。病気は遺伝子の欠陥が体に表れたものです。遺伝子治療はそれを根本から治療することができる。ガンやHIVも治療が可能なんです。これをもっと研究すれば多くの人が救われる」

みちる先輩はパンフレットを持ったまま夕日の見える窓際へと移動した。

「私の母の体はガンに蝕まれています。アメリカの病院で治療を受けてはいますが、発見した時には既に手遅れの状態で、もう余命幾

ばくもないそうです」

先輩の肩が震えている。

「今からでは私が母を救うことは不可能でしょう。でも他の人たちは……母と同じ苦しみを味わっている人たちは救えるかも知れない。ちよつとでもそういつた人たちの哀しみを減らしたかった。だから……私はテトラポッド社の研究所の就職を決意したんです……！」

なのにつ……！」

ぐしゃりと彼女はパンフレットを握り締めた。

今まで自分のことを語らなかつたみちる先輩。

もちろん俺だつて初めて知つたのだ。

彼女がこれだけ遺伝子生命学に対する熱い想いを抱いていたことを。

ぼたぼたとパンフレットに雫が彩る。

「っ……遺伝子の研究を悪用するなんて……！許せない……！」

希望が裏切りに変わったのだ。その哀しみは俺の理解できることではないだろう。

「みちる……先輩……」

俺は静かに彼女を背後から抱きしめようと近寄つた。

と、その時、先輩が天井からぶら下がっていた白い紐をくいと引っ張る。

がつん！

いきなり天井から金色のタライが俺の頭に降ってきた。

え？ ドリフ？ なんで？ どこから？

俺は意味が分からずガラランガラんと転がる金タライと天井を何度も見直す。

そうしている間に先輩はごしごしと目元を拭うと、こちらへ振り返っていつものように微笑んだ。

「さて、ここから本題です」

「なんですか？ アンサーについての質問ならある程度は答えますけど」

「いいえ、それは後ほど詳しく聞かせて貰います。私が貴方に聞きたいのは、私に何かできることはないか、ということですよ」

そこで俺はやっと奴の真意に気づいた。

くっ………そういうことかよ！ あのママ………！ これが狙いか………！

ニヤける赤髪の女の顔が浮かぶ。

俺はぐつと拳を握った。

潜入捜査。その言葉が俺の頭の中に当然浮かぶ。だがそれはあまりにも危険すぎる。一般人である彼女にそんなことをさせるわけにはいかない。

赤髪の女は　　紗枝はこう言っているのだ。

『この女を使いなさい』

くそっ……！　できるかよ、そんなこと……！　だけど

欲しい……！

俺はじっと見つめてくる先輩の視線から顔をそらす。

「潜入捜査……ですね」

「……………」

俺は黙ったままでいた。

「やつぱり。そうですね。当然でしょう。それが私を一番有効に使える手だてですからね。」

急いでいるのでしたら、明日からでも研修に参加することは可能ですよ」

「駄目です。先輩にそんなことさせられません。本格的な研修が始まればそうやすやすと家に帰したりしないでしょうし、学校にも来

れなくなります」

俺は強い意志でもってきつぱりと言いつつ放った。

「内部情報が必要なんですよね？ 研究所で何が行われているか詳しい情報が必要なんですよね？ 上に話せば遺伝子操作の研究に参加できるかも知れません。それに私ならある程度中を歩き回れます。造りを記憶してくることもできますよ」

内部地図。喉から手が出るほど欲しい。どれが最短の進入経路なのか、どこに俺たちの目的のものがあるか分かるかもしれないのだから。そして何より……中で何が行われているのが突き止められるかもしれない。

一気に真相に近づくことができる。

いや、正直に言ってしまえば今のところ先輩に力を借りる以外に方法は無い。ないんだが、それは同時に先輩がとてつもない危険を冒すことになる。

内通していることがバレれば先輩の命はない。間違いなく。

それ以前に遺伝子改良の研究に参加すれば内部情報を知った先輩を簡単に家に帰したりするだろうか。いやない。先輩は研究所に閉じこめられることになる。

結局

「考えさせてください」

俺は断れなかった。

Answer - 3 "アガスターシェ" 其の2 - 1

「やってもらった方がいいに決まってるじゃない」

彼女はインスタントラーメンをすすりながら事も無げにそう答えた。

俺がセーフハウスに帰って、みちる先輩と話したことをエリに伝えると今の答えが返ってきたわけだが。

「だけど……！」

「樹も分かってるはずよ。それが手つとり早く事件解決に繋がる道だってこと。ずるずるずるー」

「分かってる。だから悩んでる」

アンサラーとしての自分を取るか、彼女の恋人としての自分を取るか。

「はあ……樹……。本当はもう決めてるんじゃないの？ 私に相談しても私がどう返すかなんてあんたは分かっていたはずよ」

ピッピとフォークで俺を指すエリ。

「……………」

その言葉に俺は何も答えられない。

「別にあんたが心の無い人間だなんて思わないわよ。あんたの立場ならそうせざるを得ないんだから」

「ごくごくと汁まで飲んで空になったカップを机に置くエリ。」

「とじろでせ」

「なんだよ」

「ラーメン……伸びてるわよ」

言われ俺は未だ手をつけていないカップラーメンを覗いてみる。

そこからは汁気が完全に抜かれて膨張した麺で溢れていた。

「はあ……」

俺は思わずため息を吐くのだった。

放課後、みちる先輩がとことこと帰路を歩いている。

俺は後ろから声をかけた。

「……先輩」

「あら新谷くん。こんばんは。」

学校をズル休みしたら駄目ですよ」

彼女は優しく微笑みかけてくる。

俺が何しにきたか頭の良い彼女なら気づいているはずだ。

だというのに彼女はいつもと変わらぬ優しい笑顔で迎えてくれる。

優しさに甘えてる。

俺は自分の不甲斐無さに唇を噛む。

そして告げた。

「先輩」

「はい」

「お願いします」

俺は深く深く頭を下げた。

すると先輩はふと俺を優しく抱き寄せた。

「任せてください。こんなに可愛い後輩の頼みなんですから」

それでざわついていた心が融解していく。

俺は母の温もりを知らない。

だがなぜかとても懐かしい気がした。

それからしばらくして。

俺とみちる先輩は研究所の門の前にいた。

俺は強く先輩の手を握る。

「先輩、無理はしなくていいですからね。身の危険を感じたら俺を呼びだしてください。すぐに駆けつけます。必ず」

その言葉に先輩は苦笑いを浮かべる。

「もう心配性ですね。大丈夫ですよ。バレるようなへマなんかしません」

「……………」

「そんな顔しないでください」

「すみませんね。生まれつきイケメンなもので」

俺の軽口にくすくすと笑う先輩。

「大好きな先輩が危険なことをするっていうのに、心配するなっていう方が無理ですよ」

「もうっ……。大好きなんて言葉を簡単に言っちゃダメです。本気にしちゃいますよ」

「ええ、どうぞ本気にしちゃって下さい。俺が大好きなのは事実ですから」

俺は騎士のように跪いて、姫様の手の甲にキスをした。

「うふふ。私も新谷くんのが大好きですよ。」

ええ。本当に」

「え？」

急に真剣味を含んだ先輩の声に俺は顔をあげた。

「それじゃ行ってきますね」

するりと先輩の手が放れていく。

瞬間、ざわりと胸騒ぎがする。

行かせてはいけない。

その思いにかられる。

もう二度と先輩とこうして会えなくなる。

そんな予感がよぎる。

俺の嗅覚が告げている。

行かせてはいけない！

「先輩っ！」

なくなった温もりを求めて再度、俺は手を伸ばそうとした。

が、その手が彼女に届くことはなかった。

先輩は微笑んで研究所の中に姿を消した。

Answer - 3” アガスターシエ” 其の2 - 2

爪を噛んで動物園のライオンのように部屋の中を歩き回る俺を目線で追うエリ。

「心配なのは分かるけど、少し落ち着いたら？」

見るに見かねたのか、それともうろつろつされると鬱陶しいのか、エリがホットミルクのカップを持ってくる。

「これが落ち着いてられるかよ」

俺が見向きもせず研究所の方を見ると、エリは少しむすつとした感じではそりと呟いた。

「ふーん。そんなにあの娘が大事なんだ。へえー」

「なんだよ、それ。彼女は一般人なんだぞ！心配するに決まってるだろ！」

「私には一般人だからってだけの心配じゃないように見えるけど？」

エリはこくりとミルクを口に流し込んだ。

「ぐっ」

俺が凶星を突かれたような顔を見るとエリは素っ気なく視線を俺からあらぬ方向へ変える。

「ふーん。ああゆう子がタイプなわけ」

「俺のタイプは橘さんみたいな人だってば」

「はいはい。橘って呼ぶなって言ってるでしょ」

エリが手元にあったクッションをばいっと元気なく俺に放る。

クッションは俺の肩にばふと当たると床に転がった。

「分からないのよね。恋心っていうの？　そういう気持ち。私は生まれた時から生きるために戦ってたもの。恋愛なんてする暇なかったわよ」

昔のことでも思い出しているのか遠い眼をしてカップに口を付けるエリ。

「そりやまた可哀相な境遇だな。恋愛はいいぞ」

「へえー、そう言うってことは。あんたは誰かと付き合った経験があるわけ」

「……………」

俺は黙秘権を発動した。自分に不利になることは答えなくて良いという素晴らしい権利だ。

フッフ……この黙秘権を貫き通せばエリは俺がいかに女性経験がなかったといえどそれを伺い知ることはできないのだ……！

ビヴァ 黙秘権！

「………………。ま、訊くだけ酷だったわね」

あれ！？ なぜかバレてる風味！？

やべえ…………この人もしかして心の中とかマジで読めるんじゃないかな……。人間の脳って未だ未解明な部分が多いし、超能力とかあってもおかしくないよな…………。

待てよ…………。ということは俺にも何かしらの能力があるかも知れないということか…………！！

なので俺は自分に超能力があるかどうか試してみることにした。

真剣な眼差しで真っ向からエリの顔をじっと見つめる。

そしてうむむむと念を送ってみる。

お前はだんだん俺と付き合いたくなーる…………！！ お前はだんだん俺と付き合いたくなーる…………！！

「それじゃあさ」

不意にエリが言葉を発した。

「あ、え？ な、なに？」

念を込めることに必死だった俺は急に話を振られびくりとなる。

「私と付き合ってみる？」

しーん。

俺とエリはしばらく見詰め合う。

ちくたくと時計が時を刻む音だけが空間を支配する。

そして次の瞬間、俺は彼女の言葉を理解した。

じんわりと顔が紅潮して、熱を持つのが分かる。

「マジでい（ ）すか、橘しゃん!？」

言葉を噛んだ上に、声を裏返しながら俺は立ち上がった。

俺が立ち上がった時に膝が当たったらしく丸机が上へと吹っ飛び天井にボゴスと鈍い音をたてて刺さる。

俺は感動のあまりにエリの肩をがしつと掴む。

だが彼女の肩を掴もうと迫った勢いが余りに余りすぎてエリの後ろにあった椅子を薙ぎ倒し、張り替えたての窓ガラスを『ガシヤアアン!』と突き破ってベランダへと二人して倒れ込む。

「つ、つつつつ、付き合いましょう、橘さん!？ ちちちち、誓いのキスをおおお!」

「あんだどんだけ必死なのよ!？」

俺に組みふされたままでなんだか俺の勢いに仰天している橘さん。近づける俺の顔を両手で必死に押し戻そうとしてくる。それに負けじと俺は顔を彼女に近づける。

グギギギギ……！

顔を近づけようとする俺と必死に押し戻す橘さんとの激しい死闘がベランダで勃発していた。

隣に住んでる主婦のおばさんが洗濯物をしまいにきたのか、ベランダの俺たちを見て固まっているがこっちはそれどころじゃない。

「こぶー！ こぶー！」

両手で顔をpushさえられているせいでかなり変顔になって、息がしにくくなっているがそれはささいな問題である。

「うっ……！ 顔が犯罪者になってるわよ、あんた……！ 鼻息荒いって……！」

「んぎぎぎ……！ なぜ……抵抗する……！？ こぶー！」

「んぐぐぐ……！ するに……決まって……るでしょ……！」

そこで俺は気づいた。

そうか……！ 俺の超能力がもう切れたのか！？

バツと橘さんから離れて立ち上がると俺は両手の指をわしゃわしゃ動かしながら何かを発するように彼女に向ける。

そんな俺の様子に薄気味悪いものでも感じたのか『ひっ』と可愛く声をあげるエリさん。

フン、無駄だ……！　どんなに嫌がろうと俺にはこの超能力があるのだから……！

そして俺はカッと眼を見開き超能力を発動した！

「お前はだんだん俺とキスしたくなーるッ……！」

しーん。

「……………」

フと勝ち誇った俺の笑み。

「……………」

ぼかーんとしているエリさん。

「……………」

口をあんぐりと開けている隣のおばちゃん。

エリさんはすくりと立ち上がるとパンパンとスカートのエを落とす仕草をする。

そして不意にその場でぐっとしゃがみ込んだ。俺の視界から彼女の姿が消える。

次の瞬間。

「なあにふざけたこと言ってるのよオオツ！」

エリさんが立ち上がり様に下から上へと綺麗に伸びる右アッパーを繰り出した。

その『タアイガツパアツ！』な光の速度のアッパーが俺のアゴにクリティカルヒットした。

「ゴハツ!？」

俺の体が軽々と宙に舞い、部屋の床に背中を叩きつけられるた。

バ、バカな……！ 俺の超能力が……効かない……!？

と思った刹那。

天井に刺さってた丸机が俺めがけて落ちてくる。

「あんぎゃああああああ!？」

ドガアス!

丸机の足が俺の頬をかすめて床に刺さる。ちょうど俺は丸机の下に潜り込むような形で寝そべっていた。

つぶねえ……! 顔に当たったら即死だぞ……! !

「あのねえ……冗談に決まってるじゃない。あんた、いつつも自分から結婚だのなんだの言うくせに、言われるのは慣れてないのねー」
手ぐしで乱れた髪を整えながら部屋に入ってくる橘さん。

俺は机の下から這い出して立ち上がった。

「ひどい……！ あんまりだわ……！ 私の純粋な心を弄ぶなんて！ 鬼！ 悪魔！ 鬼畜！」

俺は眼をうるうるさせながら両の拳を口元へと持っていた。

「キモい」

無表情で感想を述べる橘さん。

「うわああああああああん！ 橘さんなんか結婚詐欺師にハメられちゃえー！」

俺は涙を振り撒きリビングから出て行くとトイレの中に入り、鍵をかけた。

Answer - 3 "アガスターシェ" 其の3 - 1

『あ、ちよっと！ トイレの中に立て籠もらないですよ！ 行きたかったんだから！』

ドンドンドン！

トイレの扉を叩く音。

だが裏切られ固く閉ざされた俺の心の扉は二度と開くことはないだろう。

「うるさい、黙れ。そのへんでしてこい」

俺はトイレの便座にどかりと座り込み腕組みをして言う。

『無茶言わないですよ！ あんたの方がよっぽど鬼畜じゃないのよ！』

と、その時だった。

トゥルルルルル……！

PCが鳴った。

すぐさま俺は電話に出た。

「はい、こちら緑中央区ライオンマンショントイレ内派出所」

『あら？ これは新谷くんのPCじゃないんですか？』

その声に俺はハツとなった。

「みちる先輩！ 無事ですか！？」

『もうっ、いきなりそんな大きな声出さないで下さい』

困ったような先輩の声。

先輩の声を聞いて俺はほっとした。

『あまり長い間話してられないので簡潔に話しますね。一応、規則でPCの通話を使ってはいけないことになっているので』

「はい。分かりました。今日、どうでしたか？」

『本格的な研修開始初日ということもあり、今日は研究の説明を聞かされました。私はやはり遺伝子治療の発達を目的とした研究部署に配属されるようです』

「そうですか……」

遺伝子操作を行っている部署の情報を集めにくくはなるが、それでいいと俺は安堵した。研究所に潜入させておいて言うのもなんだが、先輩にはできるだけ安全なところで捜査して欲しいのだ。

『後は研究所内を案内してもらったのですが、やはりこの研究所はおかしいです』

「詳しく聞かせてください」

『すみません。私もよく分からないんです。ですが、ある部署から誰かが叫ぶような凄惨な叫び声が聞こえたんです』

「叫び声？」

『はい。研究員の方に尋ねてはみたんですが……知らないほうがいい、と。その部署が』

俺は先輩の言葉を先にとる。

「遺伝子操作の部署なんですね」

『はい』

……………人体実験。

有り得る。だとすれば、MSNで入手したリストの人たち。この街で起きている行方不明事件は

気持ちが重くなる。おそらく遺伝子を操作されて廃人同様にされている可能性がある。動物たちが“キメラ”にされているように。

それが“コード：A計画”か……？

『ちょっと樹！開けてつてば！もう本当にやばいのよ……！限界なの……！』

ドンドンドンドンドンドン！

人がせつかくシリアスな感じになっているというのにうるさい人だ。

「？ 今の声は……もしかして橋さんですか？」

「エ・リ・よ！」

どうやら聞こえたらしく橋さんが扉の向こうから訂正している。

「そういうことですか。ロッジの一件も何かこの事件に関わりがあったのですね」

さすがみちる先輩である。すぐに関係性を導き出したようだ。

「すまない、先輩。経研部を使うような真似をしてしまった」

「いいえ。お二人には私が帰ってからたっぷり質問に答えて貰いますから」

「肝に銘じておきます」と苦笑いを浮かべる。

「今のところはそれぐらいでしょうか。地図はもう少し待ってください。思った以上に広くて……」

「はい、ゆっくりで構いませんから。目をつけられて先輩に危険が及ぶのもまずいですし」

「うふふ、心配してくれてありがとうございます。それじゃあまた連絡しますね」

通話が終わるとふうと息をついた。

と、その時だ。

ダウン！ ダウン！

銃声がした。

見ると扉の取っ手が撃ち抜かれたらりとやる気をなくしていた。

ギギギギギ……。

扉がゆっくりと開くと、はんにゃのような顔をしたエリさんが俺に銃を突きつけて立っていた。

「出なさい」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……！

橘さんから見たこともないほど怒りのオーラが立ち昇り、髪の毛がゆらゆらと揺れている。その彼女の背後に俺はスターでプラチナな薄い人影が見えたような気がした。

Answer - 3 "アガスターシェ" 其の3 - 2

俺は向けられた銃口に思わず両手をあげる。

「おいおい！ 何もそこまでしなくたって」

「うるさい！ いいから早くそこをどきなさい！ 十数える間に出なければ射殺するわ！ 十九八七六五四三……！」

「わー！ 待った、待った！ 数えるの早いつて！ どく！ どくから！」

俺は慌ててトイレから転がり出る。

橘さんは扉を閉めようとして、鍵が壊れたノブを見、こちらへと振り返って銃を再び突きつける。

「リビングに戻ってなさい」

「おいおい、いくら何でも俺だってそれぐらいのデリカシーは」

ダウン！

俺の頬を銃弾が掠める。

「戻ってなさい」

「はい」

俺は素直にリビングに戻って窓ガラスの破片を拾う作業を始めた。

「彼女。うまく潜入できたみたいね」

窓ガラスを拾っていると橘さんがハンカチで手を拭きつつリビング
グへと戻ってきた。

「まあ、もともと研修生として所属する予定の人だったからな。疑
われることはないはずだ」

俺は割れた窓ガラスから研究所を見つめた。

ひゅおおおおお、と冷たい風が吹いていた。

テトラポッド社研究所の人気の無い屋上。

通話を終わると私はPCをポケットへとしまった。

「誰と話していたのかね？」

「!？」

急に声を掛けられて私はびくっと体を震わせて振り返った。

「……貴方たちは……」

そこには二人の男性が立っていた。

一人は同じ部署の堂時という男性だった。

身長は一七 後半。髪型はオールバック。今はその身を白衣に包んでいる。それが堂時という男性だった。

もう一人は見た事もない男性。

身の丈は堂時さんと同じか少し高いぐらい。どこかひよろりとしたか細い印象を受ける人で、銀縁の眼鏡をかけている。この研究員ではないのか、白衣ではなく薄い青のスーツをきつちりと着こなしていた。そしてその脇にはノートパソコンを挟んで持っている。

「内部情報を守るために携帯電話は禁止されているはずですが」

銀縁の男はにこりと笑い私を嗜めるように優しく言った。

ぞくり。

しかし、なぜか私の背中に悪寒が駆け抜ける。

この人……凄く嫌な感じがする……。

ズオオオオオオオオ……！

銀縁眼鏡の男性……。この人はどこか雰囲気異質だった。

まるで人を人と見ていないようなそんな視線。

私の考えをよそに彼はにこにここと笑顔のままだ。

私は平静を装い、すまなそうな顔をした。

「すみません。どうしても家族の声が聞きたくなってしまって」

私のその言葉に彼らは顔を見合わせハハハと笑った。

「……………当然だな。君はまだ若い。家族が恋しくなるのも頷ける話だ」と堂時さん。

その時だ。

屋上の扉が開き、一人の女性がやってきた。

黒いジャケットを羽織った赤髪長髪の女性。とても綺麗な人で、それに加えてどこかカッコ良さみたいなものを感じる。

赤髪の女性はくいつと首で出入り口を指して言った。

「呼んでるわよ」

その言葉に銀縁眼鏡の男性はやれやれと肩をすくめてみせる。

「このことは内密にしておきますよ、禄央高等学園経済研究部所属、川澄みちるサン」

銀縁眼鏡の男性は私の横を通り過ぎる際、そう言って私の肩にポン

と手を置いた。

この人……なんで私の名前……。

私は振り返り、歩いていく彼の背中を見つめる。

そのまま彼は赤髪の女性と一緒に屋上から出て行った。

扉が閉まる直前。

赤髪の女性は私にちらりと視線をやった。

「……………?」

「変な奴らだろう」

不意に堂時さんがそう言った。

「え、あ、いえ……………」

表情に出ていたのか、私はすぐにお茶を濁した。

「彼はどついう方なのですか? この研究員ではなさそうですが

……………」

「……………それは調査かね? 川澄くん」

すつと堂時さんの眼が細くなる。

そんなことを言われ私の額に脂汗が滲む。

「フ、冗談だ。

……さてな。彼らは何でもうちの重要な計画の手助けをしている
「味らしい」

重要な計画？

まさか“コード：A計画”？

「ま、あまり気にするな。今日は早く休むんだな。疲れたろう」

堂時さんもそう言って出入り口へと向かう。

「ええ、有難う御座います。それでは、また」

堂時さんは私の言葉に歩きながら振り返り手をあげて応えると、
そのまま歩いて行った。

………嘘だ。

堂時さんは嘘をついた。

彼はおそらく彼らが何のためにこの研究所にいるのか、どういう
人間たちなのかを知っている。

でなければこんな人気の無い屋上で二人で話しているはずがない。

私はふうと息を吐いた。

「調べ甲斐があるじゃないですか……」

Answer - 3 "アガスターシエ" 其の4 - 1

翌日の夜。

「そうですね。分かりました」

通話を終え、エリがPCをぼいっと放る。

「何かあったのか？」

俺は自宅から持ち込んだ『まじかる きゅくと！きづなちゃん』のフィギュアを手入れしつつ問うた。

「政治家がやられたわ。今回は三人いつきに」

「一晩で三人を消したのか!？」

俺は驚きのあまり掃除していたきづなちゃんのフィギュアを机から落としてしまう。

『マジカルマジカル きゅくと解決!』

落とした反動でフィギュアが喋りだしたがそれはそれ。このフィギュアは中に機器が埋め込まれており、振動に反応して喋るのである。

「みたいね。手口も同じ。“ヒューマンインター事件”の同一犯とみて間違いないわ。

ただ一つ違うのは「

「？ 違うのは？」と俺は話の先を促した。

「犯人が警備員に姿を見せていることよ」「

「なっ!？」

姿を……見せた……!？

『きづなちゃんにきゅ〜っとお任せ』

落としたことで壊れてしまったのかきづなちゃんフィギュアが勝手に喋りだしているが放っておこう。

しかし信じられない。今の今まで何の感情も無くただただ人を殺し、余韻も残さなかった犯人が……。

『マジカルマジカル きゅ〜っと解け』

「うるさい」

ボキッ!

エリがきづなちゃんの頭をもぎ取った。

「ぎゃああああああ! 喋るきづなちゃんフィギュアがああああああ!」

「そのおかげで今回は病死や突然死って方法はとれず、情報規制も

できなかったみたい。現在、ニュースで流れているそうよ。殺人事件として」

きづなちゃんの頭をぼいっと放って何事もなかったように話を続ける橘さん。

『もう許さナインだザザから！ きゅ〜っと退治してザザあゲル』

床に転がった頭がタイミング良く呪いの言葉を発していた。もうこりゃホラーの領域だぞ。

エリがテレビをつけると、まさにその事件をニュースで取り上げているところだった。

慌しくキャスターに原稿が渡され、ニュースが読み上げられる。

『い、今入ったニュースです！ 今日、夜七時頃、政府役員である沼日原久宗、経済産業大臣政務官宅へ何者かが侵入し殺害したとの急報が入りました……！ 続いて同七時半に安全保障理事、巳人崎克栄衆議院議員が、同八時に蓮古里直唯防衛事務次官が殺害された模様です……！ 国家政府に恨みを持つ者の犯行である可能性が高いと見られ、警視庁は『非常に狡猾で残忍な手口』と事件の解決と究明を急いでいます……！ どうやら目撃者と中継が繋がっているようです……！』

「犯人を見たって警備員か」

俺はテレビの前に椅子を持ってきて、どかっと座り、テレビの音量を上げた。

テレビに警備員のおっちゃん映される。

『物音がしたんですよ。それで見に行ったら彼はもう……。そして振り返ったらいたんですよ』

『犯人ですか？』とマイクを持った女性が彼に問う。

『あ、ああ、そうに違いない』

『犯人はどんな格好をしていたんでしょうか？』

『女だった。髪の毛長い女。黒いコートを着て、緑の瞳をしていた』

黒いコートに……。緑の……。瞳……。

俺の脳裏にとある女性の姿が浮かぶ。

樹……。あなたを自由にさせてあげる。

……。まさか……。な……。

ガシャン！

背後で何かが割れる音がする。

振り返るとエリがカップを落としたりしく床で粉々になっていた。

「黒いコート……。緑の瞳の……。女……」

エリはそう震える声で呟いた。

Answer - 3 "アガスターシエ" 其の4 - 2

「あん？ なんだ？ 心当たりでもあるのか？」

俺の視線に気づくとエリはハツとして顔を伏せる。

「……………。……いえ」

小さくそう答えるとエリはカップを拾った。

「あんたこそ、心当たりは？ 知り合いのアンサーとかどうなの？」

「ところがどっこい思い当たる人ならいるんだよな。だけど彼女はもう…………死んでる」

「…………ええ、そうよ。そうよね。死んでちゃ人も殺せないわよね」

そうだ。彼女は “クイーン” は既に死んでいる。

だっていうのに、この不安はなんだ。

何かが引っかかる。

何かを見落としているのか？

「にしても、いよいよやつこさん方が本気で政府を潰しにきたか。経済産業大臣政務官、安全保障理事、防衛事務次官……。そうそう

たる顔ぶれだな」

「でも理由が分からないわね。なぜ政府側であるテトラポッド社が政治家を狙うのよ」

「消された政治家に共通点は？」

「それが全然。何か目的があって消しているのは確かだと思うんだけど」

「ま、流石にここまでやっというて愉快犯じゃ面白くない冗談だな」

と、その時だ。

ピンポーン！

インターホンが来客を告げる。

『！？』

有り得ないことに俺とエリは顔を見合わせた。

このセーフハウスのことを知っている人物は限られている。

しかし俺たち、いやエリに関してはロッジの一件でテトラポッド社から狙われているはずだ。

つまり、ここを突き止めたテトラポッド社が襲撃にきてもおかしくはないわけで。

同時に銃を取り出し、机をバンと倒してバリケードにする。

俺とエリはリビングから玄関へと続くドアを挟んで壁を背にした。

どくん、どくんと静かに緊張の鼓動をしめす心臓。

一体、誰が来たっていうんだ……。

不意にエリがくいくいと指で指示を送ってくる。

俺に行けってか……。

俺は肩をすくめて言った。

「レディファーストだ」

するとエリは『はあ』とため息を吐いた。

そして次の瞬間。

俺がドアを静かに開けると同時にエリが無音で玄関近くにある風呂場に続く廊下へと移動する。

ピンポーン、ピンポーン！

再びチャイムが鳴った。

エリが忍び足で扉に近づき、外を確認する。

そしてふうつと安心したように息を吐いた。

俺の方に振り返ると彼女は銃を腰になおして言った。

「お友達よ」

エリが扉を開けると、そこにはツバキさんの姿があった。

ツバキさんは持っていたコンビニの袋を掲げる。

「ほれ差し入れだぞ。今回は私もちゃんとナビゲーターとしての役割をせねばならんだろう」

「ツバキたん！ 気がきくじゃないか！ っと、ありゃ？」

俺とエリはツバキたん以外のもう一人の人物に気づく。

そうだ。ツバキたん以外にそこには驚くほど綺麗な女性が立っていたのだ。

「シズル！ なんでここに！？」

誰だ？ エリの知り合いみたいだが。

「私もツバキ先輩と一緒に。協力するわ。相手はテトラポッド社…
…二人だけじゃ一筋縄ではいかないわよ」

『ツバキ……先輩？』

俺とエリはツバキさんに眼をやった。

「？ なんだ？」ときよとんとしているツバキ先輩。

「ツバキ先輩は私の師よ。彼女はサーチャーだったのよ。六年も前の話だけれどね」

「はあ！？ 六年って！？ ツバキたん今、何歳なんだよ！？」

「れでーに年齢を訊くとは失礼な。少なくとも私はお前より年上だ。見れば分かると思っていたが？」

分かるわけねーだろ、というツッコミは入れないでおこう。今回の件でツバキたんの助力は必須だ。

「立ち話もなんだし、中に入って」とエリが二人を中へ促した。

Answer - 3 "アガスターシェ" 其の5 - 1

俺は二人の飲み物を用意してリビングへと持ってくる。

「ツバキたんはコーヒーだよな」

「うむ。すまん」

小さな両手でしっかりとコーヒーカップを掴むツバキたん（年齢不詳）。

ふーふーとコーヒーを冷ますべく息を吹きかけている様はどう見ても幼女にしか見えないが……。

「はい、どうぞ。おねーさま」

「あら、ありがとう。」

改めまして。私は春先シズル。エリのサーチャーをしているわ」

彼女は俺からグラスを受け取り、俺と握手を交わす。

「シズルさんね。俺は」

「新谷樹くんですよ。エリから話は訊いているわ」

くすりと笑うシズルさん。

「そりゃさぞかし俺の英雄譚を聞いていることでしょうな」

俺は肩をすくめてみせて、真向かいの椅子に座った。

「フフ。聞いた通り面白い子ね」

「ちょっと、シズル。あんまりそういうこと言つと調子乗るわよ、そいつ。」

「……てゆーか、私の分は？」

橘さんの問いを無視して俺はシズルさんへと流すように視線を向ける。

「ちなみに、ドリンクは貴女の雰囲気都合ブラッドスクリーユにしてみました。アルコールは抜いてるけどね」

「ありがとう。とてもおいしいわ。気がきく男の子は好きよ」

「ああ、俺もシズルのことが好きだよ」と俺は彼女の手を両手で優しく握る。

「あら」と視線を上げるシズルさん。

見詰め合う俺と彼女。

「ちょっと、樹！ シズルに手をださないでよ！」

いきなり俺の顔に掴みかかってくる橘さん。

「わっぷ！ や、やめろ！ お前も後で構ってやるから！」

「どうやら他の女に手を出したのが橘さんは気に入らないらしい。ははは、意外に嫉妬深かったんだな、橘さん。」

「いいじゃない、エリ。可愛い顔してるし私は素敵な人だと思うけど」

「はあ！？ はあ！？ はあ！？ いやいやいや、絶対シズルおかしうって！」

エリは手をぶんぶか振って驚いていた。

なんとかシズルさんを改心させようときゃーきゃーわめくエリと、何でもない風にエリの話聞くシズルさん。

この二人、仲良いんだな……。

と微笑ましく二人を見ていると、

「お前、学校はよいのか？」

ツバキたんがこくこくとコーヒを飲みつつ俺に問うた。

「その学校の先輩が潜入捜査してくれてるんだ。それなのにのうと俺が登校するなんてできないっしょ」

「潜入捜査だと？ よくよくそんなことをできる人物が学校などにいたものだ……。無事だとよいがな」

とその時、ポケットでPCが震えだした。モニターを見て見ると

相手はみちる先輩からだ。

「噂をすれば影。先輩だ」

Answer - 3 "アガスターシェ" 其の5 - 2

俺は広域会話モードにして電話をとり、机の上に置いた。広域会話モードとは文字通り、広く音を拾うモードのことである。その分、雑音は多く入ってしまうが、多人数で話す時には便利なのだ。

「もしもし。先輩、無事ですか？」

『はい。問題なくやっています。』

例によって見つかるはずなので早速、本題に入りますね』

「はい、お願いします」

『だいぶ研究所の造りが分かってきましたよ。今、地図を送ります』
地図を受信したらしく、PCが自動で平面状の地図をホログラムで表示する。

「へえ。良い地図ね。分かりやすいわ」

シズルさんが平面状の地図を見て感想を漏らす。

「うむ、これは良い。カメラの角度やセキュリティシステムの詳細も書かれてある」

同じくツバキは椅子の上に乗りながら机の地図に感嘆する。

『あら、今のは？』

先輩の問いにシズルさんはツバキを見た。

「あー、コホン。初めましてになるな。私はツバキだ。樹のナビゲーター……アンサラーの情報処理役とでも言った方が分かりやすいか。そしてさっきのがシズルだ」

「春先シズルよ。よろしく。貴女の勇氣には敬意を表するわ」

『初めましてツバキさん、シズルさん。頼りにしています』

「うむ。任せてくれ。できる限りのサポートは行う。まずはこの地図を立体にするか」と受け取った地図を3Dデータへと作り変え始めるツバキたん。

『今日の情報……といってもその地図くらいですが、少し訊きたいことがあるんですが、いいですか？』

「はい。なんですか？」

『“コード：A計画”を手助けしている人たちがいるようなのですが、詳細を知りませんか？ 昨日、その人たちと話す機会がありました』

「NKのことね……」

エリの言葉に俺も頷く。

「みちる先輩。そいつらには絶対に近寄らないで下さい。非常に危険な連中です」

「Nobody Knowsと呼ばれる殺人者集団よ。アンサラーたちでも敵わないほどの強者揃いだから気をつけて」

『そう……だったのですか。分かりました。彼らには近寄らないことにします』

彼……？

紗枝や葉月がこの件に関わっているのは確かだが、他にも関わっているNKメンバーがいるのか……？

「先輩。その彼ってどんな奴でした？」

『どんな……そうですね……。眼鏡をかけた男性でした。ノートパソコンを持ち歩いてましたけど……』

“データバンク”か。

NKですべての情報を統括している人物だ。ハッキング技術に秀でた人物で、NKのナビゲーターやサーチャーのような存在だった。

奴本人にNK並の戦闘力はないとはいえアンサラー程度の実力は持っている。だがネットワークを介した戦いならば彼の右に出る者は存在しないだろう。

「有難うございます、先輩。急がなくていいですからね？ くれぐれも慎重にやって下さい」

『ええ。分かっています。それじゃあ、失礼しますね』

俺は先輩と通話を切り、PCを操作してツバキのパソコンとコードを繋げる。

するとそこにツバキがみちる先輩の地図を元に造っている立体地図がホログラムになって浮き上がる。

まだ製作途中なので全部は分からないが

「……………。ガチガチだな」

俺は地図を見て素直な感想を漏らした。

「当たり前だろう。企業の未来を担う研究が行われているのだから。情報を守るために硬くもなる」とキーボードを操りながらツバキが言う。

「門には見張りだけじゃなくセキュリティレーザー、中にはセキュリティロボットがうろつろ……ね」とエリ。

「中に入るにはセキュリティシステムを一時的にでもダウンさせないといけないわね」とシズル。

セキュリティシステムとは許可が出てるPCを所持していない人間を襲うロボットやレーザーのことである。熱探知で見張られているので厄介なシステムだ。

各所の通路に設置されている閉門を通った時、許可のPCを持っていなければレーザーで瞬時に黒こげである。

シズルさんの言葉を受け、俺はツバキの方を見た。

ツバキさんは俺の視線に気づくとやれやれと腕を組んだ。

「樹……。分かっているのか。日本屈指の大企業のセキュリティをダウンさせるなどそうそうはできませんぞ。昼間なら外壁のシステムは起動していない。侵入するなら昼間ということだ」

「でも昼間だと警備員がわらわらいるし、研究員もいっぱい情報なんて盗むのは難しいじゃん？ それに、ツバキたんならなんとか

「できるんでしょう？」

「あのな、樹。まずシステムに侵入した時点で確実にバレる。次に自動で逆探知され私たちの位置が突き止められる。その五分後にはココは制圧されているぞ。」

システムをダウンできずに私たちが殺されるのは眼に見えしてる」

「先輩」

シズルさんが眼を閉じたままツバキを嗜めるように呼ぶ。

それにツバキは頭を振って応えた。

「はあ……やれやれ。ああ、可能だ。私とシズルならな」

「そこなくっちゃ」

俺はツバキさんの頭を撫で回そうと手を伸ばした、が。

「がぶっ！」

「あぎゃっ！」

噛みつかれた。

「どれだけブラフやデコイを撒き散らしてミスリードしてもここを突き止めるのに長くて三分。ここにくるまで五分。八分以内にシステムをダウンさせてここを出ないと、ね」

シズルさんが冷静に時間を計算する。

「システムをダウンしてもおそらく再稼働するだろうからな。チャンスは一度だ。二度目はない。夜中は逆に内部のセキュリティはほぼ作動していないようだから、外壁のセキュリティさえなんとかすれば研究所内探索は可能だろう」

「ねえねえ。別にここからシステムに侵入しなくてもいいんじゃないの？ もつと研究所から遠い場所からすれば逃げる時間も多くなるんじゃない？ これグッドアイデアでしょ？」

エリのもつともな発言にツバキとシズルさんはため息を吐くばかりだ。

「どこであろうとほとんど変わらないわよ。相手は空から来るんだから。この街にテトラポッド社の息がかかった施設・企業がどれだけあると思っているのよ」

「……さいですか」

少しシヨボーンとするエリ。

「おー、よしよし。俺たちには分からないことだよな。システムに侵入するのも機械任せだもんな」

「樹に慰められると余計に哀しくなってくるわ……」

俺に頭を撫でられながらエリは顔を手の平で覆った。

失礼な……。

ツバキは顎に手を添えたまま室内をてくてくと歩き回る。

「八分か。となるとやはり問題はシステムに侵入してダウンさせるまでにどれだけの時間がかかるかな。」

どこからシステムに侵入するにしても部屋から出て逃げるのに三分。五分以内にシステムをダウンか……」

「難しいですね。」

テトラポッド社のセキュリティは何だったかしら」

手持ちパソコンを開けてカタカタと調べ始めるシズルさん。

「大方、『スパゲッティ』のテトラポッド仕様だろう。ここへ来る時に前を通ったが赤外線センサーがMQ-32Gだった」

「だとしたら普通にやって五分じゃ無理ですね。一分はかかるかと……。」

あら、さすがツバキ先輩。セキュリティは『スパゲッティ』ですよ。解析はRCを使うべきかしら」

「いや赤猫じゃ間に合わんな。やれやれ。自作するしかないか」

「今日から徹夜ですね」とツバキに苦笑するシズルさん。

なんだか理解できないが話は纏まったらしい。

「結局、システムをダウンできるのか？」

「できるといふ仮定で話を進めてくれていいぞ。私とシズルでなんとかしよう」

「ていうか……あんたやっぱり中に入るつもりだったのね」と呆れたようなエリ。

「当たり前だろ。何から何まで先輩にやらせられるかよ。証拠は俺たちで取らないとな」

そう言って俺は研究所へと視線を向けた。

「樹」

門を望遠鏡で見ていたエリから声がかかる。

「ん？」

「桜咲さんが来たわよ」

「！」

俺は慌てて望遠鏡を覗き込んだ。

「研究所の博士の娘か！」

ツバキも窓から門を眺める。

そこには警備員に中へ案内される菊の姿があった。

おそらく菊は親父さんに会いにきたのだろう。

無事に出てきてくれるといいが。

しかし

「遅いな」

チクタクと秒を刻む部屋の掛け時計に眼をやる。

既に菊が研究所に入ってから三時間が経過していた。

「さすがにこれはおかしいわね。何かあったと考えるのが妥当かしら。例えば、聞いてはいけないことを聞いてしまった。見てはいけないものを見てしまった」

「くそ……!」

すぐさま俺は懷に忍ばせていた銃の弾丸を確認して立ち上がった。

「どこに行く気よ!?!」

すぐさまエリが俺の前に両手を広げて立ち塞がる。

「決まってるんだろ」

「落ち着きなさいよ! あんたが行ったら余計に刺激させるだけじゃないの!」

「どげよ」

俺はちゃきりと銃を抜いた。

「いやよ」

それでも立ちふさがるエリ。

「お願いだから冷静になって! あんたが捕まったらもうこの任務は遂行できないのよ! 分かってるでしょ!?!」

シズルが後ろから俺の肩に手をかける。

「そうよ、樹くん。大丈夫。殺されることはないはずよ。桜咲博士が研究に協力している限りは」

「ちつくしよお!!」

俺は銃を床に投げつけて、椅子に座った。

そんな激昂する俺をシズルさんは静かに見つめていた。

その日の深夜。窓から研究所を監視していると、シズルさんが俺にカップを持ってきた。

「ミルクティよ」

「ああ、すまない」

口をつけると暖かくシナモンの風味が口を満たす。

「今日はすまなかった。止められてなきや俺も捕まってた」

「いいわ。気持ちは分かるつもりよ。感謝してるならその恩を任務

成功って形で返して欲しいわね」

「努力する」

「やろうとしたことは確かに愚かね。だけど他人のことでそこまで必死になれることには素直に好感が持てるもの」

「へ？」

くすりと笑うシズルさん。

そして寝袋ですーすーと静かに眠っているエリを優しく見つめる。

「あの子、今回の件で変わったわ」

「エリが？」と俺も彼女を見た。

「そう。どう言えばいいのか分からないけれど……よく喋るようになった、かしら。」

だから、ありがとう」

「別に礼を言われることをした覚えは……」

シズルさんは頬杖つくつと窓の外に視線を外した。

「あの子は元々、貧民街の出身なのよ。父親の顔も、母親の顔も知らない。ガーディアンになる前は盗みや殺しを働いて生きてきたぞうよ」

「そう……だったのか……」

俺はエリに視線をやった。

やはりこいつも苦勞をしたようだ。それもそうか。普通に生きていてガーディアンになれるはずもない。みな、何らかのいわくや過去を背負っているのだ。

「一六の時、エリは殺しの仕事で国防長官の命を狙ったわ。といっても当時は長官ではなかったのだけれど」

は？

思わず眼が点になる。

「……………マジで？」

Answer - 3 "アガスターシェ" 其の6 - 2

「ええ、本当。でも結果は失敗。当然、国家反逆罪で処刑……のはずだったんだけど、長官は彼女を養子にしたのよ」

「はは、あの人らしいな」

俺の時もあの人はそうだったのだ。

今でも憶えている。

どこまでも続く一本道を車で走りながら彼は生意気なガキに言ったのだ。

『ワインは好きか?』

三年前を思い出して俺はフと笑う。

「和雅はそういう男だ。今の現代には珍しい情に厚い奴だ」

ツバキたんがキーボードの上に指を走らせながら言った。

「あ、そっか。ツバキたんも和雅さんと知り合いになるんだっけ」

NKを抜けた後、和雅さんが俺をアンサラーに推薦してくれたのだ。その時に紹介したナビゲーターがツバキだったんだもんな。おそらくツバキたんはサーチャーだった時に和雅さんと交流があったのだろう。

「桜咲博士の娘さんのことも心配だし、いよいよ時間がなくなってきたわね」

シズルさんの言葉に俺は大きく頷く。

「ああ。早く計画を固めよう」

おかしいわ。

私は深く思考していた。

みちる先輩も菊もあの馬鹿もここずっと学校に来てない……。

最初はその馬鹿。次に先輩、そして昨日から菊が……。

PCの連絡に誰も応じない。

絶対に変だ。

私は確信していた。

何かが起こっているのだと。

だとしたらきっかは何だろう？

頭によぎるのはロツジでの件。謎の全焼事件だ。おかしくなったのはあれ以降……。

いいえ、あの時には既に何かが始まっていた？

分からない。

私はくしゃくしゃと頭を搔いてため息をついた。

先生に尋ねたところ、新谷は家族旅行、先輩は研究所の研修が早まって、菊は無断欠席であるらしい。

私の結論から言って信じられない。

まずあの馬鹿が家族旅行というのが……もっとマシな口実を考えられなかったのだろうか。

第一に！ あんた家族いないじゃないのよ！　なんでそんなことにも先生は気づかないわけ！？

まあ、おそらく新谷と関わりたくないから追求してないだけなのだろうが。

みちる先輩もみちる先輩だ。ついこの間までは春休みまでは暇だと言っていたのに。いきなり何の前触れも無く、一言も残さずに研究所の研修を開始するなんて……。

何か理由があったとしか……。

そして最後に菊。

一番おかしいのは彼女だ。

あの子が無断で欠席するなんて……。

理由を用意しているあたり、新谷は自分から何かに関わっている？
みちる先輩はどうなの何かに関わっているの？ それとも本当に
研修が早まっただけなの？

分からない。

それに、と私は今日、秋原廉人と話したことを思いだす。

『秋原……あんた、本当に何も知らないの！？ おかしいと思わな
いわけ！？ 経研部の仲間が三人も急に消えたのよ！？』

『……水崎さん』

『なによ？』

『知らない方が良くない事もあるんだよ。あんまり嗅ぎ回ると』

彼は指を銃の形にして私の頭に突きつけた。

『バンッ！』

びくっ！

いきなりの大声に私はびくつきりして肩を震わせた。

『消されちゃうかもしれないよ？ アンサーに……』

ぞくつ！

背筋が凍りつく。

『それにね。俺は元から仲間じゃないんだよ』

『仲間……じゃない……？』

『気づいてた？ みんな、名前に植物かそれに関わるものの名前が入ってるんだよね。』

樹、川、菊、水……。

だけど、俺に入ってるのは“秋”

樹が枯れる季節々。

ゴゴゴゴゴゴゴ……！

明らかに異質な空気が秋原から発せられる。

ぐりぐりと鉛筆で乱雑に塗りたくったように闇色の瞳。

コイツは……！

あの瞳。あんな眼、今まで見たことが無い。

秋原は何かを知っている。

間違いなく。

菊に何が起こったか？ 新谷が今何をしているか？ 先輩が急遽予定を早めた理由？ 全部でなくとも何か一つは……。

どちらにしてもあの様子では私には教えてくれないだろう。

理由は、おそらく秋原自身もその件に一噛みしているから……。

「私だけ除け者ってわけ!？」

思わず私は言葉に出してしまう。

調べて突き止めてあげるわ……! !

「私だって経研部の一人なんだから!」

私の頭はこれまでにないほど回転していた。

まずは菊ね。一番巻き込まれた確率が高い彼女。

不測の事態なら何か手がかりや綻びが見つかるかもしれないわ。

そして私には心当たりがあった。

『最近、お父さんの様子が変で……。明日にでも研究所に様子を見に行ってみようと思うんです』

そう言い残して彼女は消えた。研究所で何かあったと思うほうが自然。

菊のお父さんは確か……遺伝子生命学の研究所勤め。

だから私は今、桜咲博士が所属しているMSNの研究所に来ている。
のだが

「ヘッドハント……ですか？」

「ああ、そうだよ。桜咲博士はつい最近、ある企業に引き抜かれちゃってねー。うちってそこと関係が深いから断るわけにも行かなかつたんじゃないかな」

「本当ですか!？」

「ああ、本当だとも。でも何か様子が変だったな。大企業に移れるっていうのに顔を真っ青にしてさ。まるで何かに怯えているような……仕方なく移るような様子だったなあ」

研究員は視線を上にしてその時のことを思い出すように言った。

「教えてください！ どこですか!？」

「えーっと、キミ。個人情報保護法って知ってるよね？ おじさんが勝手に教えるわけにはいかないんだよ」

……っ！ 無力だ……情報さえも手に入れるのがこんなに難しいなんて！

「友達の命がかかってるんです」

私は声を震わせながらそう言葉を紡いだ。

「は?」

「桜咲博士の娘……菊が、彼女は行方不明なんです……お願いします……!」

教えてください……!」

私は深く頭を下げた。

これしかない……私には……!」

「お願いします!！」

「ちょっとキミ! こんなところで頭を下げられても困るよ!」と周りを見回しながら研究員は小声で私を止める。

「教えてくれるまで私はここを動きません!」

じつと彼の眼を見据える。

するとぐつと少し彼は身を引いてみせた。

「分かった! 負けたよ!」

彼はパソコンをカタカタと操作し始める。

「頼むから悪用なんかしないでくれよ。一応、内密になってるんだから」

「あ、有難うございます! それで菊のお父さんはどこに!？」

私はカウンターに体を乗りだした。

「えーっと、桜咲……照光。ああ、やっぱりそうだね。テトラポッド社だ」

テトラポッド社。国家側の大企業だ。かつての政府権力を取り戻すために政府に尽くしている大企業。その遺伝子の研究には世界中が注目をしている。先天的なガンも治療できるようになるらしい。この治療法が完成すればノーベル賞は間違いないだろう。

これだけ聞くと何もおかしい部分が見当たらない。むしろ好感が持てる企業だ。

だというのに桜咲博士は何に怯えていたというの？

とその時だった。

私の頭に雷が落ちたような衝撃が走る。

遺伝子……生命学……？

たしか、みちる先輩は遺伝子生命学を専攻していて研究所に就職するために日本に戻ってきた。

そして今はその企業で研修を受けているはずである。

何かが繋がりにかけている。

果たしてどこの企業だったか……確か部室でみちる先輩がパンフレットを読んでいたのを見たことが

私は弾かれたように走りだした。

目指すのはもちろん経研部の部室！

まだあのパンフレットがあるかも知れない！

どん！

私は力任せに経研部の扉を開け放った。

「はあはあはあ……」

どこ!?!? どこにあるの!?!?

私は棚を引っくり返して目当てのものを探し始める。

そして見つけた。

私の捜し求めた物は意外なところにあった。

まるで怒りをぶつけるかのようにくしゃくしゃに丸められて、ゴミ箱に入っていたのだ。

その冊子を恐る恐る開ける。

やっぱり……!!

「テトラ……ポッド社……!!!」

Answer - 3 "アガスターシエ" 其の7 - 1

やはり、関わりがあった！

菊の失踪、みちる先輩が研修を早めたことは関連性があったんだ！

菊のお父さんは遺伝子生命学を専攻していたという。テトラポッド社といえば遺伝子生命学の最先端をいく日本の未来、いや人類の未来を背負った大企業。異なことに先輩もまた遺伝子生命学を専攻していて、テトラポッド社の研究所で研修を受けている。

何か一つに繋がりにかけている。

でもまだピースは足りていないし、穴ぼこだらけの推論であることは理解している。それでも私は確信に近い思いがあった。

この穴の空いたピース。

そのピースこそあのバカ 新谷樹なのだ。

なのだが……これが分からない。

なぜあいつまで一緒にいなくなる必要があったの？

どこにも関係性が無いように思える。

私は部室の席に座り、深く思考する。

何かを見落としているの？

普段の彼を思い返す。

『隠さなくても俺はちゃんと理解してるからな、水崎！俺もお前のことを愛してる！』

いつもへらへらと笑い、ひょうひょうとした態度の新谷。

『何してるツンデレ。早く脱げよ。それとも1ターン目でリタイアですかあ〜〜？』

そんな彼にどこもおかしい所なんて

『実は俺、アンサーなんだ』

「!?!」

ガタツ!

私は思わず立ち上がった。

「あ、あ……!」

驚きのあまり声が出ない。

そんな……まさか……! 嘘でしょ!?

だけど、もしそうなら話は繋がらないだろうか!?

本当だったって言うの!?

どう考えても繋がるはずの無い新谷。関わる理由があるとするればこれしか無い……！

MSNに賊が侵入した事件も

『たぶんその時間はアニメ見てた。ちなみに『マジカル きゅくと！きづなちゃん』な』

MSNはテトラポッド社の傘下企業！ テトラポッド社へと繋がる布石！ あの時から既にあいつは何かを探して動いていた！？

怒りが沸々と湧き上がってくる。

アンサラーの存在を否定していたのは自分がそうだから……！
いないと思われていた方が仕事がやりやすいから……！！？

気がつくとは私はPCを取り出し、コールをしていた。

あの大嘘つき……！

もちろん相手は決まっている。

『おかけになったイケメンは現在デート中です。発信音の後にデートの予約を行ってください。ピーー！』

私はすうーつと息を吸い込むと、PCに向かってありったけの気持ちはぶつけた。

「こおんのっバカッ！！ あんたアンサラーなんでしょ！ よっく

も今まで騙してたわね！ 菊がテトラポッド社で何があつたか教えなさい！ 聞いてる！？ 聞いてるんでしょ！？ 電話に出なさいよー！」

Answer - 3 "アガスターシェ" 其の7 - 2

『ぎゃーぎゃー!』

俺はPCを見つめたまま固まっていた。

額から脂汗がたらたらと流れ落ちる。

「へえ、やるじゃない彼女。一人で調べたのかしら」

エリは俺のPCを見て肩をすくめる。

「あっちゃー。まさか、ここまで水崎が鋭いとは……」

俺は頭を抱える。

「ふむ。そやつ、ナビゲーターとしての素質があるかもしれんな」とツバキが無責任なことを言っている。

「おいおい、冗談だろ。水崎がナビゲーターなんてやったら死人が出るっての」

「で、どうするのよ、彼女」

ぴっぴと俺のPCを指差して問うエリ。

「どろいって言うんだよ。そうです俺はアンサーです。何かお困りですか、とでも訊いてみるか?」

「きつと桜咲さんの奪還を依頼されるわね」

ニヤリと笑って言うエリのその言葉にくすくすと口元を隠して笑うシズルさん。

「うるへーよ。とにかく今は無視するしかない。どちらにしろ水崎一人じゃ何もできやしないさ」

そうだ。俺たちに関わらないのが一番安全でいる方法だからな。

みんな首を突っ込みたがる奴らだからな……。だからアンサラーなんていないって言ってやってたっつーのに……。あのバカ……！

カツカツカツ。

翌日、私はある場所へ向かって歩いていった。

あれ以降、新谷からの連絡は無い。

あの馬鹿のことだ。どうせ私一人じゃ何もできないとでも思っているんでしょっね。

いいわよ。やってやるっじゃない。

私一人で菊を助けだすんだから。

カッツ。

そして私は門の前に立った。

テトラポッド研究所。

そう書かれた門の前に。

「すみません」

私は門前に立っている警備員に笑顔で話しかけた。

「見学がしたいんですけど」

「ああ、悪いね。ここは関係者以外立ち入り禁止なんだ。見学できないんだよ」

そんなことはよく分かっている。今のは会話のジャブにすぎない。本題はここから。

「桜咲博士はここにいますか？」

「面会かい？ 連絡は？」

「あ、いえアポは取ってないんですけど」

「それじゃあダメだよ」

「じゃあ」と私はニヤリと意地悪く笑う。

「桜咲博士の娘さんが面会に来ませんでしたか？」

警備員の表情が柔らかいものから厳しいものに変わる。

「さあ。私はここの警備をしているだけだからね」

「行方不明になっているんですよ、彼女。ここにいるんじゃないですか？ 桜咲菊は」

「何言ってるんだ君は！ 帰りたまえ！」

私はちつと舌打ちをするとそそくさとその場を離れる。

あの反応。やっぱりだ。菊はここにきてるのは確かだね。

「諦めたみたいね」

「そりゃそうだろう。俺たちでさえどうやって警備の穴を突こうか悩んでるのに、水崎に抜かれるわきゃーねーって」

「それもそうね」

エリはミルクティに口をつけると再び望遠レンズを覗いた。

「ぶふうふうふう!?」

といきなり盛大に口に含んだものを吹き出してしまつう。

「うぎゃあ! きたねえぞ、橘さん!」

「あの子! あんなところで何してるわけ!? ま、まさか……あの子……! 中に入る気!? バレたらただじゃすまないわよ……!」

エリは慌てて武装を掴む。

「お、おい! どこ行くんだ!」

「中に入る前に止めるのよ! 見てみなさい!」

エリはそう叫んで俺に電子望遠鏡を投げてよこすとセーフハウスを飛び出した。

俺は疑問に思いながらも言われた通り望遠鏡を覗いてみる。

そして絶句した。

レンズから見えたのは水崎が鞆から鉤爪つきロープをとりだして、壁に投げている姿だった。

だがうまく鉤爪がひっかからないのか何度も何度も投げている。

「あのバカ……！　なんてアナクロな潜入方法を選んだんだ……！」
言った後で俺はツツコんでくれる相手がないことに気づいた。

パソコンに向かっていているツバキさんに視線をやってみると、

「？　なんだ？」

視線に気づいたツバキさんは不思議そうに俺を見ていた。

そしてツバキさんは自分の手に持っていたチヨコ棒に視線をやる
と、再び俺を見て言った。

「これはやらんぞ」

「……………」

Answer - 3 "アガスターシェ" 其の8 - 1

ガキン！

鉤爪がかかる音がした。ぐいぐいとロープを引っ張ってみるといい手応えを感じる。

どうやらちゃんと引っかかったようだ。

「よし」

私は意を決して壁を登り始めた。

ふふふ。なんだかアンサーになった気分ね。

私は門番の死角になった壁を昇っていく。

昇りきった後で私はその高さに気づいた。

しまった。降りることを考えてなかった。どう見ても二メートルはある。

つて、高っ！？ こんな飛び降りれないじゃない！

これでは木の枝に登ったまま動けない猫のようではないか。

でもここでじっとしていても見つかるだけだし……ええい、どうにでもなれ！

私は意を決して中に飛び降りた。

ぐきっ！

「あんぎゃっ!?!」

じーんと足から痛みが腰まで上がってくる。

ふ、ふふふ、よ、余裕……！　なんか変な音がしたけど気にして
る場合じゃないわ……！

そうよ……！　こんなところで立ち止まってる場合じゃないのよ
……！

私は額に脂汗を滲ませながら周りを見回した。

中はなかなかに広大な敷地だった。

すぐ近くに建物が見える。

四つん這いで進んで、窓からひよいと首だけ出して施設内を覗いて
みた。

研究者なのだろう。テトラポッド社の制服や白衣を着た人たちが忙
しそくに廊下をうろつろしている。

そこで自分の格好を見直してみると学校の制服。

しまった。変装用に白衣くらい用意しとけば良かった。

ゲームとかだとこういう場合は研究員を気絶させて身ぐるみはいだり、更衣室で白衣を手に入れたりするんだらうけど……。私にそんなことができるとも思えない。

うーん、どうしよう。真実に近づいてることでテンション上がったやつて、入ったあとのこと何も考えてなかったわ……。

潜入方法といい、もしかして私早まった？

と、その時だった。

廊下を歩いている人の中に見知った顔があった。

「……菊！」

菊は二人の研究者に連れられてどこかへと歩いていく。

やっぱり……！　ここが正解……！　助けないと……！

その瞬間。

「コラ！　そこで何をしている！？」

見回りをしていたらしい警備員が叫んだ。

「やっばー！」

私は一目散に走りだした。

「待て、おい！　侵入者だ！　侵入者がいるぞ！」

そう叫びながら警備員が追ってくる。

捕まったらどうなるだろう。いや、そんなことは決まっている。拷問と称して縛られ、あんなことやこんなことをされるに違いない。

ぞわぞわと鳥肌がたつ。

ああ、嫌だ。変な想像して少し鬱になった。

と、施設の角を曲がった時だった。

前からセキュリティロボットがこっちへ向かってきていた。

「まっずい！」

慌てて私は曲がり角に戻る。

運が良かったのか、どうやらセキュリティロボットは私の存在に気づかなかつたらしく、周りをふらふら歩いたままだ。

いくら五 M六秒七で走れる私の足でも挟み撃ちされれば意味がない。

私が曲がり角で足を止めたことで後ろから警備員がやってきた。

「ふふふ、もう観念したか」

やばい。絶体絶命だ。

Answer - 3 "アガスターシェ" 其の8 - 2

前はセキュリティロボ、後ろは警備員。これをかいくぐる自信は流石に無い。

「さて、あつちでじっくりと侵入した理由を聞かせてもらおうか」

ぐへへ、といやらしく笑う警備員二人（水崎の脳内）。

ああ、貞操もやばい！

とその時、太陽の光が一瞬だけかげった。

刹那！

ぐおん！ ぐきぐきや！

風を切る音がして警備員たちの背後に女の人降り立った。

同時に二人の警備員が膝からすとんと崩れ落ちる。

少し乱れた髪を掻き揚げて、彼女はゆっくりと立ち上がった。

ふあさつと金色の髪が靡く。

私には彼女が何をしたのか分からなかった。だが何が起こったかは理解できる。彼女が警備員を倒したのだ。

なんと鮮やかな手並み。きつと警備員たちは何が起こったのか、自

分に何があつたのかも理解できずに意識を閉ざしただろう。だって見てた私にだって何が起こったか分からなかったのだから。

本当に『あっ』という間の出来事にぽかーんとなる私。

瞬きした間に既に事は終わっていたのだ。

本当に人間なのか疑ってしまいそうな動き。

こんなことができる存在を私は噂で聞いたことがある。

そつだ。彼女が本当に噂されているような超人たちならば今のようなこともたやすいはずだ。

つまりこの人は……！

彼女は警備員の私物をごそごそと探ったあと、ゆっくりとこちらに振り向いた。

並々ならぬ金髪の美人。

その毅然とした姿からは生命に溢れた輝けるオーラが見えた。

アンサラー……！

私は確信した。

そして気づく“アンサラー”がいかに崇高な存在であるか、ということに。

開いた口が塞がらないままぼーっとしていると彼女がとことこと近づいてきた。

「久しぶりね。ここから脱出するわよ」

「は、はい！」

と、答えてから私は少し訝しがる。

久しぶり？ 私、こんな凄い人とどこかで

そこでやっと私は彼女が誰か気づいた。

「つて、橘さん!？」

「エ・リ・よ!!!」

彼女は経研部スキー合宿にて車の運転をしてくれた橘さんだったのだ……!

その時。曲がり角からぬつと何かが顔を出した。

「セキュリティロボット……!!」

セキュリティロボットが私たちの姿を捉える。

『侵入者発見。排除開始します』

ダッ!

人型をしたそれが地を蹴る。

だがどうしたことだろう橘さんは脂汗をかいたまま動かない。

そして私はハツとなった。

橘さんの後ろにいるのは私だ。

私が邪魔で動けないの……！？

ロボットが唸りをあげて拳を振り上げる。

すぐさま、橘さんは両腕のガードをあげた。

ガツンッ！

ロボットの拳はガードを吹き飛ばして橘さんの頬を打った！

「ぐっ！？」

弾き飛ばされたように後ろに吹っ飛び、地面を転がる橘さん。

「橘さん！」

「つく！ エリだって……言ってるでしょ……！」

橘さんは殴られた箇所を「ごしごし」と拭って立ち上がった。

「何してるのよ、あいつ……！ 早く来なさいよ……！」

憎々しげに呟く橘さん。ロボットの一撃は相当に強力なのか橘さんの足はガクガクと笑っていた。

ロボットは橘さんが動けないと判断したのか、くるりと私に顔を向けた。

「あ……あ……きゃ！」

私は後ろに下がろうとしたが足がもつれてその場に倒れてしまう。

ロボットが私の首に手を伸ばす。

やばい……殺される……！

そう思ったその時。

ロボットのその腕を横から掴む者がいた。

「おっと、悪いな。そいつは俺が先約済みだ」

いつからそこにいたのか。まるでそこに瞬間移動でもしてきた感覚。

実際、セキュリティロボットも腕を掴まれるまで気づいていなかった。

男は私に手を伸ばしていたロボットの腕を、自分の体を横に回転させて捻り切る！

バチッ！ バチバチッ！

ちぎれた配線から火花がとび、部品がばらばらと散らばる。さらに男は体を左に回転させてバックブロー気味で人間で言うところのこめかみの部分に左肘鉄を入れる。

めきよ！

ロボットのこめかみの鉄板が凹み赤い瞳が一瞬消えてまた付く。

それを見た男はニヤリと笑うとさらに体をひねり……！

ズゴオン！

回転右膝蹴りで凹んだそのこめかみを強打した。ロボットの体がぐらりと傾き、頭が男の膝と横にあった壁に挟まれてぐしゃりと長細く潰れる。

いいーん……。

目の位置にあった赤いランプが消えた。

ふうと橘さん、あ、いやエリさんが息を吐く。

どうやら危機は去ったらしい。

「セキュリティロボット……お前は強かったよ。だが、間違った強さだった」

私は危機を救った男の姿を見た。

体つきはどこにでもいる人のように細身。

あの体であんな動きができるのが信じられない。

この人もおそらく……アンサー……。……。

しかしどこかで見たとのことのある体格だ。

顔は背中を向けているせいで見えないが思えば髪型もどこかで

そこで私ははっとなった。

まさか……まさかコイツ……！

男がこちらに振り返る。

その顔を見て私は絶句してしまう。

開いた口が塞がらないとはまさにこのことをいうのではないだろうか。

その顔にはなんとゆーかジュワツチなお面がつけられていた。腰には風車のついたベルトなんぞがついている。

そしてお面男は決めポーズをびしっとつけながら言った。

「さあ、早くお逃げなさいお嬢さんがた！」

私の中でアンサラーの理想像がガラガラと崩れさる音がした。

「ここはこの正義の味方、イツカイザーにまかせ」

「なにしてんの新谷」

私は自分でもびっくりしてしまうほど冷静に言い放った。

途端にあたふたと慌て出す仮面男。

「な、なにを言っているんだ！ し、新谷樹などというイケメンは知らん！ 私は正義の味方ア！ ほあ〜〜！」

と奇声を発しながら、力をためて『ビシッ!』とポーズをとろうとする。

「イツカイ」

だがそのポーズは金髪美女エリさんの鉄拳で止められていた。

どっすー!

「いぼっ!」

「馬鹿やってないでさっさと逃げるわよ。今ならまだ簡単に抜け出せるんだから」

こっちはとてもアンサラーらしいのに。こいつときたら……。

私は拳の形に凹んだお面をつけている男を見てため息を吐いた。

「ま、待ってくれ……!　せめて最後まで登場の振り付けを……!」

「そんなの後でいくらでもできるでしょ!」

「そんな馬鹿な!　ヒーローの力を剥奪!?　なぜだア　カール!」

「うるさい!　アルールって誰よ!」

どっすー!

「げふっ」とお腹を押さえて膝をつく彼。

「さあ、いきましょ」

私は手をとられて走る。

「あ、でもあいつが……」

「ほっといても帰ってくるわよ。あいつなら」

エリさんが壁を三角蹴りで先に登る。って、なんて身体能力!?

「手を。引き上げるわ」

「は、はい」

それに軽々と私の体を引き上げる。

「ほう、水崎は水色が好きなのか」

「!?!」

その声には私は後ろを振り返った。

「いつのまに復活したのよ、新谷。ってかなあに覗いてんのよ! このボケ!」

私の空中跳び膝げりが新谷の顔面に炸裂する。

「デジャヴー!?!」

Answer - 3 "アガスターシェ" 其の9 - 2

しばらくしてセーフハウスには皆が顔を揃えていた。俺、エリ、ツバキ、シズルさん、そして水崎である。

「暖まるぞ。飲むといい」

「ありがとう」

水崎はツバキの煎れたコーヒーを口に含んでほうと一息ついた。

「侵入したのが昼でよかったな」

俺は椅子に座って水崎に眼をやった。

「どうして？」

「夜なら壁登った時にレーザーで射ぬかれて死んでいたわ」

オウム返しに訊き返してきた水崎にエリが答えた。

「いつ」と水崎の表情が固まる。

「きつとしばらくはセキュリティや警備が強化されるわね」

シズルさんがため息を吐く。

「うっ。すみません」

水崎は椅子の上で小さくなって、肩を落とした。

「あなた、どうしてあの研究所に侵入なんてしようとしたの？」

「それは……みんなが心配だったというか……。興味本位というのももちろんはなかったけど」

「だからって研究所に侵入するなんて……。貴女、行動的ね」とエリ。

「お前が言っなよ」

ボソリと呟いたその言葉が聞こえたのか、エリにギロリと睨まれたので俺は頬に軟膏を塗る作業に戻った。

「まったく」

そんな俺を見てふんと鼻を鳴らすエリ。

そこで申し訳なさそうに水崎が手をあげた。

「あ、あおう」

「なに？」

「確認なんだけど……あんたたち、アンサラー……よね？」

『……………』

俺とエリは互いに顔を見合わせた。

「私はアンサラーを追ってただけで、アンタを追ってたわけじゃないわよ！ てゆうか何でアンタがアンサラーなわけ！？」

「ちょっと生まれがひどくてね」

ニヒルで陰のある微笑を浮かべてみせる。イメージ的には指にたばこを挟んでいる感じ。

「ひどすぎるわよー」

胸ぐらを捕まれ、ガクガクと上下に揺られる。

「なんであんなんかがアンサーなのよ！返して！ 私の理想を返して！」

「よよよせ……！ くくくるし……！」

「まあまあ落ち着くがいい少女よ。女はいつ時もしとやかさを持たなくてはならんぞ」

ツバキが水崎をなだめる。

「よ、幼女にたしなめられた……」

「誰が幼女だ。私はれでーだ」と額に青筋をたてているツバキたん。

「もしかしてこの女の子も……？」

水崎は腕を組んで下から睨んでくるツバキたんをまじまじと見る。

「ツバキたんは違う。ただの俺の嫁だ」

「ア、アンタ……！ こんな幼子も毒牙に……！」

「キヤー！ やめてー！ 顔はぶたないでー！」

「樹、いつまで遊ぶ気だ。事は急を要しているんだぞ」

ツバキが部屋の中で騒ぎまわる俺たちを見てため息を吐いた。

「それもそうだな。水崎はいじりがありすぎてついつい時間を忘れてしまう」

急に真剣な顔になってきゅっとネクタイをしめなおす。

「コ、コイツ……！」

水崎は拳を奮わせながら眉をびくびくさせていた。

「水崎とやら、私はツバキという。アンサラーを補佐するナビゲーターと呼ばれる者だ」

「ナビゲーター……？」

「うむ。アンサラーが前衛ならばナビゲーターは後援といったところだな」

「アンサラー以外にそんな人たちがいたなんて……」

水崎は興味深そうに顎に手をやった。

「ナビゲーターは表だって動かないのでな。縁の下の力持ちというわけだ。樹とは数年の付き合いだな。私もこの事件を早く解決したいと思っている一人だ。それで早速だが研究所の中で何か見なかったか」

「事件？ 事件ってどの事件よ？」

「政治家が殺された事件があったろ？ 俺たちはあの犯人を追っているんだ」

「もしかして……その犯人がテトラポッド社！？」

「そういうこと」とエリ。

「そんな……国家政府側の企業が政治家を……？ そうだ！ 菊！」

そこで水崎は何かを思い出したようにはっと息を呑んだ。

「……？ どうした、ツンデレラ」

ギユツ！

足を踏まれ俺は『ギヤアアア！』と叫んだ。

「見たのよ菊を！ 研究所の中で！ 私の学園の後輩なの！」

「確か桜咲博士の娘よね。どの辺りで見たか覚えてる？」

エリがホログラムで内部地図を広げる。

それを覗き込んでうーんと唸る水崎。

「ちょっと待って……確か……この廊下だったと思うけど……。でも研究員に連れられて移動してるところだったし今はどこにいるのか……」

「……この場所を通ったとして考えられのは……」

エリが菊が通っていたという廊下の先を眼で追っていく。

と、その時だった。

俺のポケットでPCが震える。

「先輩からだ」

先輩には一日一度、連絡を取るようになってある。一日の出来事や得た情報を知らせることになっているのだ。

「先輩つてみちる先輩！？ やっぱり関わってたのね」

睨んでくる水崎に俺は『てへ』と可愛く舌をだすと、俺のスウイトフェイスが気に入らなかったのか水崎はさらに額の血管を滾らせていた。

「先輩、無事ですか？」

『はい。滞りなく仕事をこなしていますよ。追加の地図を送りますね』

「了解です。ツバキたん」

「うむ。受け取っている」

俺が言うまでもなくツバキたんはパソコンを操作していた。

『今日少し変なことがあったんです』と少し戸惑ったような先輩の声。

「侵入者の件なら貴女の後輩に文句を言ってよね」

『後……輩……？』

エリが水崎に眼をやった。

「はは、すいません、先輩」

『その声は……水崎さん!? どうして!?!』

「俺や先輩が休んでることを不思議に思っただけで一人で研究所調べてたんですよ、コイツ」

『まあ! 水崎さんだったら本当にアグレッシブな方ですね』

仕方がない人ですね、って感じで微笑んでいるのがPC越しに分かる。

「す、すみません」と小さくなる水崎。

『でもその事とは違うんです』

「と……?」

『どう説明すればいいのか分かりませんが……今日、ラボから人が逃げ出したんです。それも研究員ではなく、テトラポッド社と関係の無い人間のような人が……』

みちる先輩が体験したことを話し始めた。

それは私が資料を抱え廊下を歩いている時に起こった。

突然、けたたましく鳴り響く警戒音。

私を含め廊下を歩いていた研究員たちが何事かと辺りを見回す。

とその時だった。

ズゴオオン！

大きな音をたてて廊下の先にあつた金属の扉が吹き飛んだ。爆発したのではない。無理やり体当たりで開けたようだ。

同時に人影が飛び出してくる。

見た所三 半ばの男性。肌につけているのは人間ドッグの時に着るような薄い緑の衣装のみ。

だが様子がおかしい。

顔色は悪く、眼は血走り、筋肉が膨張して血管が浮き出ている。呼吸も荒い。どう見ても健康といえる体ではない。

男は左右を見渡すと私の方向へと目星をつけたのか、ぐっと足を踏み込んで走りだした。

豪ッ！

それはあまりにも人間外の脚力であった。

私は男性が通り過ぎた風圧に押されてその場に尻餅をついてしま
う。

『っ！』

『逃げたぞ！ 追ええ！』

扉が破壊された研究室から立つのもやっとという様子の研究員が
でてきて叫んだ。

私はすぐさま立ち上がると男性を追いました。おそらく新谷くん
の求めている情報。それを彼が知っていると思ったのだ。

『グウオオオオオ！』

まるで獣の咆哮のような叫び。

私は男性が曲がった角を曲がって、思わず足を止めていた。

そこには男性が頭を抱えて廊下を転げ回る姿があったのだ。

刹那！

ビクンツと弓なりに体を震わせると彼の背中が膨張し、肉が弾け
た。まるでタイヤがパンクでもしたように。

びちゃ！

生々しい音をたてて廊下の壁に張り付く朱色。

『た……す……！』

男性が眼から血を噴き出しながら私に手を伸ばす。

私は両手で口をおさえガクガクと震えることしかできないでいた。

そして伸ばした腕もバチンと弾けとび、最終的にはその頭が

パアアンツ！

『キヤアアアアツ！』

先輩の話聞いてうげーと水崎が舌をだす。

『その後、その部署の研究員に何があったのか聞いたんですが、極秘裏な研究らしくて内容は教えてもらえませんでした。その部署と
いうのが』

「遺伝子操作の部署ってわけね……」

エリが深く椅子に身を預けた。

Answer - 3 "アガスターシエ" 其の10 - 2

「ちよつと待ってよ。そもそも一般人は中に入れないはずでしょ？」と水崎の至極真つ当な疑問。

「だが想像はつくな」とツバキたん。

「ああ……」と俺も頷く。

「人体実験ね」

ギリツと親指を噛むエリ。

「確定だな。この街の行方不明事件はそういうわけか」

俺たちが出した結論にみちる先輩も同意した。

『やっぱりそう考えるのが妥当ですよ。顔色もかなり悪かったですし、相当薬付けにされてたのかも知れません』

「ちよ、ちよつと待ってよ！ だったら捕まってる菊が危ないんじゃないの!？」

『菊さんが……捕まってる……? どういうことですか!??』

水崎の言葉に先輩が訝しげな声をだす。

みちる先輩の疑問には俺が答えた。

「菊の父親は遺伝子生命学の研究者なのは覚えてますか？」

『はい。……まさか！』

「そのまさかです。菊の父親がその研究所で働かされてるみたいなんですよ。おそらく菊の命を人質にされて」

『そんな……！』と息を呑む先輩。

「そうとは知らずに菊の奴、親父さんのことが気になって研究所に詰めかけちまって……」

『捕まった……』と

「水崎が今日、研究員に連れられる菊を見たらしいです」

『まさか菊さんを！？』

「分かりません。だけど急がないといけないのは確かです」

と、そこでエリが身を乗りだし、PCに近づいて先輩に問うた。

「貴女、その菊さんの父親と接触することできない？」

『部署が違えばほぼ会うことは皆無ですが……。やってみます』

「頼むわね。できたら協力依頼と研究内容の情報を引き出してちょうだい」

『菊さんのお父様の名前、分かりますか？ 何度かお会いしたこと

はあるのですが……』

「桜咲照光よ」

『照光さんですね。分かりました』

そこで水崎がすっと手をあげた。

「なんだね水崎くん」

「はい先生。質問なんです」

「ふむ。質問は授業の後、私の部屋でじっくりと聞こう。それはもうたっぷりねっぷりとぐへへ」

俺がいやらしい笑みをするとツバキとエリが同時に俺の足を踏んだ。

「ギャース！」

「なんで先輩が研究所にいるわけ？」

俺は答えようかどうか少し迷ったが、結局真実を話すことにする。

「先輩には潜入捜査をしてもらってる」

「あなた……！ 何考えてんのよ！ 先輩を危険な目に会わせておいてアンタはこんなところで指示だけ出してるわけ！？」

思った通り激昂して俺の胸倉を掴む水崎。

「こ、こら勝手にヒートアップするな！」

「信じられないほどの意気地無しね……！ やる時はやる奴だと思つてたけど結局ただの女好きの馬鹿じゃない！ この人でなし！」

「だから落ち着けつての！」

『水崎さん落ち着いて下さい』

状況を見かねたのかみちる先輩が水崎に声をかける。

「これが落ち着いてらるかってんですか！」

『潜入捜査を望んだのは私なんです』

その言葉にハッとPCを見る水崎。

「せ、先輩が……？」

『この街で起こっていることこのままにしておくわけにはいかないじゃないですか。それに私が許せないとも思つたから力を貸しているんです。新谷くんなら私が手に入れた情報を有効活用してくれると信じています。だから私は買つてでたんです』

何か言おうとして水崎は唇を噛んだ。

気づいたのだろう。自分が何を言っても無駄だということが。

「そろそろ準備する必要があるようだな。必要な装備をリストアップしてくれ」

状況を纏めるようにツバキたんが呟いた。

「ああ、分かった。用意する」

「あら、私ならいつでもいけるわよ」とエリはポストンバッグを指差した。

例の重火器が満載になったバッグである。

「先輩、桜咲博士との接触お願いします」

『はい。任せてください。では、また明日連絡します』

プツリと回線が切れる。

水崎はギロリと俺を睨むとふんつと鼻息も荒く椅子に座った。

はあ……。なんかこー損な役回りばっか回ってくるんだよなあ……。

「ふう」

私はPCをポケットになおした。

「川澄くん」

「!？」

名を呼ばれ私は振り返る。

そこには同僚の堂時さんが立っていた。

いつものようにこにこととした笑顔だ。

「いつからそこに？」

「ついさっきだ。また家族に電話かな？」

こにこと不気味な笑顔。私はなぜかそれが気味悪く感じた。

「失礼します。まだ仕事が残っているので」

「おや。これは申し訳ない」

私はすたすと彼を通り過ぎ研究室に向かう。

「川澄くん」

不意に後ろから声がひきとめる。

「あまり厄介事に首を突っ込まない方がいい。君の命を縮めることになるぞ」

「何のことかわかりかねます」

私は背中ですう答えてラボに戻った。

私に真つ正面から彼に対してその台詞を言う勇氣はなかった。

翌日。私は空き時間を利用して研究室の前で待っていた。

どうやら“コード：A”と呼ばれる計画は研究所内部でもごく一部の人間しか関わっていない研究のようだ。他部署の研究者は“コード：A”という言葉さえ知らないの方が圧倒的に多い。

そのことから“コード：A計画”がどれだけ秘密裏に行われているかが分かる。

しかし中には興味深いことを言う人もいた。

『かなりやばい研究らしいな。俺は関わりたいとは思わないが、関

係者の話じゃ成功すれば世界を変えるほどの発明らしい』

世界を変えるほどの。

一体どういうことだろうか。

“コード：A”が遺伝子操作による研究だというのはもう分かっている。問題は何を創っているのかということである。“キメラ”や人体実験の先があるのだ、おそらく……。

兎にも角にも、こればかりは直接関係者から聞く他ない。

研究室の扉が開いてくたびれた男が出てくる。

その男は私の顔を見ると驚いた表情になった。

「君は確か……菊の……」

私はぺこりとお辞儀した。

「お久しぶりです。桜咲博士」

Answer 3” アガスターシエ” 其の11 - 1

私たちは場所を屋上に移していた。

「くそ……！」

現在の桜咲さんの状況を説明し終えた彼の第一声がそれだった。

「状況は悪くなっているんです。このままでは桜咲さんの身が危ないかと」

「くそ……面会の際に娘と話していたことを誰かに聴かれていたのか……！」

「研究の話をしたんですね、桜咲さんに」

「ああ。君も知っているだろうが、娘はあれで頑固なところがあつてな。二度とこの研究所に近寄るなど言っても一向に納得しなかった。だから、仕方なく真実を話してここから遠ざかるように言ったんだ」

「面会室は盗聴機が仕掛けられているのかも知れませんが。何にせよ極秘事項を知った桜咲さんは博士と別れた後、捕まった……と」

「……娘を守るためにこの研究所にきたというのに……なんということだ……」

頭を抱えてうめく桜咲博士。

「君はなぜここにいる。まさかそのことを伝えるためだけに来たわけでもないのだろうか？」

「はい。実は……」

私は周りを見回し、誰もいないことを確認して声を潜めた。

最初は見るも無惨な桜咲博士だったが、私の話を聞くうちに少しずつ血の気が戻ってくる。

「アンサラー……。本当に実在したのか……」。

いやそうだろうな。でなければあんな……！ 化け物を……！」

桜咲博士が怯えるように震え始める。

「化け物……？ 一体、あなたたちは何の研究をしているんですか？ “コード：A” 計画とはなんなんですか」

「世にも恐ろしい実験だよ……！ 神をも恐れぬことを我々はしているんだ……！」

「遺伝子操作の人体実験……ですね」

私の言葉に博士はハッと私の顔を見た。そして苦虫を噛み潰したような顔で歯を食い縛る。

「ああ、その通りだ。我々は化け物をつくりだしているんだ……」

「化け物……」

「“アポカリプス”。それが“コード：A計画”の要だ。一般人を使った人体実験もすべては“アポカリプス”を完成させるためだ。

今まで何人もの人間が犠牲になっている。実験に耐えれず肉体がキメラ化して……最期は原型が留められなくなって弾け飛ぶ」

私は逃げた男性がまさにそうなった瞬間を目撃している。

なんと惨たらしい実験をしているのだろうか。考えただけで胃からこみ上げてくるものがある。

「でも何のために？」

「奴ら潰すつもりなんだ」

「潰す？ 何をです？」

そんな化け物を生み出して一体テトラポッド社は何をしようというのか。

「アンサラーをだよ」

「アンサラーを……潰す？」

「詳しい理由までは分からない。だけど奴らはアンサラーにとって変わるものを造りあげようとしているんだ。アンサラーを雇うには莫大な報酬がある。だが人造生命体ならどうだ。かかるのは制作費のみ」

「そんな……お金のために人の命を……！」

私の悲壮な表情を見て、彼は心配そうな表情になる。

「君のような子がいるべき場所ではない。すぐにここから逃げなさい。もし君が内通しているのがバレでもしたら」

「そうはいきません。私にはやらなければならないことがありますから」

桜咲博士は顔をあげた。

「ここで行われていることは許されることはありません。絶対に止めないと。それに私の可愛い後輩も助けないといけませんし……ね？」

私がウィンクしてみせると桜咲博士は朗らかに笑った。

「娘は素晴らしい先輩の元で学園生活を送っていたんだな。川澄くん、私に協力できることがあればなんでも言ってくれ」

「はい。その時はお願いします」

握手するそんな二人を物陰から見つめる人物がいたことに、私たちはその時まったく気づいていなかったのです。

Answer 3 “アガスターシエ” 其の11-2

“アポカリプス”の製造。それが“コード：A計画”ってわけか…。

しかし

「アンサラーを……潰す？ なんのためにだ？」

先輩の報告を受け俺たちは首を傾げる。

「アンサラーの仕事を企業が請け負うようになっても利益はたかが知れてるわよね。確かに将来的な眼で考えればアンサラーよりも“アポカリプス”を製造する方が経費は削減できるかもしれないけど……。」

それにしては 「

エリの言葉をとってツバキたんが続きを発する。

「うむ。リスクがあまりにも高すぎる。人体実験がバレれば経営どころの話ではなくなる。国民からバッシングの嵐を受けることになるぞ」

「ということとは、その奥にまだ何か目的が……ある……のか……？」

ふうむと俺は事態を整理すると共に考えを巡らせる。

確かにアンサラーは一つの仕事毎に多額の報酬が必要となる。そ

れに比べれば初期研究費は莫大にかかるものの、“アポカリプス”とやらの製造が可能となれば後は量産すればいいだけ。そうすれば報酬の必要の無い使い捨てアンサラーの出来上がりだ。

エリの言うとおり、長期的な目線でみるならば“アポカリプス”の方がアンサラーよりも安く上がる。

だが、しかしこれではあまりにも動機が薄い。ツバキの言うとおり、それだけのために一般人を誘拐して人体実験を行ななんてリスクを背負うだろうか。

もっとこー、テトラポッド社には焦りのような急いでいるようなものを感じる。

それに、ただアンサラーに打って変わるだけのものを製造するといふのなら政治家を狙って殺す意味も無い。

……アンサラーに打って変わる……。アンサラーを潰す……か。アンサラーを潰す、ねー……。

と、その時だ。

俺ははっと顔をあげた。

「アンサラー潰し！　そういうことかよ……！」

「なによ、急に……」とエリが驚いたように俺を見る。

「アンサラー潰しだよ、アンサラー潰し！　アンサラーが消えたらどうなる！？　テトラポッド社の目的はこの後だったんだよ……！」

俺のその言葉にエリ、ツバキ、シズルさんの瞳に理解の色が灯った。

アンサラーが消えることのその真意に気づいたのだ。

この経済社会からアンサラーが消えれば

「……そういうこと……！ やってくれるわねっ……！」

ガツンとエリが壁を殴る。

「なるほど。大それたことを考えたようだな、テトラポッド社は」

ふうむと唸るツバキたん。

「どうやら規模はこの街だけの話でなくなったようね」

シズルさんが静かに眼を瞑る。

「え？ え？ なにか？」

と、水崎だけが分からないでいる。

「ちょ、ちょっと……。私にも分かるように説明してよ。みんなだ
けで盛り上がってないでさ……」

俺は水崎の眼を見た。

「テトラポッド社が企んでいるのは……経済社会の崩壊だ……！」
アンサーが消えることの意味。

社会情勢は皮肉なことにアンサーという闇の部分があるからこそ回っている。アンサーは詰まる所、経済のバランスの役割を担っているのだ。

それが消え、特定の企業　テトラポッド社の息がかかった“アポカリプス”がはびこるようになれば、経済はテトラポッド社の思うがまま。

恐ろしいのはそれからだ。

経済をテトラポッド社が独占すればどうなるか……！

国はテトラポッド社に頼るしなくなる！

つまり、ゆくゆくはテトラポッド社が国を牛耳ることになる！

おそらくそれが……本当の企み！

国家政府転覆……！

静かにじわじわと、テトラポッド社はこれを狙っていたのか……！

俺はドンと机を叩いた。

「樹……。……なんだかんだ言っつてこの事件のこと真剣に取り組んでたのね……」

エリは神妙な表情を浮かべ、胸の前でぎゅっと拳を握る。

「くそ！ 忙しすぎてすっかり『マジカル きゅーと きづなちゃん』見るの忘れてた……！」

『……………』

部屋の全員に冷やかな目線で睨まれたので俺はコホンと咳払いをした。

「いや冗談ですよ？ 場を和ませようとしたジョークですよ？」

「だとしたらウィットのかけらもないくだらないジョークね」

腕を組んだままエリは俺を睨み続ける。

「ちなみにきづなちゃんはちゃんと録画してるから、お気になさらず。ほらデータチップ貸してやるよ」

俺は内ポケットからデータチップを取り出してエリに渡した。

「ありがとう」

へきっ！

受け取った瞬間、エリはデータチップを手で真つ二つに折った。

「ああああああ……！ ……きづなちゃんが……折れた……。

「この鬼畜……！」

俺は床に落ちた二つに分断されたデータチップを見ておいおいと涙を流した。

「しかし日本転覆とはな……。まさかこの事件がここまで大きくなるとは……」

ツバキたんがぎいっと深く椅子に腰をかけた。

「私、まだ頭が混乱してるんだけど……。話の規模が大きすぎて……」

ずっと黙って聞いていた水崎は苦笑いして頬を掻く。

「混乱ついでに一つ疑問があるんだけどいい？ 政治家を狙って殺しているのは何のためなの？」

「テトラポッド社が狙っているのは国家転覆よ。推論の域を出ないけど、おそらくその企みの邪魔になる政治家を消しているのじゃないかね。企業がアンサーを使ってライバル企業の重役を殺すのと同じ理屈よ」

シズルさんのその言葉に水崎は『ああ、なる』と拳を手の平に振り下ろす。

「時間がない」

俺は単的に今の状況を言葉にする。

“アポカリプス”が実用の段階に入りつつあることはこれまでの

事件からしてほぼ確証的だ。おそらく今、行われているのはちゃんと抹殺できるかどうかのデータ収集と、微調整。完成に至るまでもう幾ばくの猶予もないだろう。

「そうね。すぐにも動きたいところだけど……何か良い案は？」

エリが周りを見回した。

「はいはい！」

それに俺はすぐに手をあげる。

だがそれを無視して頭をひねるみなさん。

「何かいい案は……うーん」

「だからあるって！ 案！ 聞いてくださいよ橘さん！」

ギャゴン！

橘さんのヤクザキックが俺の頬をかすって後ろの壁に穴を穿つ。

「その名前で呼ばないでって何度も言ってるわよね」

「まあまあ。まずは俺の考えをきいてくれよ」

「そんなに自信があるのなら言ってみろ」

ツバキたんがGOサインを出してくれる。

「よしてきた！」

俺はぐつと親指をたて笑顔で言いはなった。

「あの研究所を爆破しようぜ！」

きゅぴーんと俺の白い歯も光っているはず。

しーん。

「あのね……あんた真剣に考えなさいよ」

水崎が呆れたように俺の頬っぺたをつねってくる。

「いや、案外いいかもしれん」とツバキ。

「そうね。アリだと思っわ」とシズル。

『ええええええええええ！？』

俺と水崎は二人して驚く。

「ってなんであんたまで驚くのよ！」

「いやだってテキストに言ったただけだし」

水崎にツッコまれて俺はてへりと頭を掻く。

「しかし問題はあの研究所を潰しても第二、第三の研究所がつかれるだけということだろう。これでは事件解決を先延ばしにしてい

るだけだな」

後のことを冷静に分析するツバキたん。

「そうね。資料を回収して事件の全容と一緒に世の中にこのことを公開すればバッシングは必至。それに期待しましょ。それと今後こういうことがないように社長を殺しておきたいところだけど」

その言葉にシズルがかたかたと手持ちパソコンを操作した。

「テトラポッド社の河岸木田社長が研究所を訪問するのは……明日ね」

「グッド！ いいタイミングね。流れがきているわ」

パチンツと指を鳴らす橘さん。

三人の話を聞いてぽかーんとしている水崎。

そんな水崎に近寄ると俺は静かに耳打ちした。

「なあ怖いよなあこの人たち。平気で人殺しの相談できるんだぜ」

「黙ってなさいエセアンサーー！」

アゴを思いつきり蹴りあげられ、俺の意識を闇の中へと落ちていくのだった。

Answer 3 “アガスターシエ” 其の12-1

その日、俺は夢を見た。

それはまだ俺が“エース”と呼ばれていた時代の昔の風景だった。

そう。彼女が “クイーン” がまだ生きている時の。

こんな夢を見てしまうのは何年かぶりに“スラスト”や“スパイダー”に会ったからだろうか……。

“日本国際空港爆破事件”。後にそう呼ばれるようになったあの事件。

政府にとっては『嫌な事件だったね……』程度では済まされない規模の大事件。

あれはNK史上の任務でもかなり特異な仕事だった。情報伝達役である“データバンク”が空港に企業が画期的な爆弾が輸入されることを突き止めたのだ。これを利用しない手はない。要するにその画期的な爆弾とやらを奪取し、自分たちで活用しようとNKは考えたのだ。

無論、その爆弾を一番欲しかったのは“ボマー”のおっちゃんだったが……。 “ボマー”はまんまと太った気のいいおっちゃんである。その体は運動会の大玉転がしのように丸いので蹴り飛ばせばころころと床を転がっていくのだ。そのせいか葉月のおもちやになっているのを幾度となく見かけた。

そして何の因果か、この企業というのがテトラポッド社だったりする。当時はその爆弾で政府の権力を回復させようとしたのだろうと思っていたが、今となってはあれが現存していれば政府転覆の一要因として使われることになったのは明白だ。しかしそれに気づくはずもない時の政府は権力を取り戻すためとテトラポッド社に協力し動いた。

どこで漏れたのかNKが狙っていることを知りガーディアンやアンサラーが多数雇われたのだ。だからこそこちらもメンバー総出で爆弾を奪取する計画を練った。

俺と“クイーン”はその中でも敵陣まで切り込む危険な役割を任せられた。

これも当然といえば当然。

なにせ殺すことに特化した“エース”である俺と絶対鉄壁と呼ぶにふさわしい“クイーン”だ。このタッグは相性の面から見ても良かったのだ。

最初はなんら問題なく事は進行していた。幾多のアンサラー、ガーディアンが立ちふさがった。それらを一瞬で物言わぬ骸に変える作業。そう単純作業のようにあの時の俺は感じていた。人を殺すことに違和感を感じていなかったのだ。まるで森の中で草を掻き分けるかのように人を薙ぎ殺していった。

生まれた時から俺の傍には死がつきまとっていた。呼吸をするのと同じように、食事をするのと同じように人を殺すという行為を自然に捉えていたのだ。

今から思えば実に愚かであった。

自分で考えることを放棄していたわけじゃない。それが正しい行為だと本気で信じ込んでいたのだ。それにあの時、俺の周りにいた奴らといえはあのキ、ガイ集団だったわけである。奴らもまた俺と同じだった。何の疑問も抱かずに特に何も感じることも無く、むしろ正当な行為として殺す。

だがしかしだ。

唯一……ただ一人、俺たちの中でそれを哀しむ人物がいた。

それが“クイーン”だ。

彼女は幾度、俺たちと作戦に付き合い成功を味わった人間だ。しかし彼女は事が終わった後、いつも複雑な表情を浮かべているのだ。

今から思うと彼女が何を思っていたかは考えるまでもなかった。だが彼女がそれを言葉にすることはなかった。その理由となる一つに彼女が極度の口べただったことがある。何かを口にしようとしてやめるといふ姿を俺は幾度となく見た。

……というか、悲しいことにこの不器用さは普段からそうだった。

毅然と振る舞ってはいるのだが、俺や沙枝が喧嘩を始めると葉月と一緒ににおろおろとした人だったのだ。

『なんだと殺すぞ teme エ……！』

『そう言う暇があるのならさっさと殺したらどうなの？ “エース

”の名が泣くわよ”

『上等だ……!』

俺が紗枝の胸倉を掴む。

と、その時だ。

『っ!』

無言で止めようと割って入った“クイーン”の顔面に俺の振り上げた肘が突き刺さったのだ。

ゴス!

『あ……!』

“クイーン”の鼻からぷしつと血が吹き出る。そしてそのまま天を仰ぎ、

ばたん!

『お、おい“クイーン”!? 大丈夫か!?!』

背中から倒れて眼を回している“クイーン”。

『音もたてずに近づくから気づかなかったわ』

“クイーン”は苦笑いを浮かべながら起き上がり恥ずかしそうに頬を掻く。

俺と沙枝は眼をあわせた。

紗枝は肩をすくめてみせる。

それに俺は『はあ』とため息をつく。

“クイーン”の間抜けっぷりに毒気を抜かれていつも喧嘩は終わってしまふのだ。

『飯食おうぜ、飯。はらへったぞ“クイーン”』

俺は後ろから“クイーン”の背中におぶさるようにだらしなくとりつく。

『あれ作ってよ。ホワイトソースのパスタ』

沙枝は“クイーン”の片腕に自分の腕を絡ませる。

『あやー。あれ私も好きー。作ってー』

葉月が反対側の“クイーン”の手を握る。

そんな俺たち三人に彼女はそつと微笑み一言で答えた。

『……………ええ』

彼女はとても思いやり深い人間だった。そんな彼女がなぜ暗殺者になっただかは知らない。もちろん好奇心から訊いたことはあった。しかし、やっぱりただただ静かに苦笑いを浮かべるだけだったのだ。

そんなこんなの“クイーン”なのだがやる時はやる女性であった。

“クイーン”が所持している武器はムチ。あれは驚嘆の一言に尽きる。

彼女は銃弾をムチで絡めていなし、体を回転させてねらい通りに弾丸を放ち返すのだ。しかもその弾速と威力は半端無かったりする。

銃弾の威力を衰えささずにいなしてムチの遠心力で強めるばかりか、ムチで更なる回転をかけて放つのだ。

その威力は弾丸一発でコンクリートを微塵にするほどだった。

貫通するのではない。

木っ端微塵にするのだ。はっきり言って笑えない威力である。人間にあたれば……まあどうなるかはご想像に任せよう。

彼女はメンバーから絶対の信頼を得ていた。葉月に関しては“クイーン”に甘えまくりだった。糸の使い方もどうやら葉月は“クイーン”のムチを見て盗んだ結果だったようだ。彼女は“クイーン”に憧れているふしがあったので真似をしたかったのかも知れない。

それだけ凄い女性だったのだ彼女は。

だっていうのに……。

日本国際空港爆破事件のあの時。

“クイーン”は散乱死体をいつもの表情で見ながら呟いた。

『樹……人間を殺すということはね』

その時、俺はやっと気がついた。

彼女が人を殺していないことに。

殺したのはすべてこの俺だったのだ。

彼女は飛んできた弾丸をすべてあらぬ方へ受け流していただけ。

『こんな時に何言ってるやがる。こいつらは敵だ。殺しておいた方が仕事に楽になるだろう』

彼女は何も言わず複雑そうな顔をした。

この時、彼女は決めたのだろう。

そして最後の場面で

彼女は行動を起こした。

Answer 3” アガスターシエ” 其の12 - 2

『樹……あなたを自由にさせてあげる』

「やめろっ!」

俺は眼を覚ますのと同時に上半身を起こしていた。

全身にびっしょりと汗を掻いていて気持ち悪い。

くそっ……いまさらなんであの時の夢なんか……。

「やめろってなにを?」

エリは銃の標準の具合を見ながら問うた。

「あ、いや……」

俺は額に手をあてた。

「えらくうなされてたわね。ちゃんと仮眠はとれたの?」

エリは潜入するための装備の最終チェックに入っていた。

「凄い装備だな」

俺はエリを見て、そう感想を漏らした。

エリはきゅっとオープンフィンガーの黒いグローブをつけこちら

を振り向く。

彼女の左足にはフルコーネと呼ばれるハンドガン。彼女の腰にはMS-Secondと呼ばれるマシンガンが斜めにかけられている。連射性能に定評があり、装弾数も前型より増加され、慣れれば使い勝手の良いマシンガンである。

羽織った黒のジャケットは防弾性能があり内側には手榴弾にセンサー爆弾がついていて、外側には銃弾の予備カートリッジが装着されている。

そして何よりも驚くのが彼女の右足。そこには組み式ロケットランチャーが装備されていた。ボタン一つでロケットランチャーへと変貌する便利な武器だ。

「そうかしら？ 敵の本拠地に乗り込むのよ。武器は多く持って行った方がいいわよ」

言った後で、片足を椅子の上に乗せ、きゅっきゅっとブーツの紐を結びなおす。もちろんそのブーツには鉄板が仕込まれているだろうと予測するのは簡単だった。

「敵の本拠地に乗り込むって言ったって戦うわけじゃないんだぞ」

「でも交戦になるかも知れないじゃない」

「また人を殺すのか」

「邪魔になるならね」

素っ気無くそう言うエリ。

「ツバキ。調べてくれたか？」

「ああ。発見された時には既に死んでいたようだな。即死だそうだ」

「そっか。ありがと。ま、鉄板が仕込まれた革靴で上から蹴られりや首の骨も折れるわな」

俺はツバキさんの頭をぽんぽんと撫でるとエリに向き直った。

「なあ」

「なに？」

「殺すなよ」

「はあ？」

訳が分からないと言った顔をするエリ。

「何言ってるの、いきなり」

「人を殺すなって言ってる。ストレンジャーの時も、ロツジの一件も今日の警備員もお前なら殺さずに無力化できたはずだ」

「私が殺したんじゃないわ。銃弾が殺したのよ。私は引き金をひいただけ。トム・クルーズもそう言ってたわよ」

窓に銃を向け『ばんっ』と言うエリ。

「ふざけるなよ。こっちは真面目な話をしているんだ」

目線だけをこちらに向け、俺が真剣な表情だと気づくと、改めて体を俺に向ける。

「それならこっちも真面目に答えてあげるわ。」

私たちの仕事は殺すことよ。そして奴らは私の敵でしょ。」

「違う。俺たちの仕事は真実を突きとめ、テトラポッド社を止めることだ」

「あーはいはい。そうだったわね。でも敵を減らしておくに越したことはないでしょ。」

話はこれまでとばかりに手をひらひらと振って歩き出す。

それを俺は彼女の肩を掴んで止める。

「迷惑がかかっているのが分からないのか」

「なによ、もう。迷惑ってなに?」

うんざりとした表情で振り返るエリ。

「二人の死者が出たことでテトラポッド社は間違いなく警備を強化する。河岸木田の訪問も延期になっていたかもしれない」

「……そうね。それは悪かったわ。そこまで気が回ってなかった」

「だけど俺が言いたいのはそんなことじゃない」

俺の言いたい事を読み取ったのか先にエリが言葉を放つ。

「いい加減にきなさいよ」

エリの眼が鋭くすわる。

「お前こそいい加減にしろ。あんな簡単に何人も人を殺しやがって……！」

「私にあんたと立場が違うのよ。あいつらは私にとって敵なのよ。ふらふら生きてるあんたとは訳が違うの」

そのエリの言い分は俺を怒らせるのに十分だった。

「なんだと……取り消せ……！」

「嫌よ。どうぞやら凶星だったみたいね」

ゴゴゴゴゴゴゴ……！

部屋の中の空気が一瞬で張り詰める。

にらみ合う俺たち。

一触即発。まるでガスが充満した密室のようだ。

少しのきっかけ……火花で大爆発を引き起こす。

「よさんが二人とも！　こんな時に！」

「そうよ。何考えてるの。仲間割れしてる場合じゃないでしょ」

ツバキが俺の手を引いて、シズルさんがエリの肩に手を置いて、二人が間に割って入ってきた。それでやっと俺たちは睨みあうのをやめる。

エリはため息をついた。

「二人の言うとおりだね。やめましょ。任務も終わってないのにこんなこと言い合ってる場合じゃないもの」

「……そうだな」

再び歩きだすエリ。だがふとその歩みを止めるとぽつりと彼女は呟いた。

「私たち……組むのはこれっきりのようね」

最後に言ったエリの台詞は深く俺の中に残るのであった。

そしてついに決行の時がきた。

自然にとけ込む電磁視界透過装備ステルス迷彩とかいうものを着込み、セキュリティシステムがシャットダウンした隙にエリさんと新谷は中に忍び込むようだ。

深くは把握していないが、システムをシャットダウンさせるためにプログラムに侵入するのは大変危険なことらしい。

なのでツバキちゃんはこのセーフハウスから離れた別の所でシャットダウンの操作をするようだ。

『準備はいいか？』

ツバキちゃんの声がイヤホンから聞こえてくる。

『お腹が減ったわ。早く終わらせてどこか食べに行きましょう』とエリさん。

『それなら駅前に出来たつていうネパール料理店ね。おいしいらしいわよ』とシズルさん。

『ばっか！ 任務後はラーメン屋って決まってるんだよ！ なあ、ツバキたん！？』

『よし、セキュリティに侵入する。集中したいから回線は切る。武運を祈ってるぞ』

『ああん！ ツバキたん！ ちゃんと聞いてよ！ 華麗にスルーはイヤ！』

これが今からかの大企業テトラポッド社に侵入しようという会話なのだろうか。

四人からは一切緊張というものが感じられず私は場違いな空気を感じながらもため息を吐いた。

カタカタカタカタカタカタ……！

目まぐるしく変わっていく文字の羅列。

フン。やはり『スパゲッティ』か。それもなかなか複雑な改変がされている。

私が言うのもなんだが、まさに“スパゲティプログラム”と呼ばれるにふさわしい出来だな。

本来、“スパゲティプログラム”“スパゲティスクリプト”という言葉はスパゲッティのように絡まりあい、分かりにくい粗悪なプログラム・コードのことを指す。しかし、この場合ではまったく別の意味を持っている。

それは侵入者にとって“スパゲッティ”であるということだ。それほどまでに難解で複雑に絡まったシステム、それが『スパゲッティ』なのである。

チツチツチ。

パソコンの横ではタイマーが静かに時間を刻んでいる。

五分以内にセキュリティを解いてここから出なければ私の命は無い。

だというのに、私の心はまったくもって穏やかであった。

所変わってテトラポッド社の管制室は慌しくなっていた。

それもそうだろう。何が目的かは分からないが、日本屈指の大企業テトラポッド社のシステムに侵入を試みている者がいるのだから。

「侵入者！？ どの馬鹿だ……！」

しかも驚くべきはその速度。

「おい……！ なんだ、これ……！ なんなんだよ、この速度……」

！ システムが高速で書き換えられていくぞ！」

管制室では五人のスペシャリストが侵入させまいと対応しているというのに、まるで絡み合う糸をするすると解いていくように簡単にシステムが侵食されていく。

「場所を突き止めて始末してこい……！」

「もうエージェントは出てる！ 貧民街からだ……！」

「貧民街だと！？ ストレンジャーの仕業か！？」

「ストレンジャーなわけないだろ……！ こんな速度……そんなじゃそこの奴には無理だ……！」

凄……。

驚嘆の一言に尽きる。

やはりツバキ先輩は天才だ。

私は先輩の援護にもならない援護をしながらそう思った。

あまりにも速度が違うのだ。

例えるなら、先輩がミサイルで城を攻撃しているなら、私は小石を投じているようなものである。

テトラポッド社のセキュリティをテトラポッド社のエージェントに捕まる前に落とす。

これがどれだけ困難なことか。

こんなことツバキ先輩にしか不可能だ。

流れる文字の羅列。

判断力が半端ではないのだ。

最良の指示スクリプトを最高のタイミングで最速で行っている。

臨機応変な対応。機械でなく人間だからこそできることだ。

そうだ。私はこの人に追いつきたくてサーチャーに残ったのだ。

遙か彼方を走っている先輩。

だが、そんな彼女でさえ……。

時間が足りない。

私はギリッと唇を噛んだ。

Answer 3 ”アガスターシエ” 其の13 - 2

まったく、我ながら馬鹿なことをしていると思う。

あのテトラポッド社のセキュリティに侵入しようとしているのだから。

バレた時点で国家反逆罪。この国ではもう私は暮らせない。

そもそもシステムに侵入してバレないわけがないのだが……。

それもこれも奴のせいだ。

厄介な役回りを任されたものである。おそらく奴はテトラポッド社のシステムに侵入することがどれだけ馬鹿げたことなのか理解していないだろう。

だというのに私の顔から笑みは消えない。

新谷樹。面白い人間だ。

何も考えていないようで誰よりも深く物事を観ている。

何もしていないようで誰よりも早く手を打っている。

誰もが知らず知らずのうちに奴のペースへと巻き込まれていく。

アンサラーとして天授の才を持つ少年。

奴といればこれからもつと面白い物が見られるだろう。

だが

ピー！ ピー！

アラームが鳴る。侵入を開始してから五分が経過したのだ。もうこの部屋から出なくてはいけない時間である。

しかしもちろんセキュリティは解けていない。

私にはもう再び一緒に奴らのバカを見れることはないだろう。

シズルもよく補佐してくれているが……やはり日本屈指の大企業
のセキュリティ。そもそも五分で解除というのが無茶な話だった。

パラパラパラとヘリが飛ぶ音は既に真上から聞こえていた。

まったく……。私は大馬鹿だな。

ダツダツダ……！

天井を何人も人間が走る音がする。

だが嫌じゃない。こういう自分も悪くないと思う。

フと笑う。

奴の影響を受けすぎたのかも知れんな。

「畜生ッ！ な、何者なんだ……コイツ……！」

管制室の一人がキーボードを操作しながら悪態を吐く。

「早くデコイをばら撒け……突破されるぞ……！」

「そのデコイが完全に停止されているんだよッ……！」

言われた管制員が怒り任せにキーボードの上へ拳を振り下ろす。

もはや万策尽きたのだ。

「だめだ……！ のつとられる……！」

と、その時だった。

「当たり前だよ」

後ろからきたその声に思わずその場の全員が振り返る。

そこに立っていたのは、最近よくこの研究所に出入りしている“データバンク”と呼ばれる男だった。その脇にはノートパソコンを抱えている。

男はくいつと黒縁の眼鏡の位置を整える。

「キミたちが相手しているのはサーチャーの指導員を任せれたこともある才女だ。もっとも現在はただのナビゲーターだけだね」

「ナビゲーター……だと……！？ そんな馬鹿な！ ナビゲーターごときにこんな事ができるはずが……！」

「それができるのだよ、彼女になら。」

キミたちなら彼女の名前くらいきいたことがあるだろう。史上最強のセキュリティシステム“スパゲティプログラム”の生みの親の名前を「

「まさか……！」

彼らはモニターへと振り返る。そして“スパゲティプログラム”を侵食していく新たなプログラムを改めて見て、誰もが眼を奪われる。

「ふーむ……。自作の解析ソフトだね……。私がシステムに追加していた部分はその場で書き換えているのか……。」としみじみ眺める“データバンク”。

「なんて……美しいスク립トだ……。」

「無駄の無い黄金比の肉付き……まるで“ミロのヴィーナス”だ……。」

管制室の人間はそのスク립トに言葉をなくし、ただ呆然ととり

憑かれたようにモニターを凝視していた。

「フ……。見事だよ、先輩……。たった数分でここまでやるとは……」

私もうかつかしてられないな……」

“データバンク”はそう言って笑つと管制室から出て行った。

私は手を止めた。

「ふう……」

息を吐いて額の汗を拭う。

画面には複雑に絡まりあったシステムがまるで道を開けるように整頓されている。

七分か。思ったより早かったな。

そしてエンターキーに手をかける。

三年か。

長いようでも短かった。

「樹。無駄にするなよ」

カチリ。

私がキーを押したのと大きな音をたてて扉が蹴破られるのは同時だった。

Answer 3”アガスターシエ”其の13-3

赤外線スコープをつけて私たちはセキュリティが解除されるのを今か今かと待ち構えていた。

今、私たちがいるのは正門と反対側。研究所の裏にある塀に背中をあわせて張り付いていた。

監視塔が敷地内の四隅に立っているので、それからもできるだけ距離を取りたかった。そして監視カメラの死角。塀を乗り越え中への侵入、敷地内へ侵入した後の研究所内へ侵入する経路を考慮したところ、この位置が一番良いルートだったのだ。

ういーん。

外堀の壁を張りめぐっていたセキュリティがダウンした。

「きた！ さすがツバキたん！」

私と樹はすぐさま、壁を越えて中に侵入した。

敷地内に着地したと同時にセキュリティシステムが再稼動する。

「さすがテトラポッド。ダウンしてからの復旧も早いな」と感心したように言う樹。

「私たちのセーフハウスのセキュリティシステムもお願いしたいくらいね」

私と樹は警備員に見つからないように影沿いを無音で進む。監視塔から照らされるライトが私たちの側を通り過ぎていった。

ちなみに中庭はライトで照らされており監視の眼が厳しいので通ることは難しい。監視塔二つの眼を盗み、中庭を抜けるような危険は冒すべきではない。

研究員たちが寝泊りをしている離れの宿舎の裏を通り過ぎ、研究所の裏に辿り着く。

そして私は廊下沿いのガラスにスプレーをプシューと吹きかけた。そのスプレーはガラスの特性である『ガラス転移現象』を利用した侵入用の道具だ。どういうスプレーなのか簡単に説明すればガラスに吹きかけられたスプレーには酸素に触れると、瞬間的にとてつもない高温となる物質が含まれているのだ。詰まり、ガラスを溶かすわけである。そして、冷めやすい性質を持ち合わせている。とすれば結果がどうなるか理解して頂けると思う。スプレーをかけた部分は溶けて下に流れ落ちつつ固まり、侵入用の穴ができるというわけだ。

「世の中便利になったもんだな。俺ならガムテープ張って肘で割るけどな」

「あんだどれだけ古い時代の人間よ。そのへんのコソドロでももうそんなことしてないわよ」

私と樹はその穴からするりと体を通して研究所の廊下に入る。

「ここからは別行動だな」

「頭に地図は入ってるわね？」

「誰に言ってるんだ。それよりもすっかり“コード：A”のデータ、
パクってこいよ」

「誰に言ってるのよ」

私のその言葉に樹はニヤリと笑って廊下を走って行った。

「シズル。私も動くわ」

『……………』

どうしたことがシズルからの返事が無い。

「シズル？ 大丈夫？ 何か不具合でも起きた？」

『……………』

……………いえ、何でもないわ。今は任務に集中して頂戴』

「分かってるわよ。後援頼むからね」

『……………ええ』

少し様子がおかしいシズルを怪訝に思いながらも私は研究所へと
向かった。

「……………ツバキ……………先輩……………」

私はそう小さく呟いてぎゅっと拳を握った。

ツバキ先輩との回線は切られたまま復帰する様子がない。

やり遂げた。

彼女はやり遂げたのだ。

彼女以外に誰も成し得ることができないだろう事を彼女はやった。

テトラポッド社の“スパゲッティ”……………さらに強固に書き換えられていた……………！

あの形式、組み換え方は……………現NKの“データバンク”と呼ばれる男。

私と同期だった元同僚。

「……………屋代っ……………！」

エリさんと新谷。二人にはそれぞれナビゲーターがついている。

エリさんにはシズルさんが。そして新谷には

『研究所の中に入ったオーバー』

「了解。目的地はそこから　ってなんで私がナビゲーターやってんのよ!？」

思わず激烈に叫んでツツコミを入れてしまう。

何の冗談か。水崎葵ことこの私がなぜか新谷樹のナビゲーターをやっているのだった。

『なんでって俺たちは一心同体。将来を誓い合った仲じゃないか』

「勝手に一人で誓ってなさい!」

『ツバキさんはシステムダウンさせるために別の所にいるんだから仕方ないだろ』

「はあ……せいぜい見つかって人体実験されないよう気をつけなさいよね」

そう言いつつ私はコーヒーカップを手取る。

『しっ!　静かに!』

「な、なに？ どうしたの？」

私は聞き耳をたてた。

『ありやなんだ……？ こっちにくる……まさかあれが実験の……』

「まさか“アポカリプス”ってやつ！？ 新谷！ 逃げて！」

『まずい！ バレた！ うわああああ！』

「新谷！？ ちょっと新谷！？」

まさか……あいつ……！

「やだ……嘘でしょ……樹！ 返事してよ樹！」

必死に呼んではみるものの彼からの返答は無い。

「そんな……」

どんと血の気が引いていくのが分かる。

「答えてよ樹！ 死なないで！」

『なーんちゃって嘘だぴょん』

「……は？」

思わず顔が引きつる。

『はい、デレ頂きましたー。ちなみに録音してあるからな』

『答えてよ樹！ 死なないで！』

聞こえてくる私の声。

『これからこれを目覚ましにしよう。良い気分で起床できそうだな』
『うむ』

「このポケナス！ さっさとくたばれ！」

『あ、おい、水さ』

私は馬鹿の弁護を聞く前に回線を閉ざした。

プツ。

んむ、少しばかりやりすぎたか。

そして俺は長く暗い廊下の先に眼をやる。

「さてと、可愛い声も聞けたしそろそろ頑張るかな」

ほいほいつとお手玉をしていた手榴弾を懐に忍ばせ、俺は暗闇の
中に姿を溶け込ませた。

Answer 3”アガスターシエ”其の14-1

私は自分の役割のために廊下を疾っていた。

研究員たちは研究所内にある宿舎に戻っているようだ。廊下には人っ子一人歩いていない。見回りの巡回経路にもこの時間、この地域は入っていない。

そして難なくその場所に辿り着く。

遺伝子操作研究室……ここね……。

腰からプラグを取り出すと、ドアに接続した。

「任せたわよ、シズル」

『ええ。一 秒で解けるわ』

ピピピ。

赤いランプが緑色に変わって、プシューと扉が開く。

『悪いわね。四秒だったわ』

「さっすがー。頼りにしてるわよ。」

それじゃあ、ドス黒い研究を拝ませて貰いましょうかね」

『監視カメラの画面は既に摩り替えているわ。くれぐれも気をつけ

なさいよ』

「分かつてる」

私は銃を片手に暗い部屋の中へと侵入した。

辺りを見回しながら植物のサンプルやホルモットたちが並ぶ部屋を進んでいく。

奥には無菌部屋があるようで、ガラス張りに囲まれた中央に人が寝られるほどの台が設置されていた。そしてその周りには何に対しても使うのかも把握できないような機材が置かれている。

私はハンドサイズの長方形型をした機器を取り出すと手近にあったパソコンにコードを繋いだ。

パソコン自体をこんな時間に起動させれば、機器関係を見張っている奴らが絶対に気づく。それを回避するためにアンサーたちはパソコンを起動させずにこの専用の外部装置でデータを開く。それがこの『クレアヴォヤンス』と呼ばれる機器である。

長方形のモニターにパソコンと同じような起動画面が映し出される。使い方はほとんどパソコンと変わらない。ただマウスの代わりに指で操作をするタッチパネル式というくらいだろうか。

最近のデータを開いてみた。

そこにはマウスから人間の耳が生えた資料が存在した。これはあまりにも有名な実験だった。耳がなくなった人間に移植するために遺伝子操作を利用してマウスに人の耳を育てさせるというものだ。

これは最も安価な遺伝子操作を利用した移植法なのである。金持ちの人間は自分のクローンを作ってそこから内臓などを移植しているようだ。倫理観の無い時代になったものである。

どれを見てみてもごくごく普通の遺伝子操作の研究資料。

まさか……ハズレ？　いいえ、そんな筈は無いわ。テトラポッド社が黒なのは明白。

つまり、ここじゃないのね。

私は部屋の中を見回した。

川澄みちるはこの部屋から一般人が逃げ出すのを見たと言っていた。絶対にこの部屋に何かがある。

私はスコープを暗視からX線に切り替える。そして再び辺りを調べ始めすぐに気づいた。

床に……扉がある？

下に通路があるのが見えたのだ。

問題はどうかやって中に侵入するかだが。

『なるほど。地下研究室ね。どこでもいいわ。辺りの機械にプラグを繋げて頂戴。開けるわ』

私のスコープからの画面を見ていたらしいシズルがすぐ様、私の悩みを解決してくれた。

プラグを差ししてほどなく、扉は静かな音をたてて開いた。

「おみごと。……っ！」

開いた瞬間。異様な腐臭が漂い私は腕で鼻を押さえる。

扉の下から現れたのは階段。

『どうやら正解のようね。かなげいわよ』

私が階段を下ろうとすると通信にノイズが走った。

「シズル？ 聞こえる？」

『まずいわね。その地下室、電波を通さない素材で作られているよ
うだわ』

「そう。それじゃあ、ここからは一人で行くわ」

『残念ね。“アポカリプス”、興味あつただけけれど』

「心配しなくても後でたっぷり見せてあげるわよ」

それを最後の言葉にして、私は階段を下っていった。

Answer 3” アガスターシエ” 其の14 - 2

俺の役割は爆弾をしかけること、そして菊を助けだすことだ。

周りに被害を出さないようにこの研究所を爆破して崩壊させるには決められた位置に爆弾を設置しなければならない。

もしそれを間違えてしまえば、この高いビルは斜めに倒れ、一般人の住宅に突っ込むことになる。

そうならないために俺は爆弾設置の位置を頭に叩き込まされた。要するにこの建物を内側に崩れるようにしなければならぬのだ。それもできるだけ爆薬は少なく、この建物が自分の重さで自壊するような形に持って行かなければならない。

その位置を計算したのはもちろん俺でなければましてやエリでもない。

ツバキだ。

爆薬の知識もあるとは……。やはり持つべきは優秀なナビゲーターということである。

この件が終わったら日頃の感謝を込めてツバキたんをハグしてあげないとな。

「げへへへ」

『なに不埒なこと考えてるのよ』

「か、かかか、考えてません！ それよりもちゃんと俺を追ってるんだろうな!？」

『見てるわよ。そこ、警備員の巡回区域に設定されてること忘れないでよね』

「ああ、覚えてる。お前こそ俺の結婚したい女の子ベスト5に設定されてること忘れるなよ」

『あんだね……。こんな時まで口説こうとするのやめてくれない？ こっちはナビゲーターなんてやらされて結構大変なんだから』

「つまり俺にタイプだと言われて動揺したってことでOKですか？」

『OKなわけないでしょ!』

「しっ。静かに。警備員だ」

『バレて追いかけられればいいのよ』

ふぬう！　なんて薄情なナビゲーターだ！　水崎なんて婚期のがしちまえばいいんだ！

俺は近くの階段の下にあるスペースに軽やかにごろごろと転がって身を潜めた。ダンボールがあればかの有名な御蛇様のように、被って敵を欺いたのに……。

懐中電灯を持った警備員がコツコツと足音を響かせて歩いてくる。

一通り周りを照らしだす警備員。

だがこの位置は階段に隠れて死角になっているため光で照らされることも無い。

誰もいないと判断したのだろう、警備員はそのまま階段を昇っていった。

俺は階段下から再びころころと転がって出てくると、立ち上がって先を進む。

『待つてよ。どこ行くの？ 爆薬を仕掛ける柱を通り過ぎたわよ』

言われ俺は足を止めた。

「水崎がちゃんと理解しているか試したんだ」

『……………。……ふーん』

「水崎がちゃんと理解しているか試したんだ」

『どうして二回言うのよ。どうして二回言うのよ。』

いいわよ弁論しなくても。私がちゃんと理解していて安心できたでしよ

くそー！ なんだよ、なんだよ！ ナビゲーターぶりやがって！
ただの女子高生のくせに！

俺はスーツの内ポケットから紙切れを取り出して、その柱に貼り

付ける。

この紙切れこそ爆薬なのだ。爆薬を柱に貼ると、その爆薬はすうーっと柱の色に擬態した。

これでまずバレることはない。

俺は次の場所へ向かうため振り返った。

『分かっているとと思うけど、次の設置位置は上の階じゃないわよ』

「……………」

俺は再び無言で振り返って歩きだす。

『はあ……………アンサーでも新谷は新谷ね……………。ツバキちゃんの苦勞が分かるわ……………』

水崎にため息を吐かれて、俺はとても泣きたい気分になった。

地下で研究されていたものは見るに耐えないものばかりだった。

私は培養液に満たされたその円柱形のカプセルに手をやる。

そこにはワニの足が生えたサメがじつとしている。

どうやらまだ生きているようでコポコポと培養液の中を気泡が浮いていた。

薄暗くかなり広い室内にはそんな遺伝子操作で生みだされた“キメラ”のカプセルが定間隔に配置されていた。

薄気味悪いわね。

どこかに情報を統括している場所があるはずだ。

私は抜き身の銃を持ったまま辺りを見回す。

そしてこのカプセル部屋と平行に、沿うようにガラス越しに隣の部屋があることに気づく。

再び私はスプレーでガラスを溶かしにかかる。強化ガラスのようだったが、それほど時間もかからずに穴が開いた。扉があるにはあったのだが、おそらく嚴重なセキュリティシステムが機能しているだろうし私が触るべきではないだろう。

隣の部屋に侵入すると、私は再びパソコンに『クレアヴォヤンス』のコードを指し込んだ。

そしてモニターに映し出される情報の数々。

その中でも最重要とされている項目。

“コード：A計画”の中に侵入を試みる。

暗証番号のロックが設定されていたようだが、『クレアヴォヤンス』は勝手に正しい暗証番号を検索して一文字づつ埋めていく。

おそらくファイルを開いた形跡は残ってしまうだろうが、それは構わない。

明日、研究員たちが気づいた時にはもう遅い。国家政府はテトラポッド社への告発準備を終えていることだろう。

さあ、見させてもらおうよ。あんたたちがひた隠しにして研究していたものを……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3899g/>

AnswereR

2011年4月8日01時26分発行